

大 分 市

多武尾遺跡 調査概報

1982

大分市教育委員会

序 文

多武尾遺跡の緊急発掘調査は、大分市立大東中学校の移転用地を発掘調査したものです。
用地はすでに周知されたところであり、試掘調査を実施し、その結果に基づいて東側部分は遺跡を保存するために盛土を行ない運動場とし、西側部分の校舎、体育館の建設用地部分を調査いたしました。

調査中、銅鐸圏外での小銅鐸が発見され、さらに溝の中にはおびただしい土器が出土しており、今後銅鐸の製作年代が解明されるのもそう遠いことでないように思います。

本書は今回の発掘調査結果の収録であります。広く活用されることを願うとともに、地元の方々はもちろん指導、助言をいただきました諸先生方をはじめ調査の意義と目的をよく理解され心から協力くださいました多くの方々に衷心より感謝申しあげる次第であります。

昭和 57 年 12 月 10 日

大分市教育委員会教育長 松 本 喜 義

例 言

1. 本書は、大東中学校新築移転に伴い、事前に実施した埋蔵文化財緊急調査の概報である。
2. 発掘調査は大分市教育委員会が、調査主体者となって昭和54年12月14より、昭和55年7月10日までを第1次調査とし、昭和56年10月6日より同年10月26日までを第2次調査として調査を実施した。
3. 本書の執筆は、担当した松田が行い、小田富士雄先生（北九州市立博物館主幹）に小銅鐸に関する玉稿をいただいた。
4. 出土遺物の実測は、主として松田が行い、牧尾義則（大分県文化課主任）、讃岐和夫（大分市社会教育課文化財係技師）の手をわずらわせた。写真については、杉崎重臣（現南大分中学校教諭）と松田が担当した。

本 文 目 次

第1章 序 説	1	4 掘立柱建築物	13
1 調査の経過	1	SB-1	13
2 調査員の構成	1	5 出土遺物	14
第2章 遺跡の位置と環境	2	石器	14
第3章 遺跡の調査	5	土器片加工品	15
第1節 調査の概要	5	土製品	17
1 住居跡	5	6 小銅鐸を伴う遺構	18
SH-1	5	SD-6	18
SH-3	11	小銅鐸	22
2 土墳墓	12	SD-3	38
SK-1	12	SD-7	49
3 溝状遺構	12	第4章 まとめ	55
SD-1	12	多武尾小銅沢の系譜	58
SD-2	12		

図 版 目 次

図版 1	多武尾遺跡と周辺の航空写真	63
図版 2	第1次調査区全景	64
図版 3	第2次調査区全景	65
図版 4	SH-1、SB-3.4.5、SK-1	66
図版 5	SD-6、SD-7	67
図版 6	SD-3出土土器	68
図版 7	SD-6出土土器	69
図版 8	SD-7出土土器	70
図版 9	小銅鐸、磨製石鏃、石庖丁	71
図版 10	高坏接合法、調整、布目、靱痕	72

第2章 遺跡の位置と環境

多武尾遺跡は、大分市の中心部より東南約 7.5 km、大野川の河口より約 6.5 km上った大野川の支流である乙津川の西の鶴崎段丘上、大分県大分市大字横尾字南城の辻に所在する。

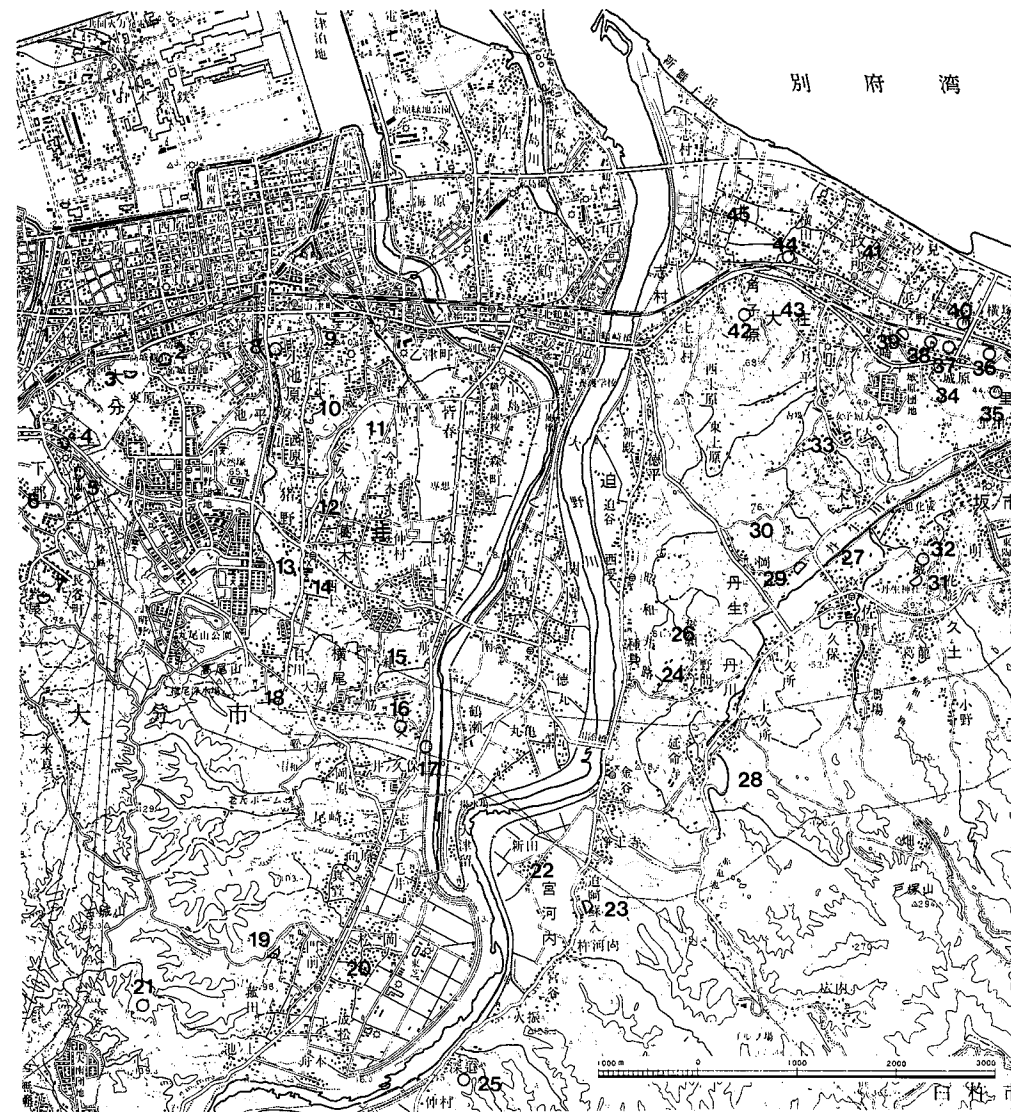
地形的には、標高 165 mの古城山を基部として南から北に延び別府湾を望む洪積台地の東端標高40m前後の鶴崎段丘上に位置する。東は大野川の侵蝕により崖となって乙津川を望み、さらに沖積地を挟み約 1.7 km離れて現在の大野川が北流している。その東側には丹生丘陵が海岸に延びており遺跡から一望できる。鶴崎段丘の西側は大分川の侵蝕により崖となり、大分平野を望む。

歴史的には、旧石器時代より人類の営みは始まる。多武尾遺跡では旧石器時代の生活跡は検出できなかったが、表採あるいは溝状遺構埋土中に削器、怪器、石核などが散見でき、石材は無斑晶流紋岩であった。大野川流域は旧石器時代の遺跡が県下で最も集中する所であり、特に中流域にある大野原台地は密集度が高い。^(註1) 下流域では丹生遺跡が存在し、条件を同じくする鶴崎段丘での発見は今後増加すると思える。^(註2)

縄文時代の遺跡は、鶴崎段丘上においては明瞭でない。おそらく後世の土地開発等による削平で消滅したのであろう。段丘下では多武尾遺跡の南約 750 mの距離に横尾貝塚がある。^(註3) それによれば、縄文時代の遺構は埋葬遺構、中期土壇、後期後葉の住居址状竪穴があり、土器は早期から後期に渡って検出されている。さらに多武尾遺跡の北西約 3.5 kmの段丘下で後期の小池原貝塚があり、かつて鶴崎段丘上に縄文各時代の人類の営みがあった事を証明している。^(註4)

弥生時代に至って、前期の遺跡は明らかでないが、明野団地造成時に土器、石器の散布が著しく、前期末から後期、土師式土器に至るまでの集落が存在したらしい。^(註5) 東岸の丹生台地では丹生、小原、一木、田尾、木田、平野の各地域で土器を採集しており、前期の集落を想定できる。^(註6) 中期は、米竹遺跡で下城タイプの甕形土器を採集している。^(註7) 後期に入ると遺跡数は爆発的に増加し、広範囲におよぶ。生活跡として米竹、北の崎、猪野、葛木、米良草、二目川の鶴崎段丘、岡、延命寺、丹川、城原、角子原の丹生地域が掲げられる。台地上は生活遺構が主流をなし、わずかに丹川に水田跡が認められる。埋葬遺構としては大在浜遺跡があり、弥生時代中期より古墳時代前期に渡って、埋葬遺構と供献された土器が多量に検出されている。^(註8) しかし後期の埋葬遺構は検出されておらず、いぜんとして高地、低地を問わず不明である。これは大野川流域を通じての現象であり、大分川流域に至っても守岡、雄城台、尼ヶ城、賀来中学校で成人用埋葬遺構は検出されておらず、大野川流域下と同じ現象をみる。^(註9) ^(註10) ^(註11) ^(註12)

古墳時代では、生活遺構は検出されていない。^(註13) この時代に低地域への集落の移動を想定できるが、守岡19号住居のように在地系土器と庄内系の土器が混在する時期には台地上に営んでおり、これは社会的な不安が残る時期と考えられ、移動はそれ以降と思われる。埋葬遺構につい



昭和53年修正測量 1:25,000地形図
国土地理院

1 牧 遺 跡	2 高 城 石 棺 群	3 松栄山横穴古墳群	4 北下郡横穴古墳群	5 穴井前横穴古墳群
6 羽 田 遺 跡	7 長谷横穴古墳群	8 小 池 原 貝 塚	9 米 竹 遺 跡	10 尾 崎 遺 跡
11 北 の 崎 遺 跡	12 猪 野 遺 跡	13 米 良 草 遺 跡	14 葛 木 遺 跡	15 多 武 尾 遺 跡
16 王 子 山 古 墳 群	17 横 尾 古 墳	18 二 目 川 遺 跡	19 ノ 谷 横 穴 古 墳 群	20 門 前 遺 跡
21 京 が 尾 遺 跡	22 新 田 遺 跡	23 阿 蘇 入 横 穴 古 墳 群	24 野 間 古 墳 群	25 大 内 古 墳 群
26 丹 生 遺 跡	27 丹 川 遺 跡	28 延 命 寺 遺 跡	29 岡 下 横 穴 古 墳 群	30 岡 遺 跡
31 城 下 横 穴 古 墳 群	32 原 経 塚	33 経 蔵 原 遺 跡	34 城 原 遺 跡	35 亀 塚 古 墳
36 湯 ノ 尻 古 墳	37 大 蔵 古 墳	38 城 原 天 満 社 裏 古 墳	39 竹 下 横 穴 古 墳 群	40 横 塚 古 墳
41 大 在 浜 遺 跡	42 王 越 古 墳	43 角 子 原 遺 跡	44 大 在 古 墳	45 下 志 村 遺 跡

第1図 多武尾遺跡と周辺の遺跡

ても鶴崎段丘上での存在は明らかでない。砂丘遺跡の大在浜遺跡には庄内式新段階から布留式に渡る時期の供献土器が多数検出され、その埋葬形態には壺棺、石棺があり、それぞれ時期を異にする現象がみられる。^(註14)明野台地の北西端に高城石棺群が知られているが、時期等についての詳細は不明である。

鶴崎段丘に墳丘を有する古墳の存在は、現在まで知られていない。^(註15)墳墓は段丘周囲の崖に横穴として構築されているのに対して、丹生川西岸に位置する丹生丘陵では、県下最大の前方後円墳である亀塚古墳が位置し、付近には大蔵古墳、城原天満社裏古墳が存在する。さらに大野川東岸の野間地区では、前方後円墳を含む10基の古墳群が所在し、これらの被葬者は海人系の集団にかかわる首長とみられている。

大野川下流域は海人系地域集団にかかわる地域であり、海上交通に重要な役割をなしていたことはいうまでもなく、瀬戸内海を媒体として畿内あるいは北九州、瀬戸内海沿岸の諸文化の影響は大であり、瀬戸内海から大野川を通じて県北西部にまでおよんでいたものと思える。下流域は、坂ノ市地区を含めて青銅器の発見例が集中する所であり、二目川（銅銚1）、京ヶ尾（中広銅銚5）、大在浜（中細銅剣4）、久原（細形銅戈1）、細（銅戈1）、木田名辺山（広形銅銚2、中広銅戈3）、丹生清水迫（平形銅剣1）^(註16)が掲げられ、特異な地域として注目される。

註1 大野町教育委員会「大野原の遺跡」 1980年

註2 財団法人古代学協会「大分県丹生遺跡第3次発掘調査概報」 昭和40年

註3 大分県教育委員会「横尾貝塚発掘調査概報」 1982年

註4 賀川光夫、橘昌信「大分県文化財調査報告 第13輯」「小池原貝塚」 昭和42年

註5 賀川光夫「大分県の考古学」 昭和46年

註6 富来隆、佐藤暁、杉崎重臣「丹生川遺跡の考古学的考察」 昭和37年

註7 昭和57年度大分市教育委員会調査「尾崎遺跡」では、下城タイプの甕形土器を伴う貯蔵穴を検出している。（未報告）

註8 大分県教育委員会「大分県文化財調査報告 第48輯」「浜遺跡」 1980年

註9 大分市教育委員会「守岡遺跡」 1979年

註10 大分県教育委員会調査による。 昭和46年～50年（未報告）

註11 大分市教育委員会調査による。 昭和53年 （未報告）

註12 大分市教育委員会調査による。 昭和55年 （未報告）

註13 昭和57年度大分市教育委員会調査中の「地蔵原遺跡」では布留併行期の多数の住居跡が認められると
の票焼憲児氏より御教示を得た。

註14 註8に同じ

註15 高橋信武氏より横尾貝塚の裏山に円墳と思われる古墳を2基確認したとの御教示を得た。

註16 九州歴史資料館「青銅の武器」 1980年

第3章 遺跡の調査

第1節 調査の概要

多武尾遺跡は昭和54年度の試堀の結果、学校用地全域に渡る集落遺跡である事が判明し、さらに、表採等で台地全体に渡って広がる事を明確にした。昭和54年度からの第1次調査は、校舎分約3000㎡、進入道路分約34㎡を対象として実施した。

精査の結果、弥生時代後期から室町時代後期に渡って遺構が検出された。遺構を時期別にみると、弥生時代後期（円形住居1軒、溝状遺構3本）、室町時代後期（溝状遺構2本）、近世（溝状遺構2本）、時期不明（方形竪穴遺構1基、土壇墓6基、溝状遺構2本、掘立柱建築物6棟、土壇3基）、出土遺物は、土器、鉄器、磨製石庖丁、磨製石鏃、石錘、ガラス小玉、土錘、土器片加工品があり、特に小銅鐸の発見は注目される。

遺構を伴わない遺物は、溝埋土中に旧石器時代の石器、縄文時代後期（鐘ヶ崎式）、弥生時代中期（下城式甕）などの土器片を散見できる。古墳時代後期の須恵器片、平安時代後期の内黒碗は柱穴から検出された。表採では火縄銃の弾丸と思われる鉛玉があり、あるいはこの地域内が古戦場であったと思われ、本報告で明らかにしたい。

奈良時代の遺構、遺物はなく、断続的に人々の営みがあったと思われる。

第2次調査では体育館分約360㎡を昭和56年度に調査し、円形住居跡2軒、溝状遺構1本、掘立柱建築物1棟を検出した、住居跡の時期は明確でないが、土器片などからすれば後期終末に求められよう。

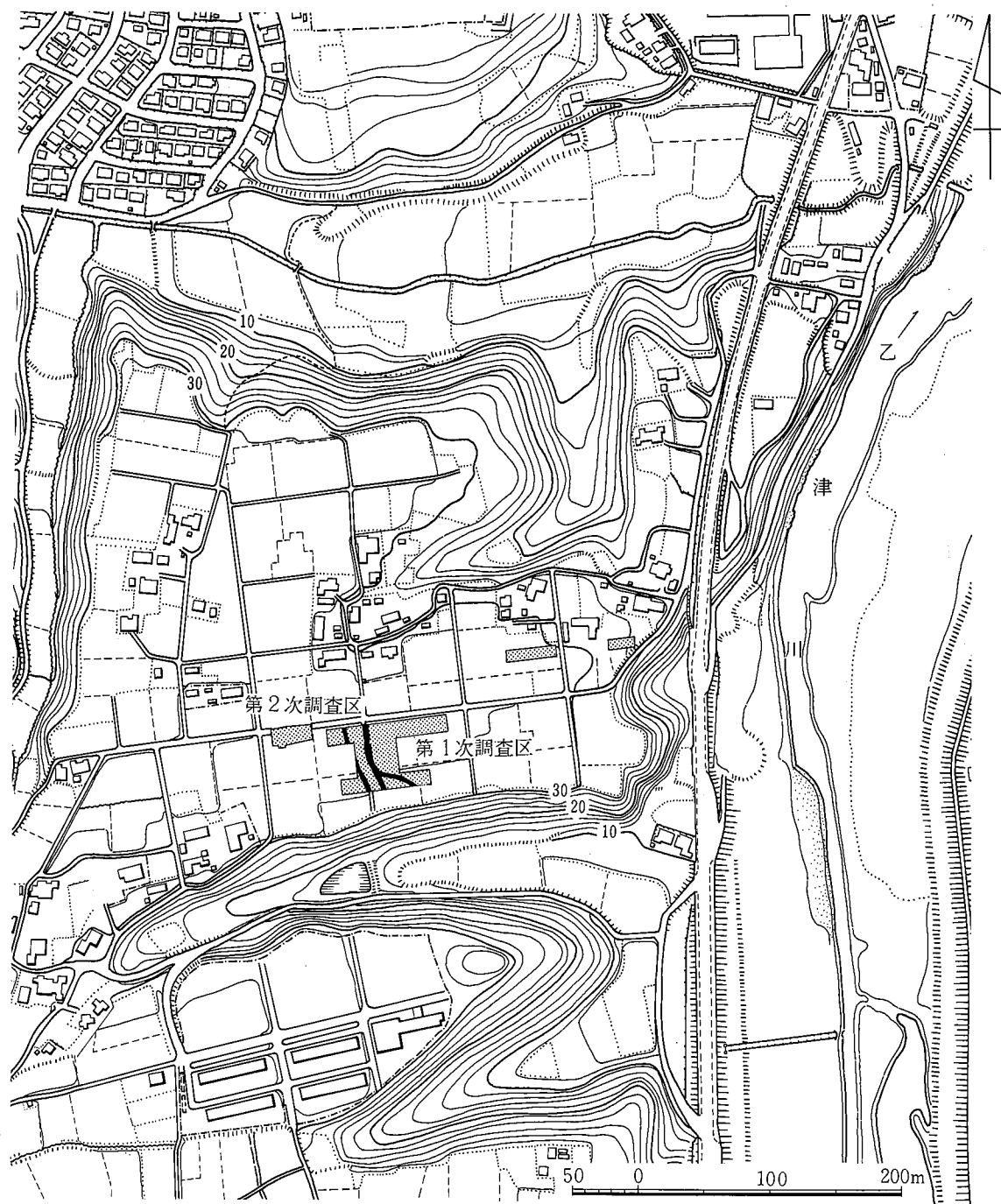
多武尾遺跡では、後世の耕地整理により削平され、数多くの遺構、遺物が消滅しており、時期、性格など明確にできなかった遺構もあり、整理上困難をきたした。

1. 住居跡

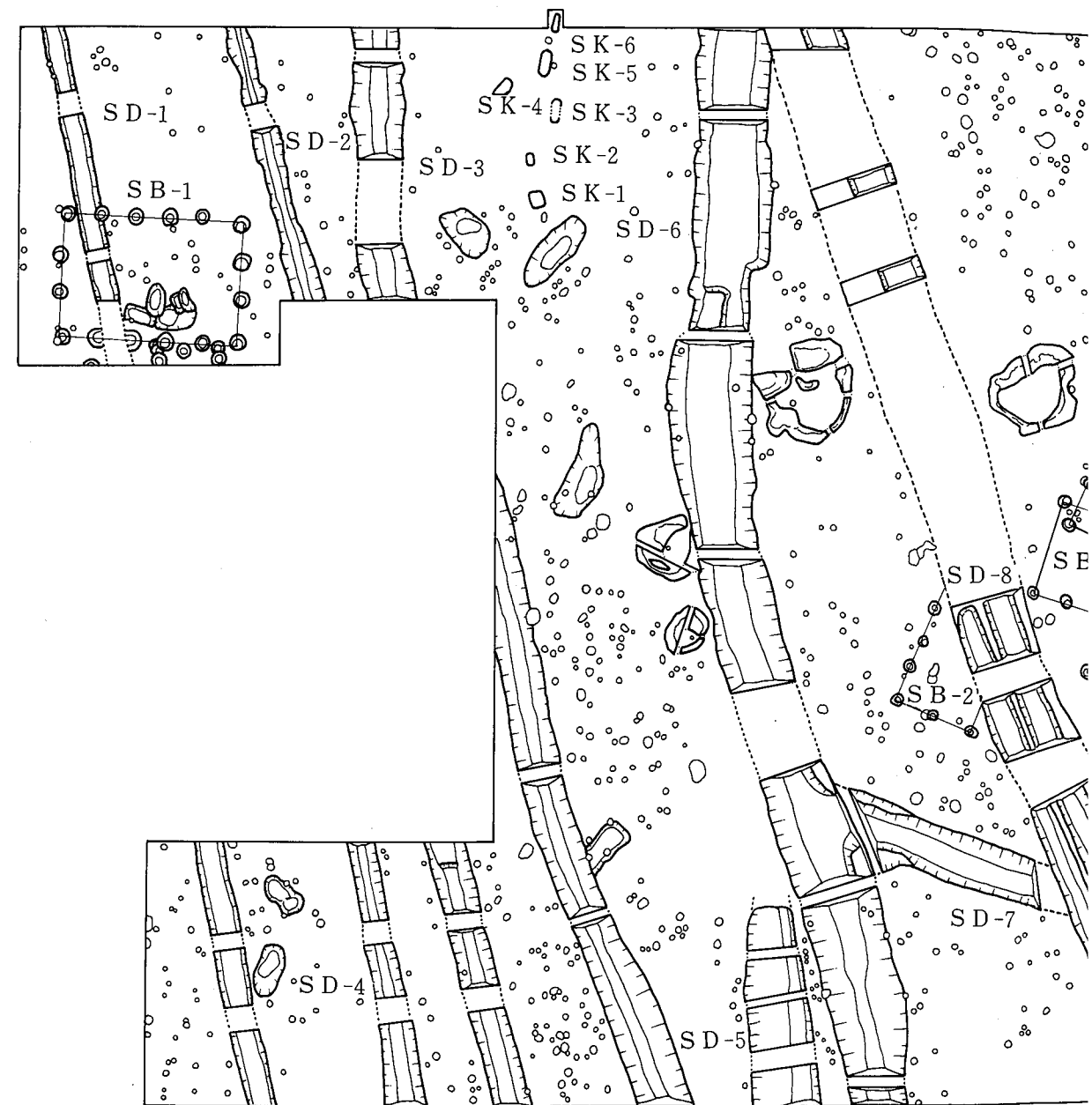
SH-1

E11区間に位置する。東側は削平を受け明確な形態は把握できなかったが、短軸6.2m、長軸4.5m以上の隋円形を呈すると思われる。柱穴は4本確認できたが、配置は明確につかめなかった。北側に巾1.4m、高さ4cmのベット状の高まりをみせるが、南側では段がつく程明確ではない。東端の長方形土壇は1.5×0.5m、深さ約20cmを測る。底部には灰が薄く堆積していた。

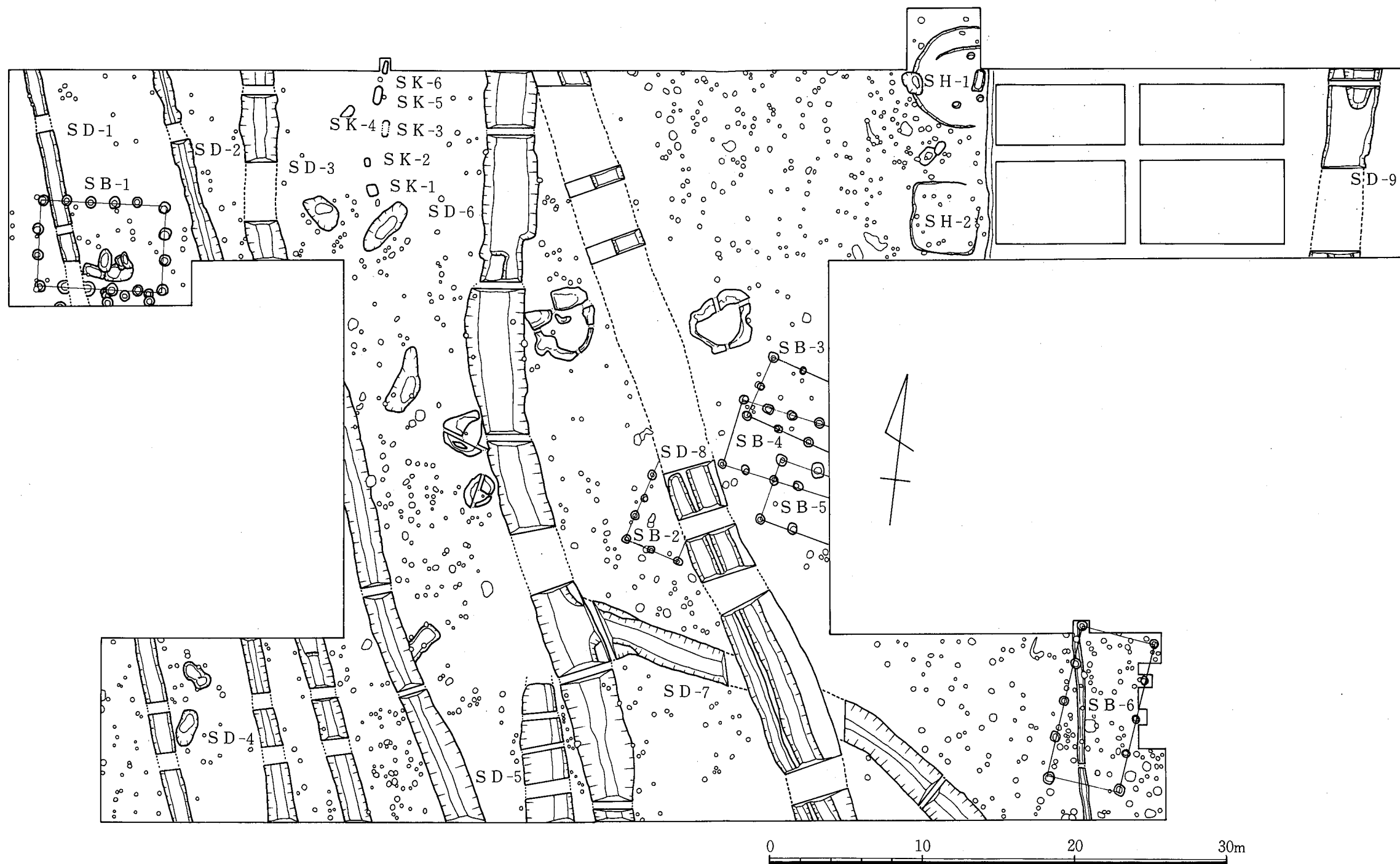
遺物は破片のみ散発的にみられる。1は甕形土器の口縁部、2は単口縁壺の口縁部、3は短く外反する高杯の口縁部、4は平底で底部近くに爪の圧痕をみる。2次焼成をみないところから小形の壺形土器かと思われる。5は土器片加工品で分類Aに属する。6は六角形の砥石で周囲6面と土面に研磨痕をみる。石材は乳白色を呈した軟質砂岩である。



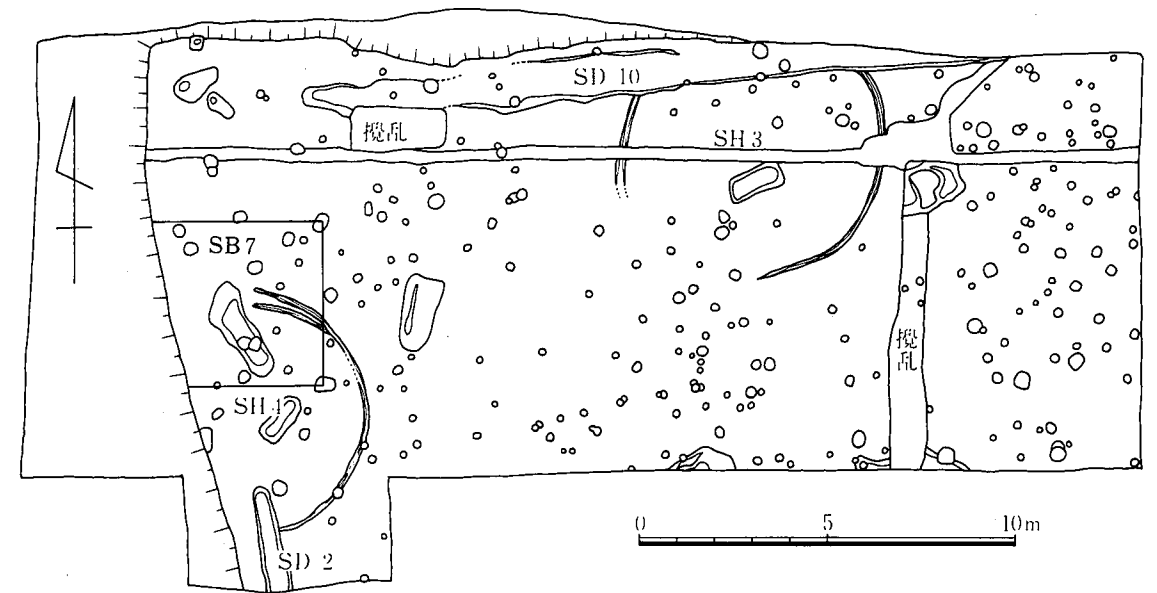
第2図 多武尾遺跡の地形



第3図 第1次調査



第3図 第1次調査区実測図



第4図 第2次調査区実測図

第2次調査区は、第1次調査区の西側約10m離れた所に位置し、体育館分約360㎡を調査した。

調査の結果、前回と同様に遺構の遺存状態は悪い。住居跡2軒、堀立柱建築物1棟、溝状遺構1本を検出したが、わずかに平面プランを確認できたに等しい。

SD-10は調査区の北側に位置し、巾約1.2m、深さ0.2mのU字形を呈している。東北東から西南西に走行し西側に行くに従って消える。遺物は須恵器小片を検出しているが、小片のため器形、時期的なものは判明していない。

SB-7は調査区の西側に位置し、SH-4を切っている。西側部分は削平のため不明であるが、長軸を東西方向にとり渠間2間(2.4m)を計る。桁間は不明である。

住居跡はSH-3・4共円形を呈するものと思われる。SH-1と異なり2軒共壁溝を周らせている。中央よりやや南東よりに長方形の土壇を有す点においてはSH-1と同様である。

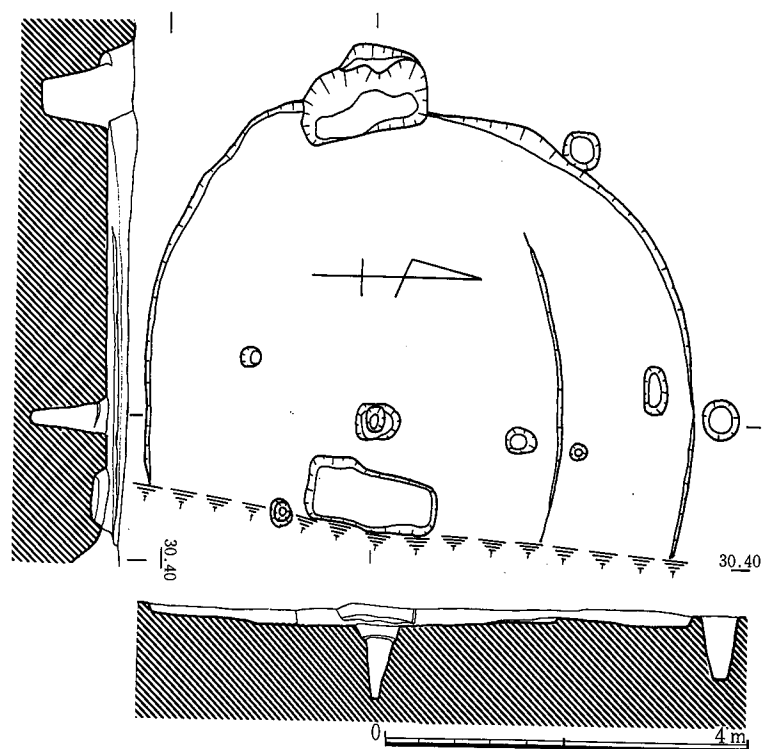
大分川流域の^(註1)守岡遺跡、^(註2)賀来中学校遺跡、^(註3)尼ヶ城遺跡、^(註4)大野川下流域の尾崎遺跡では弥生時代終末の住居跡に円・方形をとわず、長方形の土壇をみる事ができる。性格は明瞭でない。

註1 大分市教育委員会「守岡遺跡」 1979年

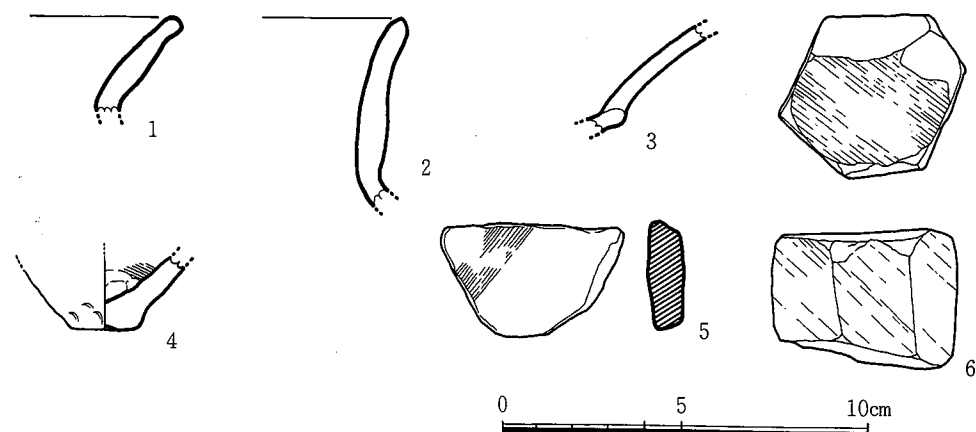
註2 大分市教育委員会調査による。 昭和55年 (未報告)

註3 大分市教育委員会調査による。 昭和53年 (未報告)

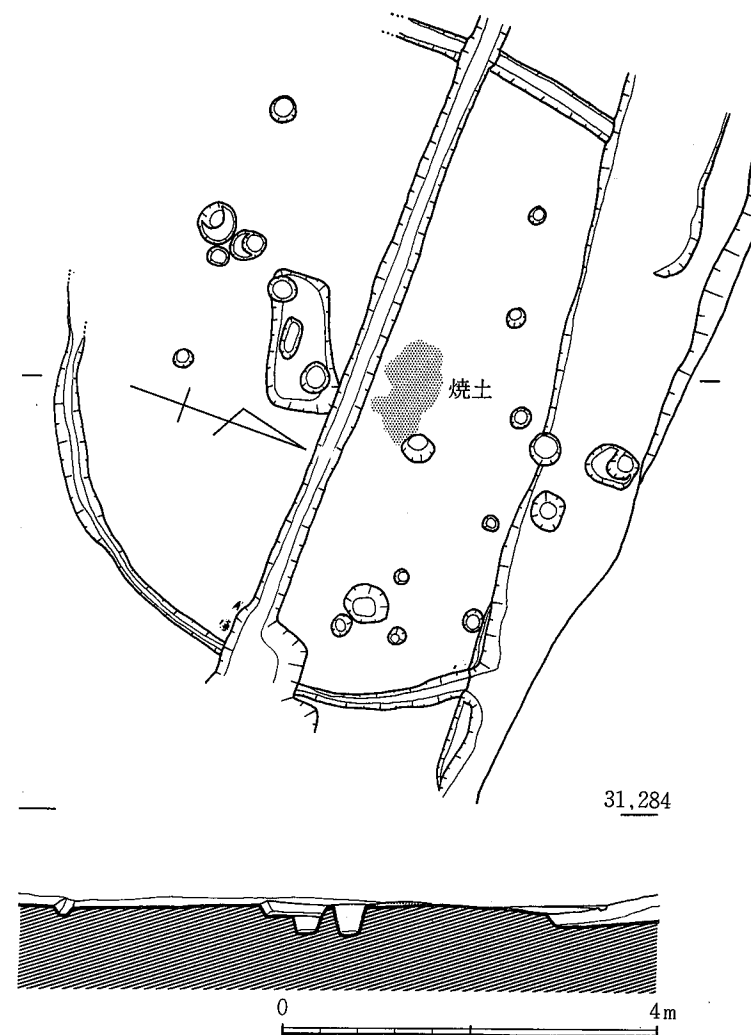
註4 大分市教育委員会調査による。 昭和57年 (未報告)



第5図 SH 1 実測図



第6図 SH 1 出土遺物実測図



第7図 SH 3 実測図

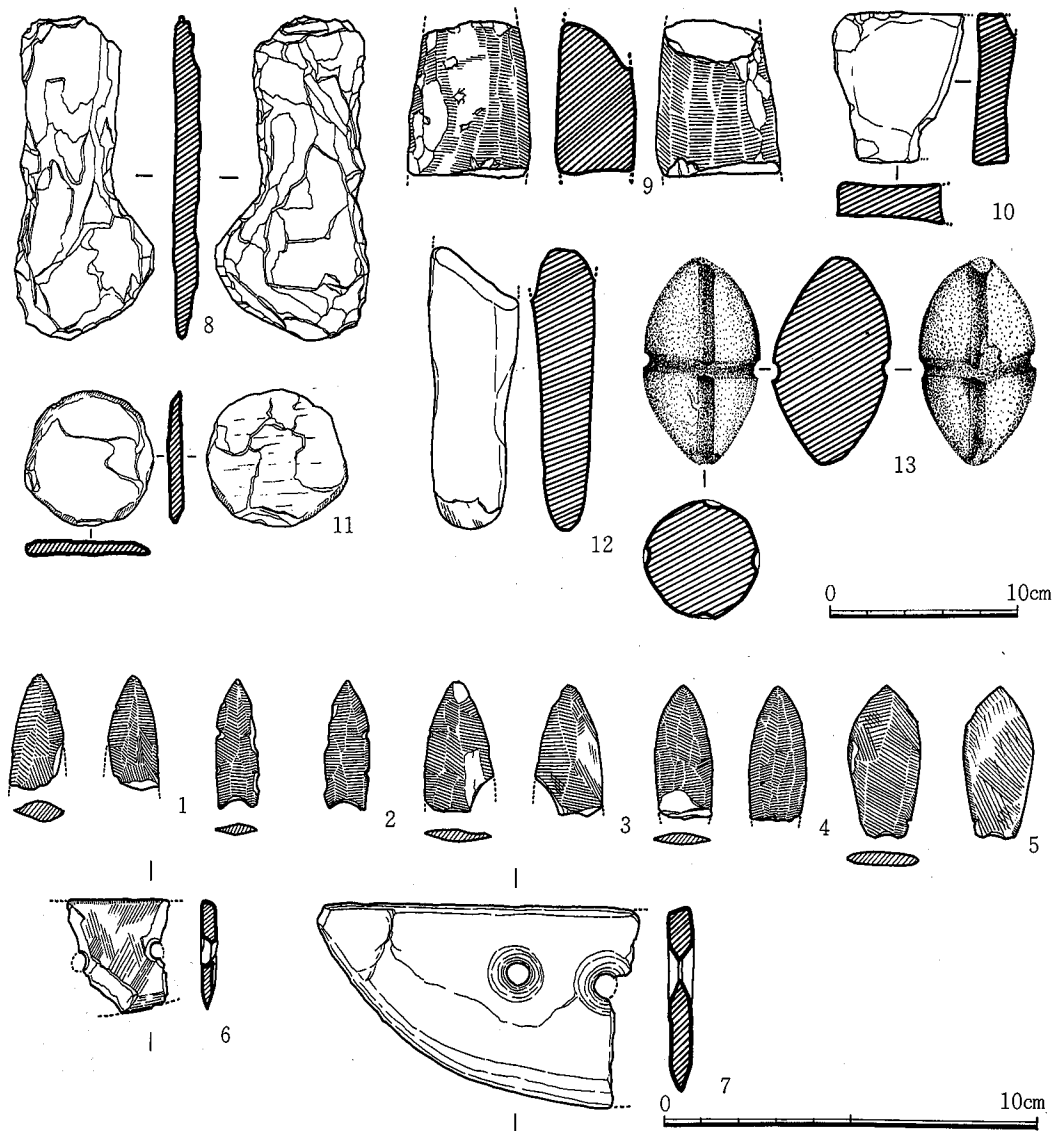
SH-3

SH-3 は壁溝のみ遺存し、わずかに形態を知る事ができた。径は約 7 m の円形を呈する。柱の配置は北側を SD-10 に切られ明確でない。炉跡は中央北側に位置し、掘り込みはみられず厚さ 6 cm の硬い焼土が堆積していた。炉跡の南側に 1.2 × 0.5 m、深さ 16 cm の長方形の土があり底部に薄く灰が堆積していた。遺物は散発的で、磨製石庖丁片、磨製石鏃を検出している。

5. 出土遺物

住居跡より検出した遺物は磨製石鏃1点、磨製石庖丁片1点、砥石1点の計3点、土器類は破片の程度で、他は溝状遺構埋土中、表採によるものである。

石 器



第11図 石器実測図

遺物No	器 種	出土遺構	現存長	現存幅	厚 さ	石 材	備 考
1	磨製石鏃	SD-3	3.0	1.45	0.5	粘板岩	基部欠損
2	磨製石鏃	SD-6	3.4	1.2	0.3	粘板岩	凹基無茎、柳葉形、側部部分欠損
3	磨製石鏃	SD-6	3.5	1.8	0.35	粘板岩	基部欠損
4	磨製石鏃	SD-6	3.6	1.1	0.3	蛇紋岩	基部欠損
5	磨製石鏃	SH-3	4.1	1.9	0.3	蛇紋岩	凹基無茎、柳葉形
6	石庖丁	SH-3	3.1	3.1	0.5	粘板岩	両端部欠損、両面穿孔
7	石庖丁	SD-3	8.5	5.4	0.7	結晶片岩	端部欠損、半月形を呈す。両面穿孔
8	偏平打製石斧	H-8表	17.2	8.3	1.6	結晶片岩	鍬形を呈す。
9	磨製石斧	SD-6	8.2	6.5	4.3	蛇紋岩	両端部欠損、敲打により整形しのち研磨
10	砥石	SD-6	8.0	7.0	2.0	砂石	両面側部を使用
11	円盤状石製品	SD-6	7.1	7.8	1.0	結晶片岩	端部周囲を研磨
12	敲打石	表採	14.8	4.7	1.7	片岩	下部に敲打及び磨滅痕上部欠損
13	石錘	SD-3	11.0	6.2	6.2	安山岩	全体に敲打のち研磨切目は研磨となる。

表1 石器観察表

※単位cm

土器片加工品

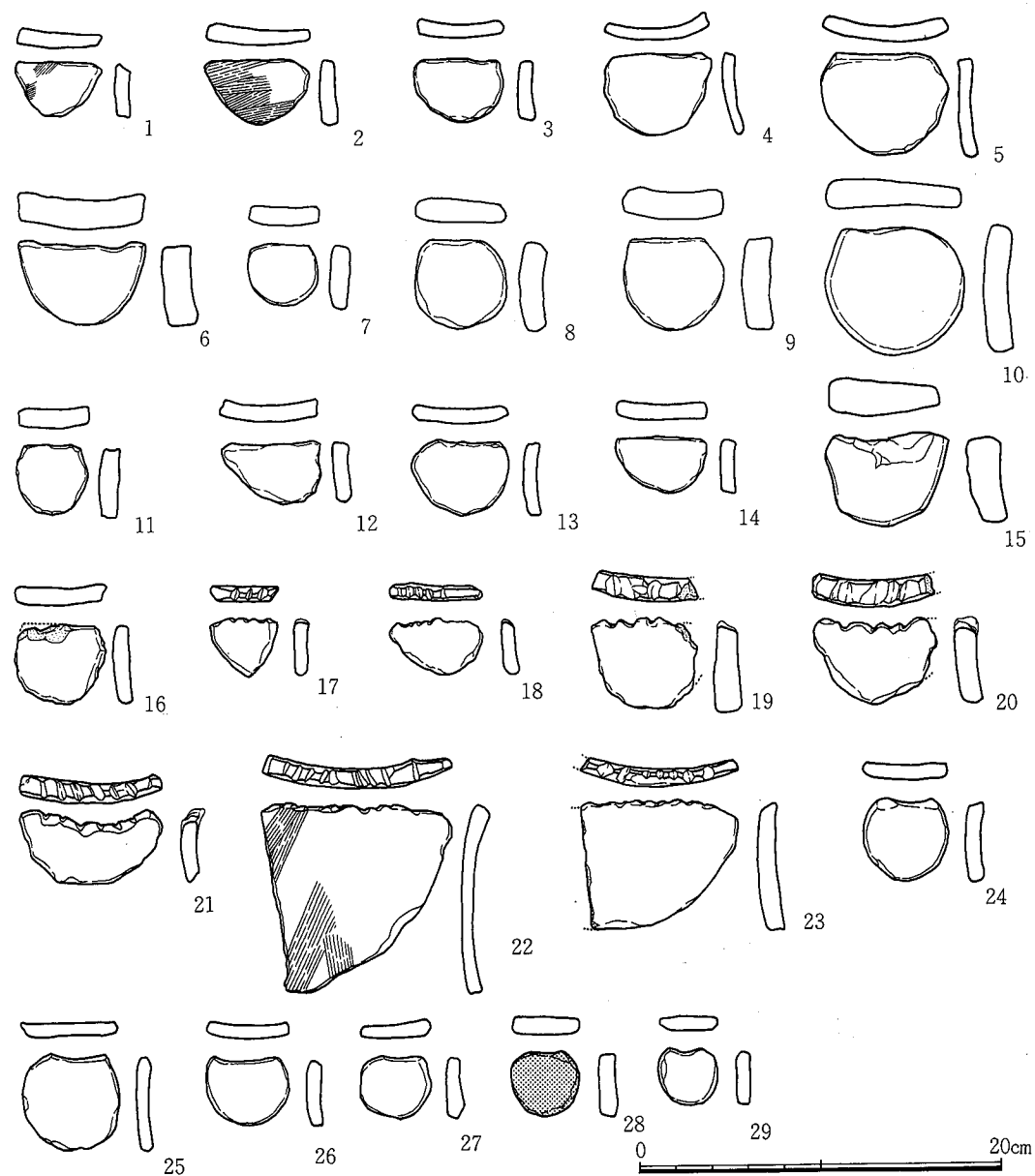
土器片加工品（メンコ状土製品）は、大野川中流域に集中して出土し、上流域でも少量ながらみられ、さらに大分川流域^(註1)においても少量の出土をみるに至っている。

多武尾遺跡は大野川の下流にあたり、今回の出土により大野川全流域に渡っている事が判明し、土器片加工品が河川を通じての集落に限定できる事が濃厚になってきた。

用途について、これまで形を整えるための研磨か、あるいは使用による磨滅か限定できなかったが、多武尾遺跡ではH類中1点、赤色顔料を塗ったものが検出された。これは土器片加工品の最終段階のものとみられ、製品の1形態を知る事ができた。

分類	形態	形態の特徴	SH-1	SD-2	SD-3	SD-6	SD-7	表採
A類		全周が研磨(磨滅)され半月形を呈する。	1	0	1	6	1	1
AI類		A類と同形であるが弦部の研磨(磨滅)が見られない。弧部のみ加工。	0	1	1	2	1	0
AII類		A類と同形であるが弧部の研磨(磨滅)が見られない弦部のみ加工。	0	0	0	1	0	0
B類		A類に近いが平面片方が尖る。尖頭部に加工が集中。	0	0	0	0	0	0
C類		形態はA類であるが弧部の弦部の近い位置にノッチを有する。	0	0	0	0	0	0
D類		A類の形態の弦部に大小のキザミを有する。	0	0	4	3	1	0
E類		A類を半折した形態のもので再利用の可能性はある。	0	0	0	0	0	0
F類		不定形であるが、方形及び台形に近い形態	0	0	0	0	0	0
G類		多角を有し円形に近い形態	0	0	3	6	0	0
H類		G類に近いが、凹部を有する。全周研磨(磨滅)	0	0	2	4	0	0

表2 土器片加工品分類表 註2

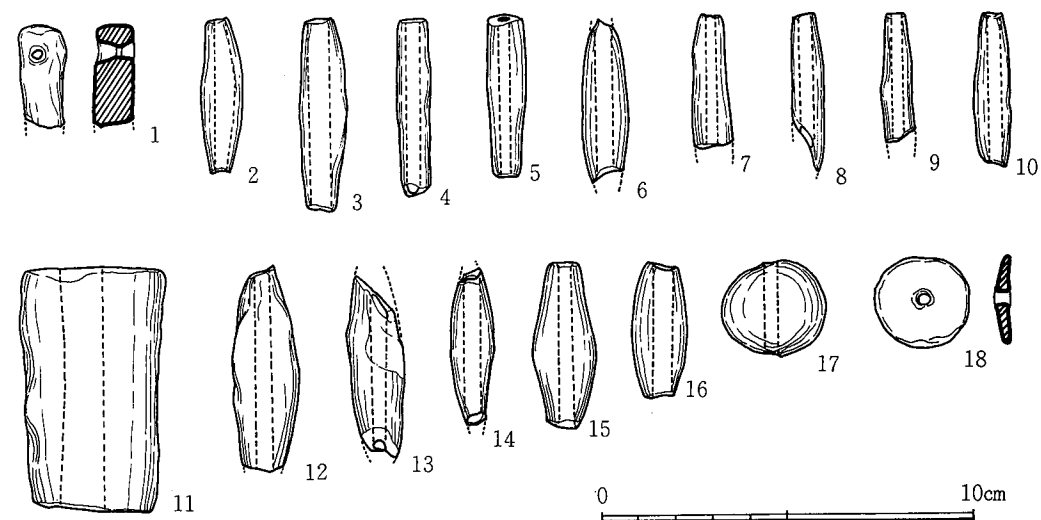


第12図 土器片加工品(メンコ)実測図

註1 大分市教育委員会調査の尼ヶ城、賀来中学校遺跡の溝状遺構から少量検出している。

註2 土器片加工品の分類は大野町教育委員会「大野原の遺跡」1980を引用した。

土製品



第13図 土製品(土錘)実測図

遺物No.	出土遺構	現存長	現存幅	形態	遺物No.	出土遺構	現存長	現存幅	形態
1	SD-2	2.8+α	1.2	有孔棒状土錘形	10	SD-5	4	1.0	管状半紡錘形
2	SD-2	4.1	1.1	管状半紡錘形	11	SD-6	6.5	3.8	管状筒形
3	表 採	5.1	1.3	管状半紡錘形	12	SD-9	5.4	1.8	管状紡錘形
4	表 採	4.7	0.9	管状筒形	13	SD-9	4.8+α	1.0	管状紡錘形
5	表 採	4.3	1.1	管状筒形	14	SD-9	4.1+α	1.2	管状紡錘形
6	表 採	4.3+α	1.3	管状紡錘形	15	SD-9	4.4	1.7	管状紡錘形
7	表 採	3.5+α	1.1	管状紡錘形	16	SD-9	3.7	1.5	管状紡錘形
8	SD-6	4.2+α	0.9	管状筒形	17	SD-6	2.6	2.8	球状形
9	表 採	3.5+α	0.8	管状半紡錘形	18	SD-6	2.4	0.4(厚み)	紡錘車

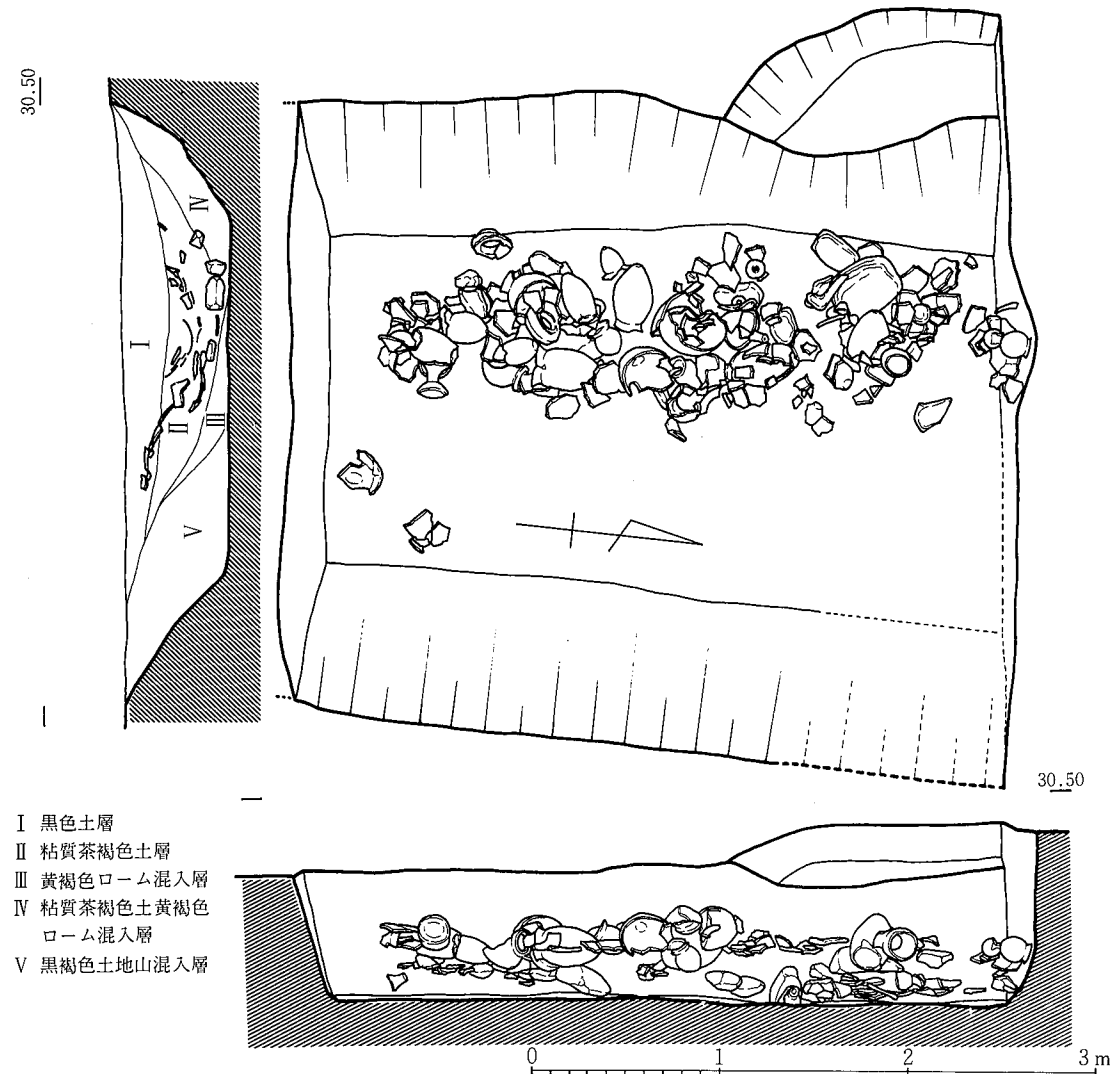
表3 土製品(土錘)観察表

※単位cm

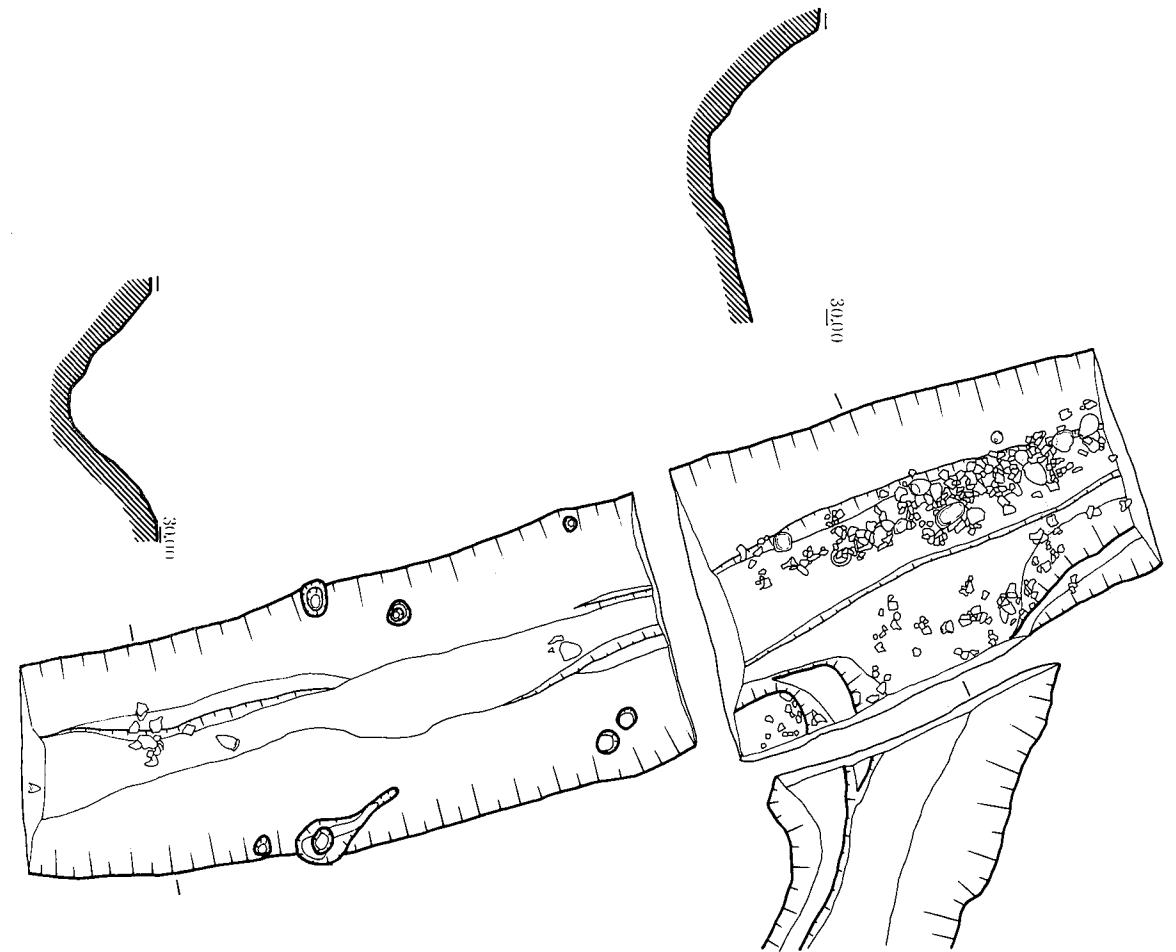
6. 小銅鐸を伴う遺構

SD-6

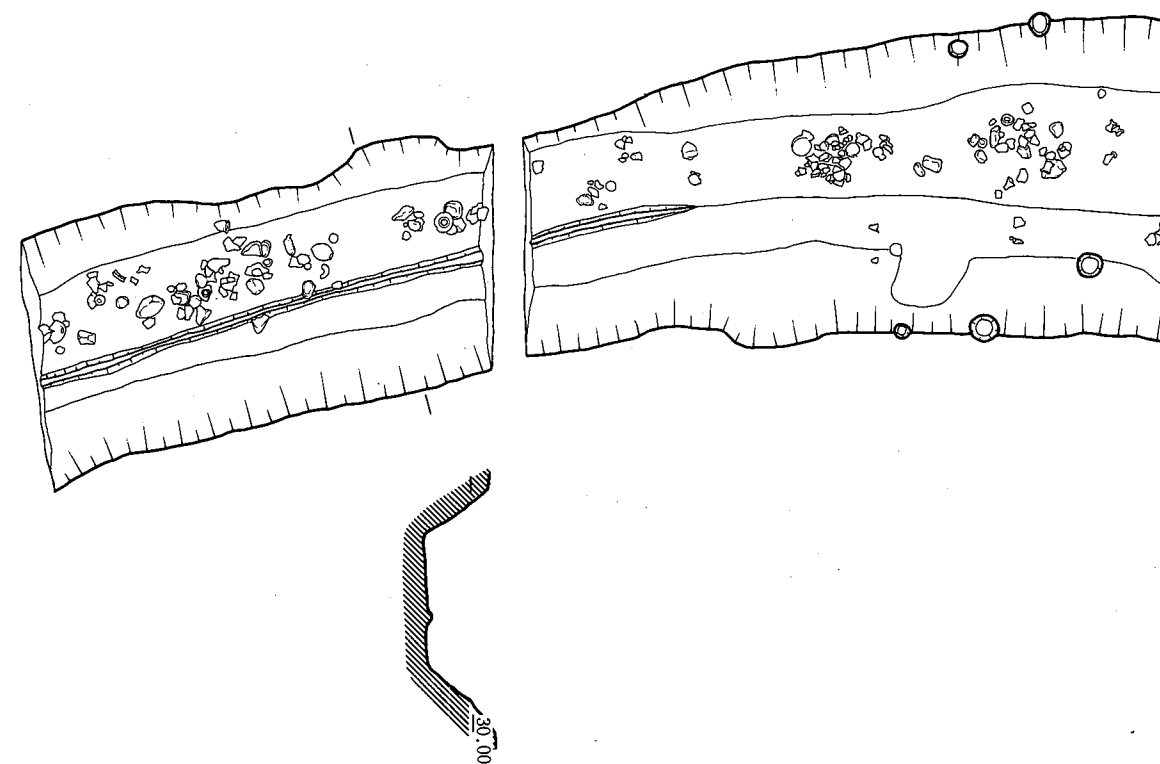
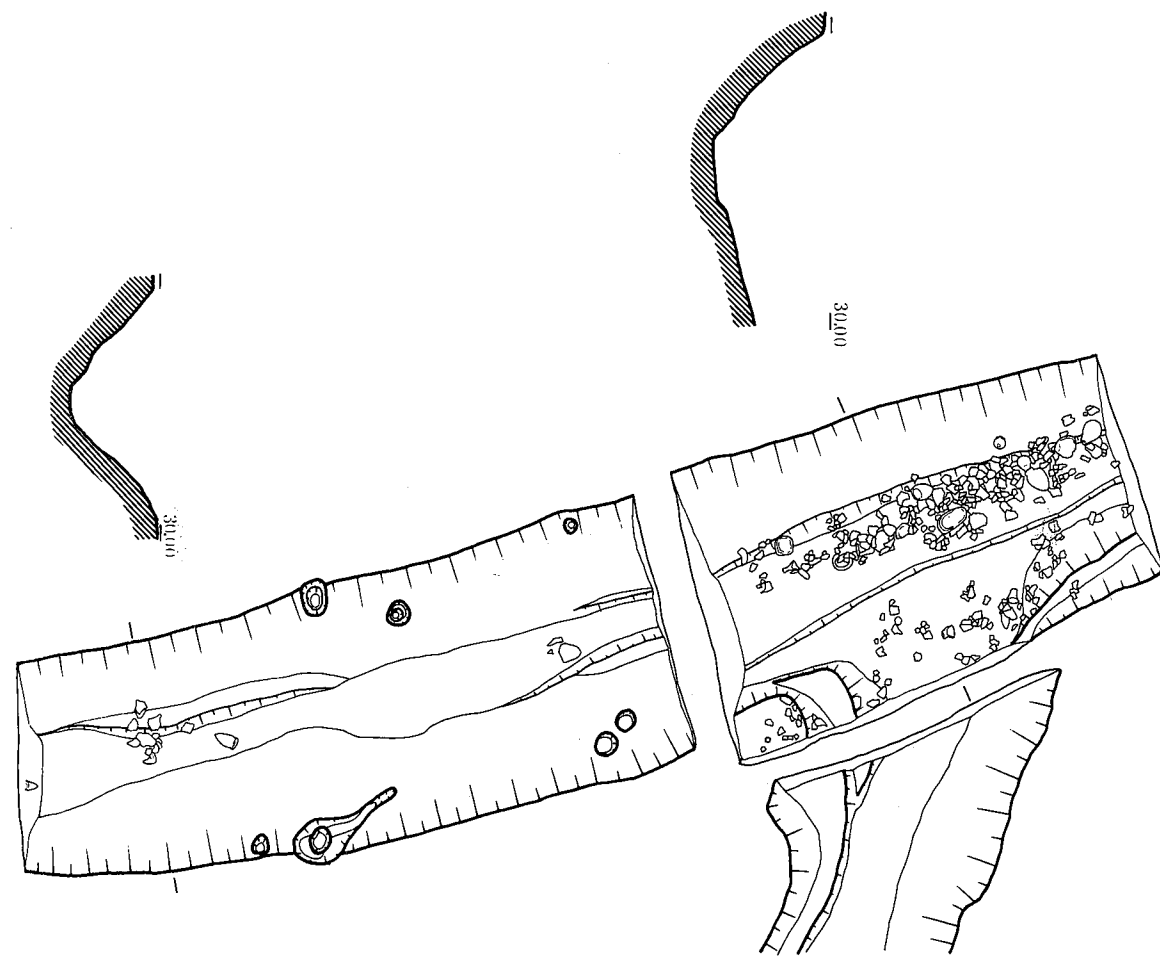
J7区～E8区に位置し、南から北北西に延びG8区から北に走向を変え弧状を呈する。巾3～4m、深さ0.6～1.1m、北端が最も浅く、底部も平坦な面で南に下るにしたがって深くなり、断面梯形状からV字状に形を変える。SD-3と平行しながら南の谷から北走し、東から入ってくる小規模の谷に続く囲郭遺構である。SD-3にみられなかったが、SD-6の土層断面には、弧の東側からの流れ込みが著しく、その為土器などの状態は西側に帯状に連なって検出された。特にNT区では顕著にみられる。この状態はSD-7と接する所まで観察でき、このことはSD-6東側に土塁、あるいは堤状の施設を想定できる。



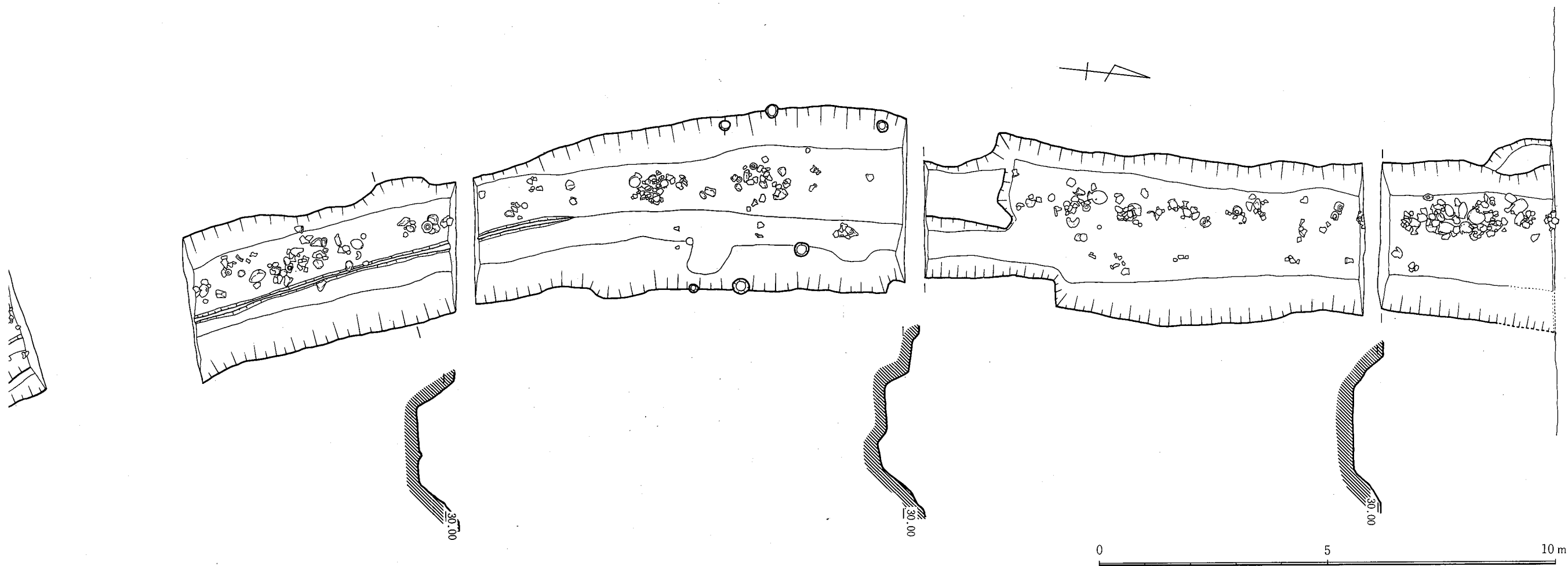
第14図 SD6 - NT土器出土状態



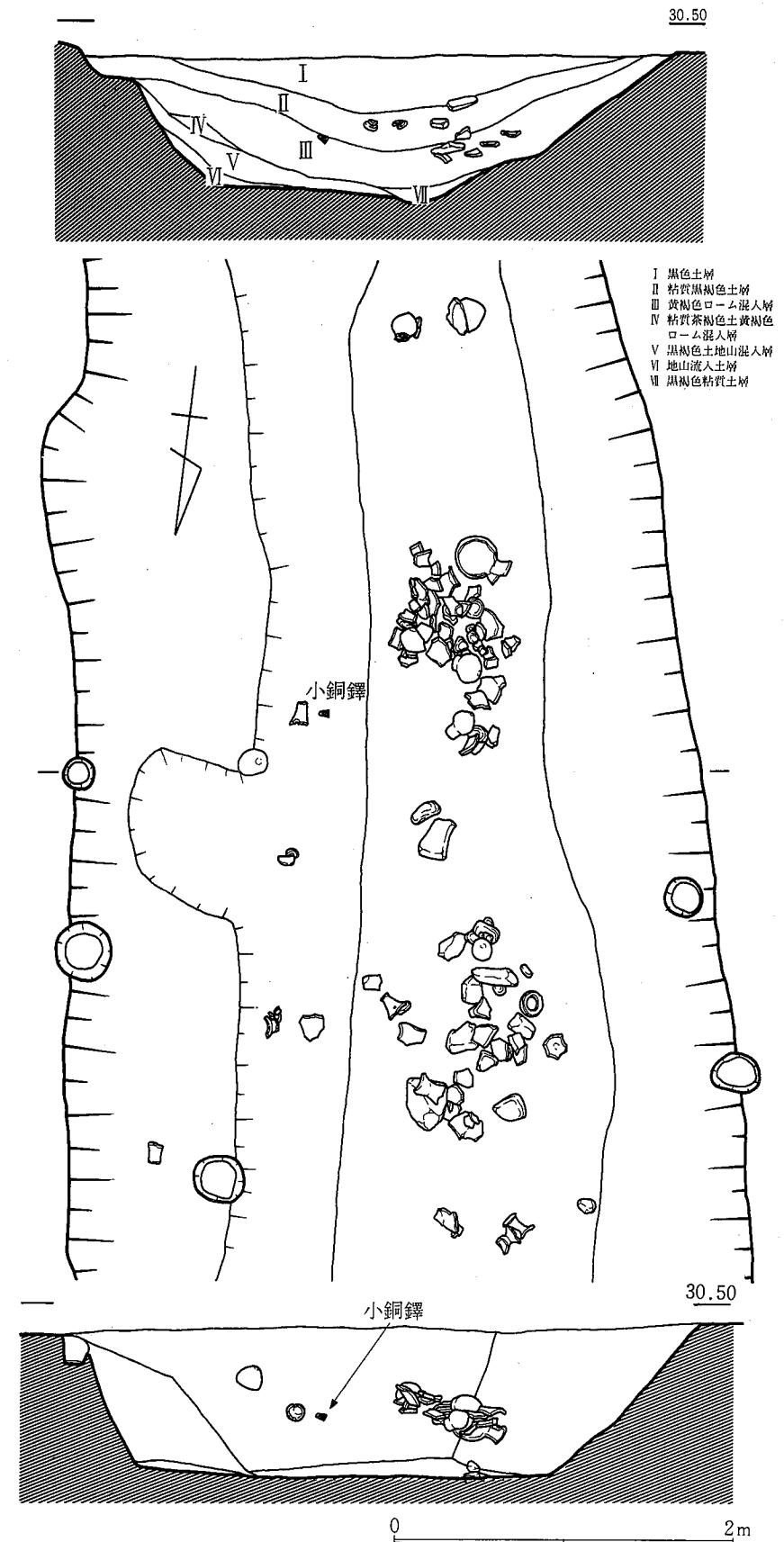
る。巾
て深く
、東か
6の土
重なっ
条でき、



第15図 SD



第15図 SD6 状態実測図



第16図 SD 6小銅鐸出土実測図

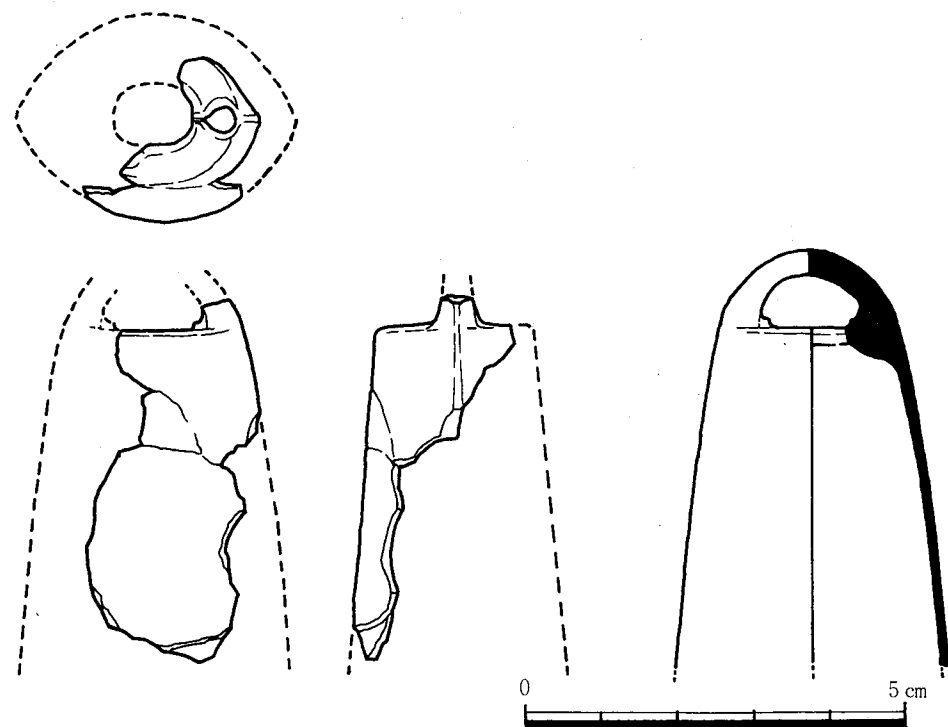
小銅鐸

小銅鐸はSD-6、G8区のやや東寄りの位置、Ⅱ層とⅢ層との間で鈕を東側に身を西側溝内に向けて発見された。状態は穴を掘って埋納したとみられる施設も行為もみられなかった。おそらく土器と同様に廃棄されたものと思える。

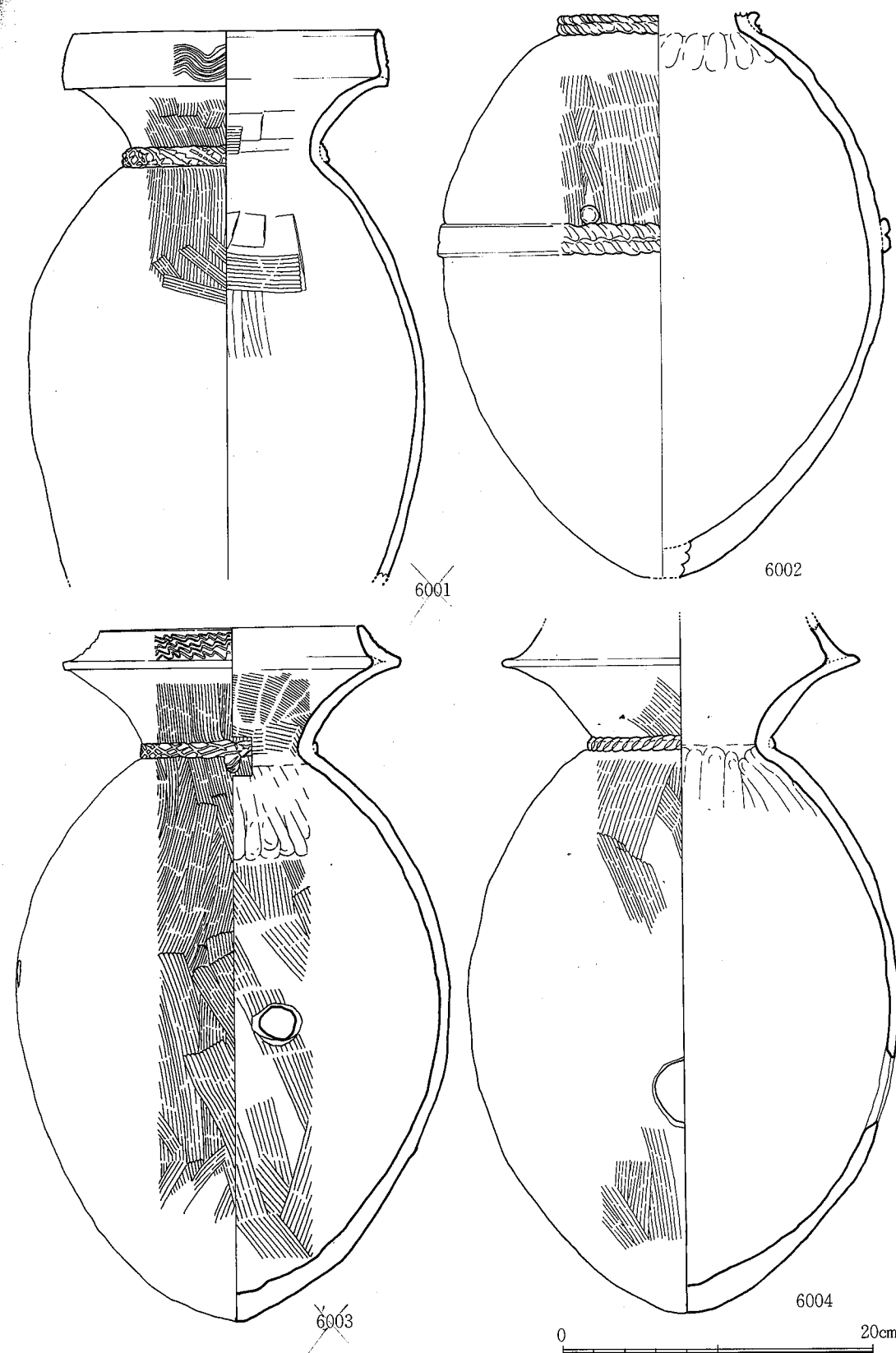
小銅鐸は鈕を欠き裾を欠く状態で、身も半分以上はなく全体の $\frac{1}{3}$ に相当する。遺存状態での計測は縦4.7cm、紐0.4cm、舞巾長軸1.7cm、短軸1.8cm、鐸身縦4.3cm、鐸身の厚さ1mmを測る。

鈕は内傾し菱形環を形成するとみられ、内側に鑄放しのままで鑄型の合わせ目に生じた鑄余りがみられる。舞孔は通常短軸上に紐の西側に1対の孔をみるが、多武尾例では中央に1孔、製作時より 1×0.8 cmの隋円形が穿たれてあった。半円形と思われる紐に続く鐸身は、裾開きとなり、無文である。また中央部四方に通常みられる方形の型持孔はなく、裾部は不明で内部は中空である。

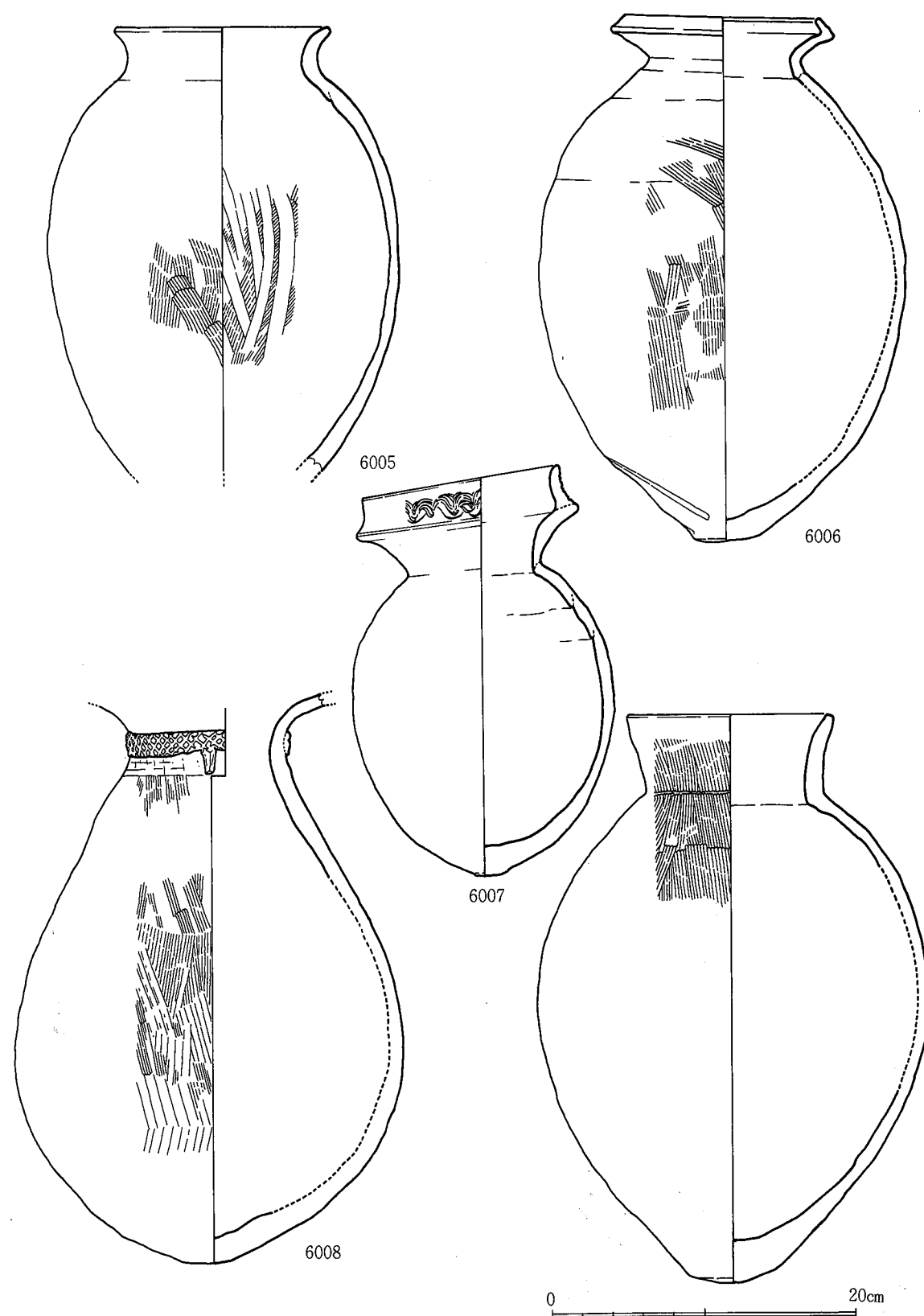
復元すると、縦5.5cm以上、舞巾長軸2.4cm、短軸2cm、裾部は長軸3.5cm以上、短軸2.8cm以上程度を測る。この計測を基に朝鮮式小銅鐸と比較すると、かなり小形ではあるが、外形は朝鮮式小銅鐸の特長となんら相異は認められず、異なる所は舞孔、型持せの孔の2点である。



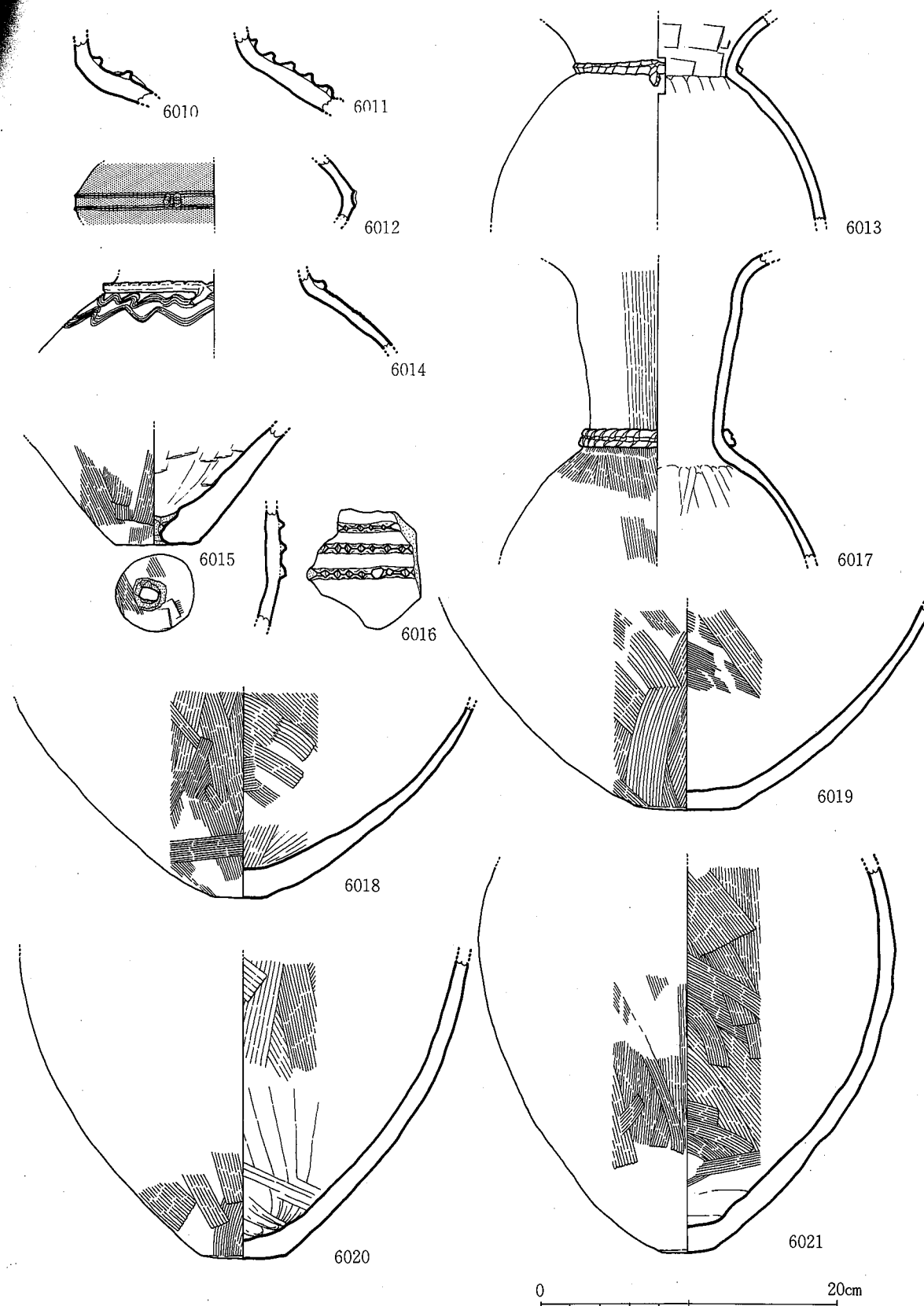
第17図 小銅鐸実測図及び復元図



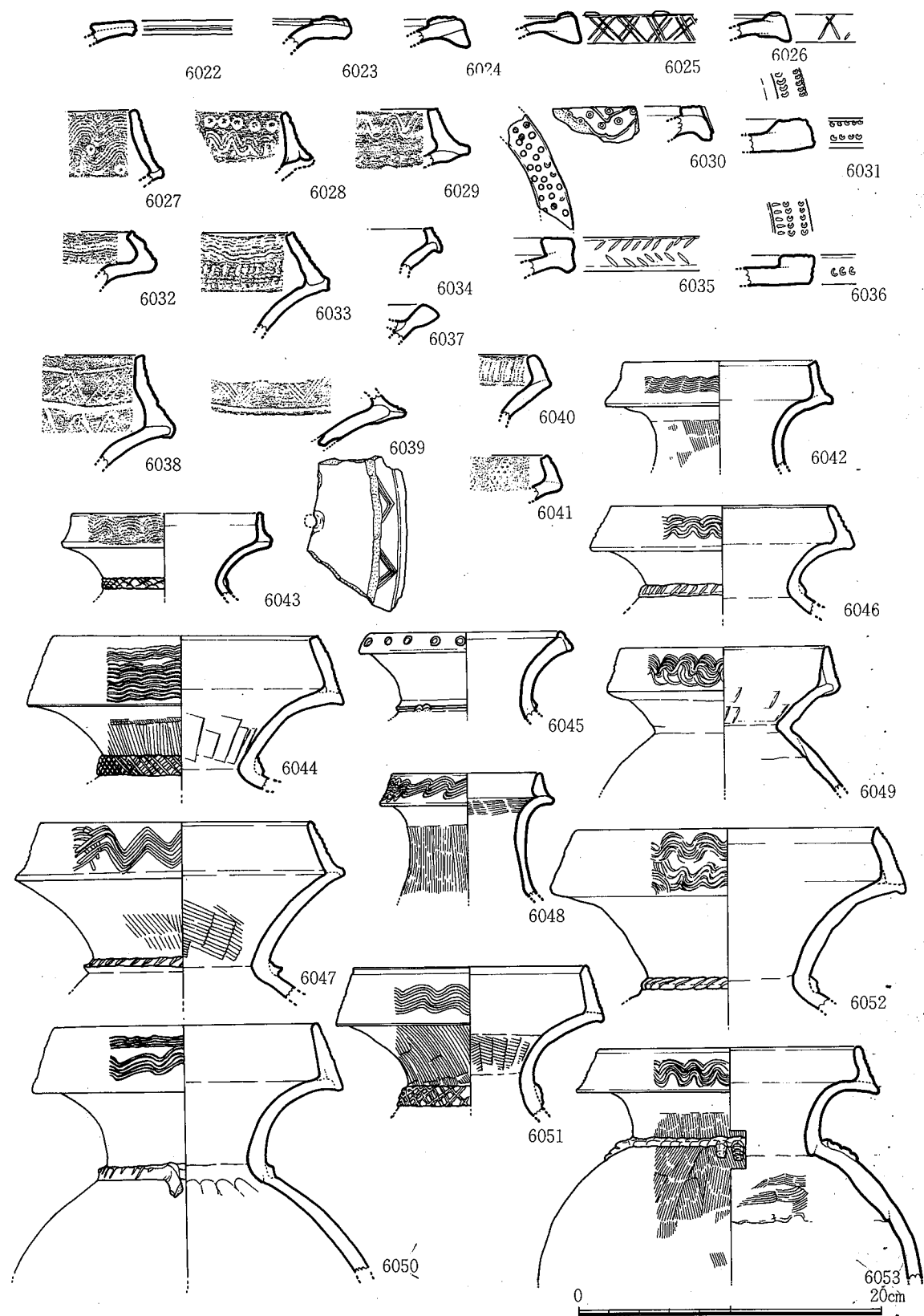
第18図 SD 6 出土土器実測図



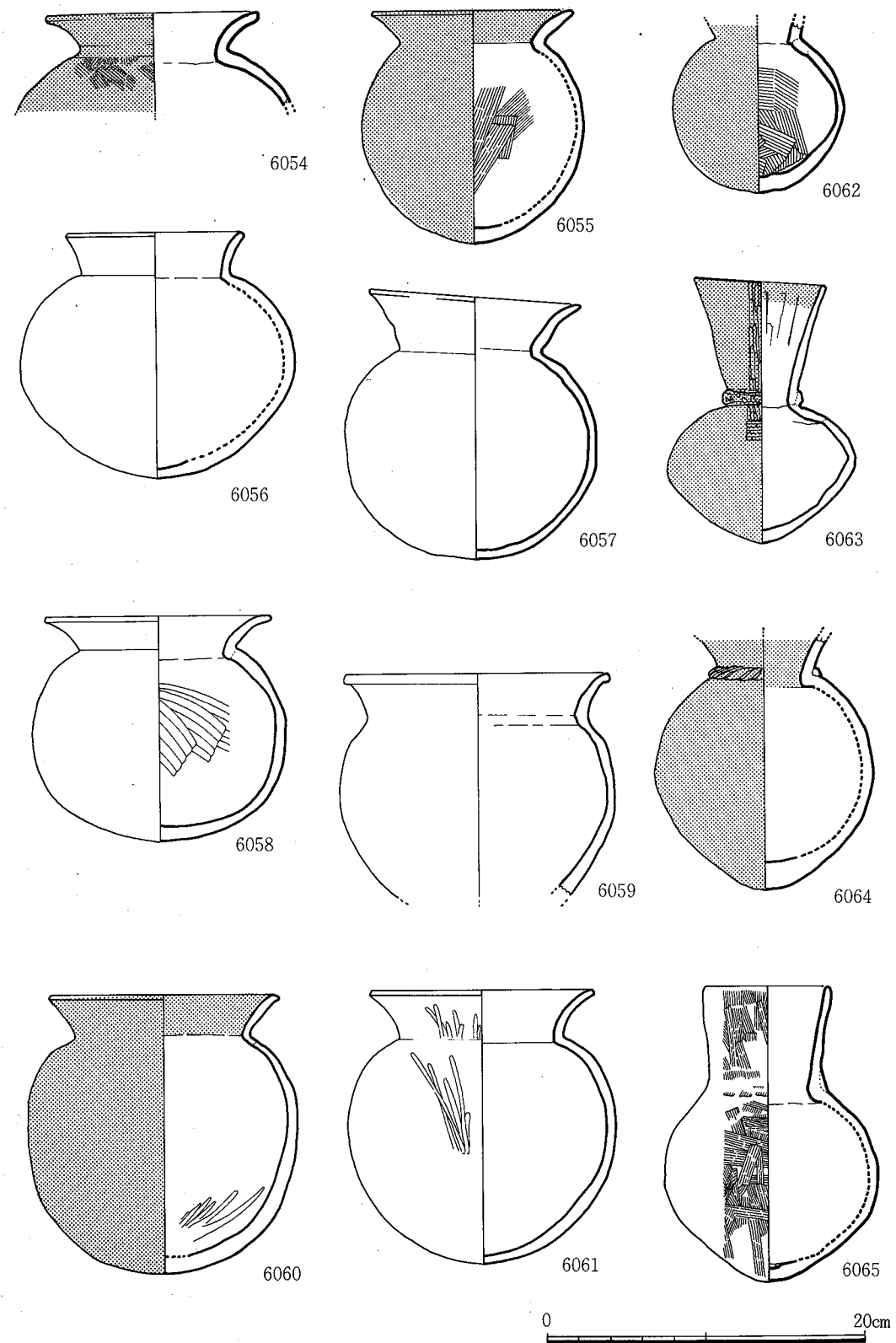
第19图 SD 6 出土土器実測図



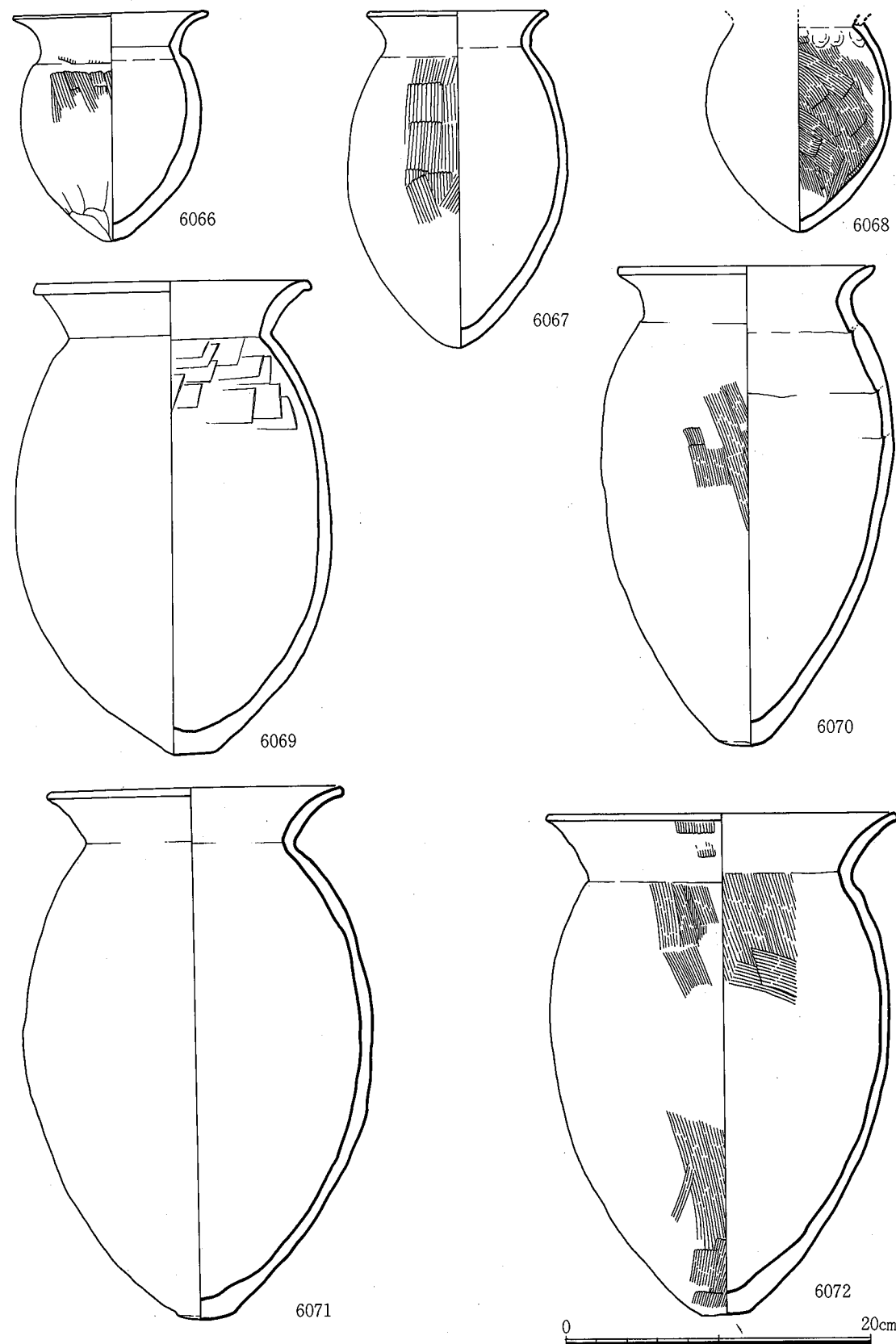
第20图 SD 6 出土土器実測図



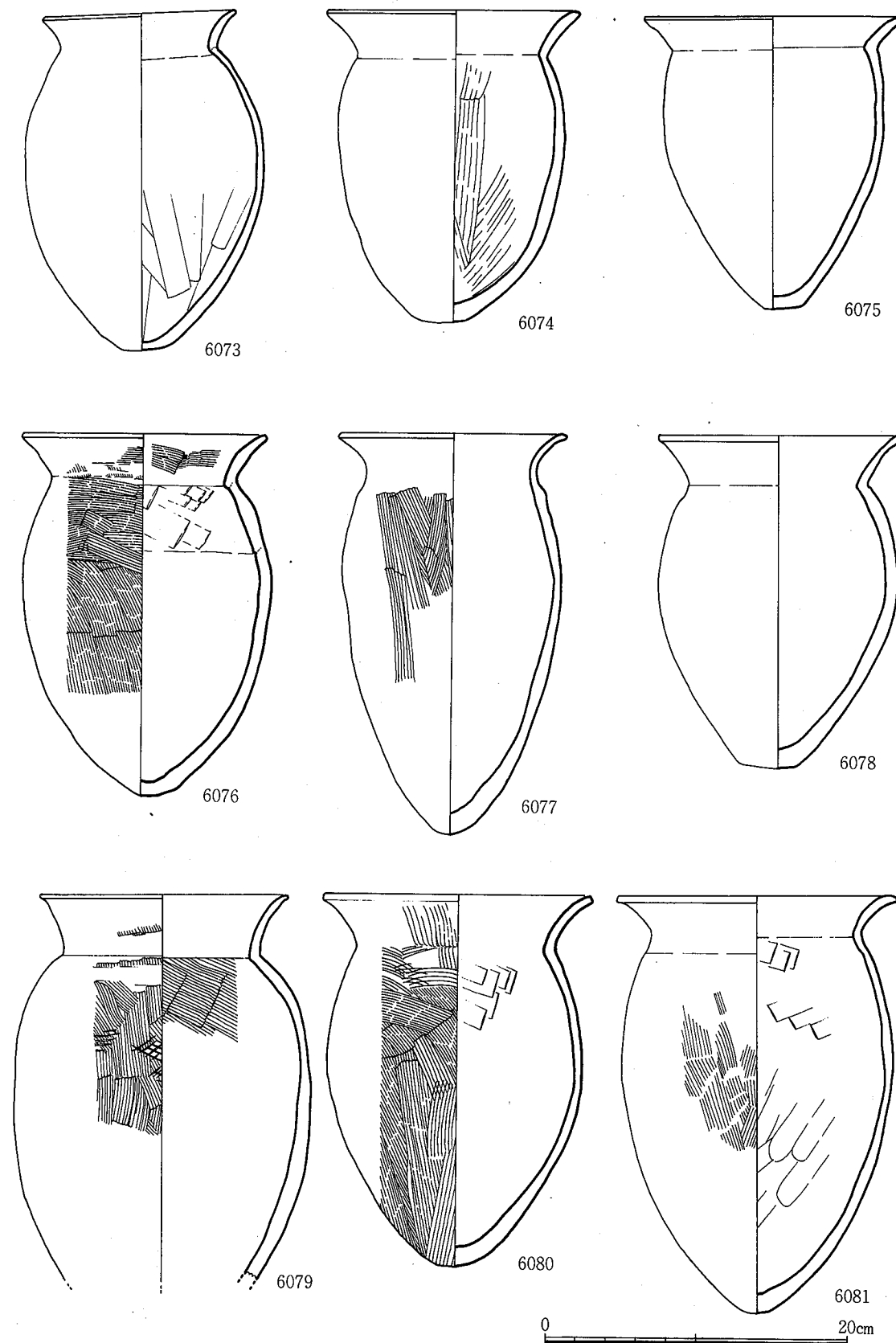
第21图 SD 6出土土器实测图



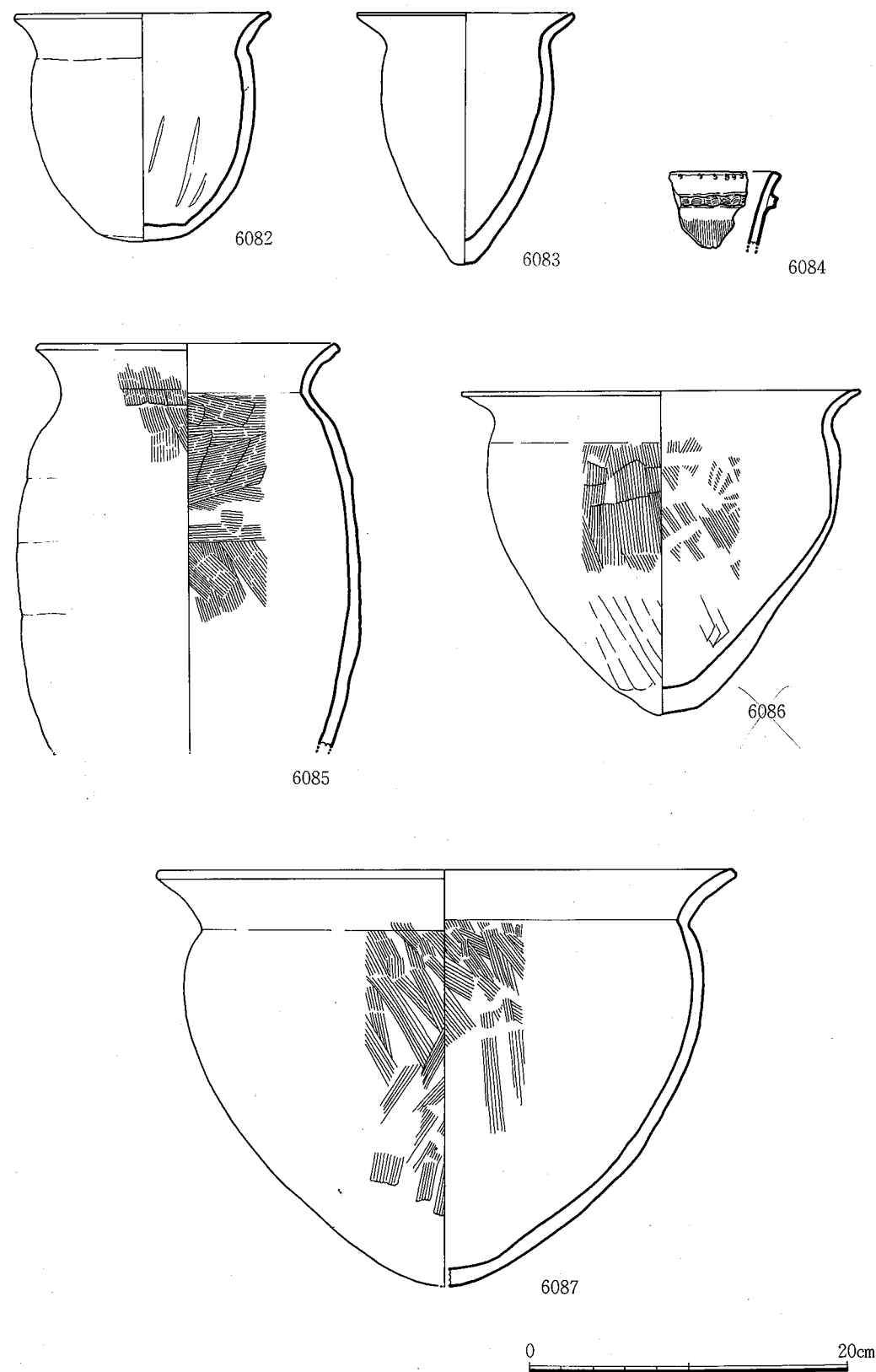
第22图 SD 6出土土器实测图



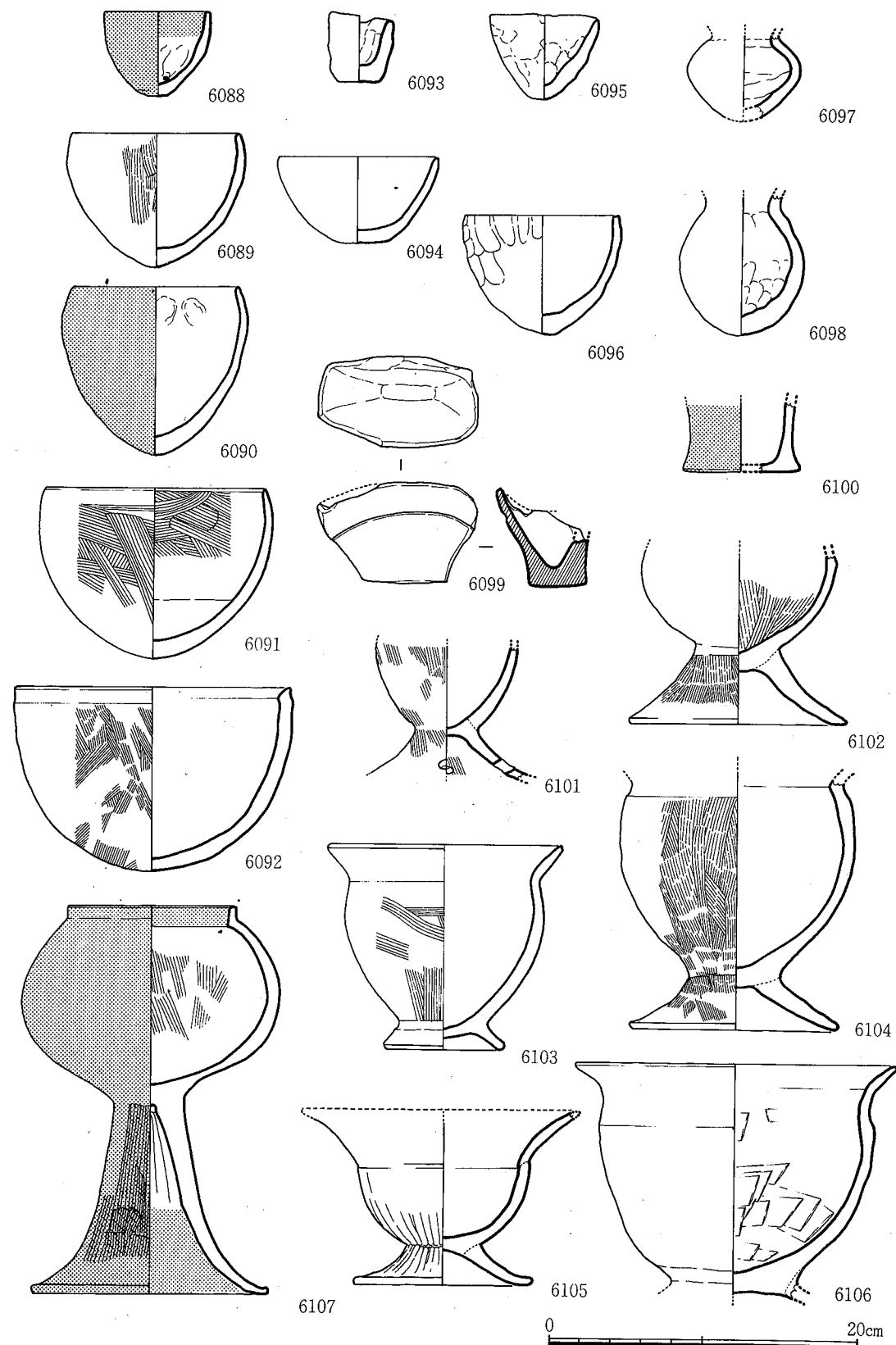
第23图 SD 6 出土土器实测图



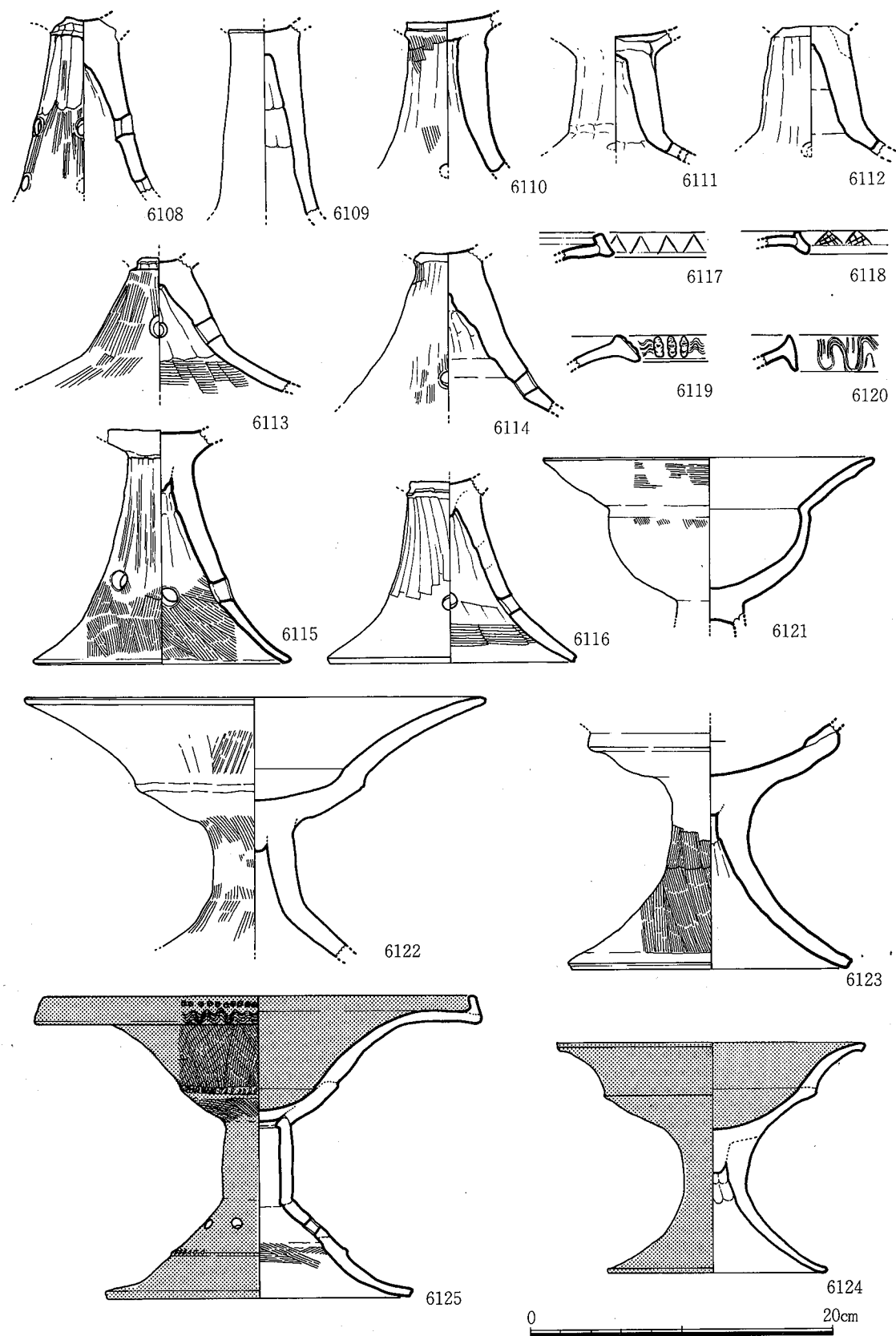
第24图 SD 6 出土土器实测图



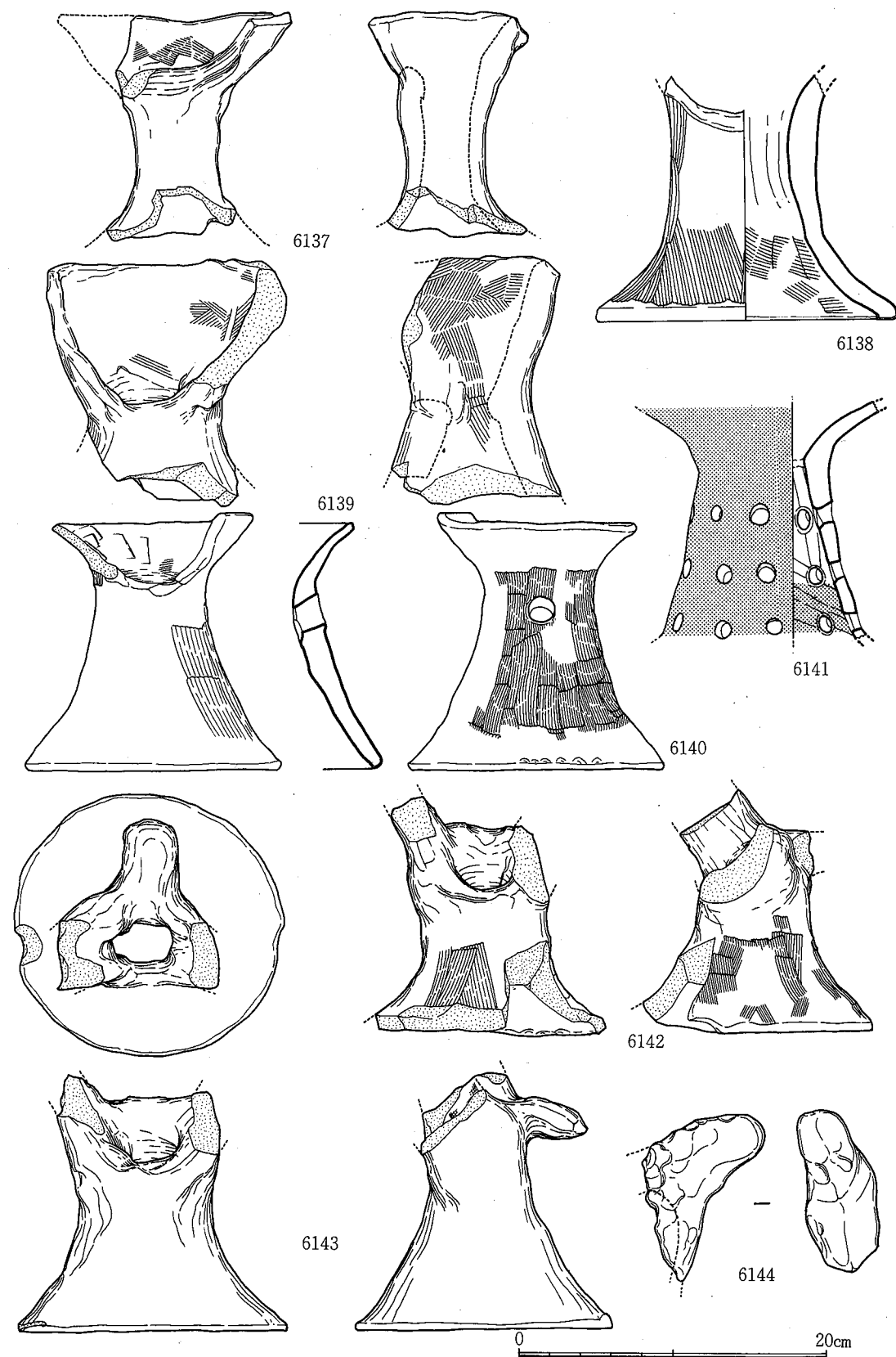
第25图 SD 6 出土土器实测图



第26图 SD 6 出土土器实测图



第27图 SD 6 出土土器实测图



第28图 SD 6 出土土器实测图

遺物番号	器種	色調	胎土	形態の特徴	調整	備考	Fig. PL
6001	複合口縁壺	黄褐色	微砂粒多	ナデ肩、胴長の胴部にキザミ突帯を貼りつけ、外反する口縁に丸味を帯びた内傾する口縁部	内面 口縁部ヨコナデ、胴部荒いハケメ 外面 細かいハケメ	胴部穿孔	69
6002	"	赤褐色	砂粒多	頭部欠損、最大径をやや上位にとり、頸部と胴部にキザミ突帯を貼りつけた卵倒形の胴部	内面 底部は木口ハケメ 外面 肩部は細かいハケメ、底部は木口ハケメ		
6003	"	黄褐色	"	胴部は卵倒形で、尖り気味の丸底、外反し短く内反する拡張部、頸部にキザミ突帯	内面 口縁部細かいハケメ、胴部荒いハケメ 外面 全体に細かいハケメ		
6004	"	茶褐色	"	6003と同形態	内面 不明 外面 胴部細かいハケメ		
6005	単口縁壺	黄色	"	胴長の胴部に短く外反する口縁	内面 口縁部ヨコナデ、胴部ハケメのちヨコナデ 外面 胴部ハケメ	丹塗り	69
6006	複合口縁壺	黄灰色	"	卵倒形の胴部に平底を呈し、短い外反する口縁部に短く内傾する拡張部	内面 口縁部ヨコナデ、胴部細かいハケメ 外面 胴部細かいハケメ		
6007	"	灰褐色	"	丸味を帯びた卵倒形胴部で突起気味の平底、外反する口縁に短く内反する拡張部	内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヨコナデ 外面 荒く雑なハケメ		
6008	"	黄褐色	"	胴部は下位に最大径をとめ、涙形で平底、頸部にキザミ突帯を貼りつけ、口縁は強く外反	内面 口縁部はヨコナデ、胴部はハケメ 外面 胴部上部は細かいハケメ、下位は木口ハケメ		
6009	単口縁壺	"	"	胴部は卵倒形で平底、口縁は直立気味で口唇で若干外反する	内面 口唇はヨコナデ、胴部ハケメ 外面 口縁部、胴部共ハケメ	丹塗り	69
6010	複合口縁壺	"	微砂粒多	肩の張る胴部で、頸部に2本の三角突帯を貼りつけ下段に隅円浮文を貼りつける	内面 不明 外面 頸部はヨコナデ		
6011	"	"	"	6010と同形態で頸部に5本の三角突帯を貼りつける	内面 不明 外面 頸部はヨコナデ		
6012	長頸壺	赤褐色	砂粒多	平偏球形の胴部に2本の平行する三角突帯を貼りつけ、内に1対の隅円浮文を配す	内面 ヨコナデ 外面 ヘラ研磨と思われる		
6013	複合口縁壺	"	砂粒多	卵倒形と思われる胴部に外反する口縁、頸部にツマミによる三角突帯を貼りつける	内面 頸部木口ハケメ 外面 頸部ヨコナデ	丹塗り	69
6014	"	"	"	球形に近い胴部で、頸部にキザミ三角突帯を貼りつけ頸部下に2本の波状文を施す	内面 ヨコナデ 外面 不明		
6015	甗	黄褐色	"	甗形土器の底部に焼成後両面から穿孔再利用？胴部にキザミ三角突帯を貼りつける	内面 底部木口ハケメ 外面 胴部、底部共ハケメ		
6016	壺形土器	"	"	ナデ肩の胴部より外に開き気味に長くのび、外反する口縁部、拡張部は欠損、頸部キザミ突帯、胴部は張り、平底を呈する	内面 口縁部ヨコナデ 外面 口縁部荒ハケメ、胴部は細かいハケメ		
6017	複合口縁壺	赤褐色	"		内面 底部木口ハケメ、上位荒いハケメ 外面 ハケメ	丹塗り	69
6018	壺形土器	"	"	6018と同形態	内面 胴部細かいハケメ 外面 底部から胴部にかけて木口ハケメ		
6019	"	黄褐色	"	胴部は卵倒形で平底	内面 底部は指ナデ、上位は木口ハケメ 外面 全体にハケメ		
6020	"	"	"	6020と同形態	内外面共ハケメ		
6021	"	"	"	外反する口縁に薄く肥高し鋤先状となる		丹塗り	69
6022	"	砂粒少		外反し朝顔形に開き、若干肥高し円浮文を配する			
6023	"	赤褐色	砂粒多	外反する口縁端に薄く肥高させ隅円浮文を配し、さらに端部を垂下させる。周囲に連続山形文			
6024	"	黄褐色	砂粒少	6024と同形態で、円浮文を配し、周囲に2本単位の斜め格子文			
6025	"	赤褐色	"	6024・6025と同形態で周囲に山形文		丹塗り	69
6026	"	赤黄色	"	6003に代表される器形の拡張部の文様は波状文+竹管文			
6027	複合口縁壺	茶褐色	砂粒多	波状文+竹管文			
6028	"	"	"	波状文+竹管文			
6029	"	黄色	"	波状文+刺突文		丹塗り	69
6030	壺形土器	赤褐色	"	6024～26と同形態と思われる。肥高し面となす部分には竹管文を施し周囲に帯状に粘土を貼り竹管文を配す			
6031	"	"	"	口縁部を肥高させ面となす部分に2列半載竹管文と外側にキザミ、周囲には半載竹管文を2列半載竹管文			
6032	複合口縁壺	黄褐色	"	外反する口縁に短く内傾する拡張部周囲には押し引き風の波状文を施す			
6033	"	"	"	6003に代表される拡張部の文様は波状文+刺突文		丹塗り	69
6034	"	赤褐色	"	外反する口縁部に短く内傾する拡張部			
6035	壺形土器	黄褐色	"	口縁部端を肥高させ、面をなす部分に竹管文を施し、周囲には羽状文の刺突を施す			

表4 SD 6 出土土器観察表

遺物番号	器種	焼成	胎土	形態の特徴	調整	備考	Fig. PL
3036	壺形土器	暗赤褐色	砂粒多	胴部はずん胴で丸底気味、口縁部は外傾し、口縁部径と胴部径は同じ。	内面 胴部ハケメ、口縁部内外共ヨコナデ 外面 胴部ハケメ	カーボン付着2次焼成	68
3037	"	黄褐色	微砂粒多	口縁部径は胴部径より小さい。	内面 胴部ハケメ、口縁部内外共ヨコナデ 外面 胴部ハケメ		
3038	"	黒褐色	砂粒多	頸部は余りくびれず、ずん胴である。	内面 胴部ハケメ、口縁部内外共ハケメのちヨコナデ 外面 胴部ハケメ		
3039	"	"	"	口縁部径は胴部径より小さく、胴部最大径を上位にとる。	内面 器内は薄く、ヘラ削り？ 外面 胴部ハケメ		
3040	"	黄褐色	"	口縁部径は胴部径より小さい。	内外面 口縁部ヨコナデ	2次焼成	68
3041	"	暗褐色	"	口縁部欠損、丸底を呈す。	内面 胴部木口ハケメ 外面 胴部ハケメ		
3042	蓋	黄褐色	"				
3043	"	"	"	丸味を帯びる蓋	内面 ヨコナデ 外面 ハケメのちナデ消し		
3044	"	"	"	つまみは、ヘラ削りによる。	内面 ヨコナデ	丹塗り	69
3045	ミニチュア土器	"	"	鉢形を呈し、口唇をつまみ上げ	指圧		
3046	"	"	"		"		
3047	"	"	"	壺形土器を呈す。	"		
3048	小形壺	"	微砂粒少	口縁部欠損	内面 胴部ナデ、頸部指圧 外面 "	丹塗り	69
3049	不明土器	"	"	口縁部と思える、内側に透しを入れ、外周に波状文と2本単位の隅円浮文を配す。	全体ナデ仕上げ		
3050	"	赤黄色	"	盤状で、口縁とも異なる。			
3051	鉢形土器	黒褐色	砂粒多	底部は丸底	内面 胴部、口縁部共ヘラ研磨 外面 胴部ハケメ		
3052	"	黄褐色	"	偏平気味、底部は丸底	内面 口縁部ヨコナデ 外面 口縁部ハケメのちヨコナデ、胴部ハケメ	丹塗り	69
3053	"	"	"	底部は平底で口縁部直立気味に外反し、口縁部径と胴部径はほぼ同じ	内面 胴部ハケメのちナデ、口縁部ハケメのち木口ナデ 外面 口縁部ハケメのちナデ 胴部ハケメ		
3054	"	"	"	平底で外傾する口縁	内面 底部は木口の強いナデツケでハケメ、口縁部ハケメ 外面 口唇部ヨコナデ、胴部ハケメ		
3055	台付鉢形土器	赤褐色	"	台は貼りつけによるもので、口縁部は外反しない。	内面 胴部はハケメのちヘラ研磨 外面 胴部ハケメ		
3056	"	"	"	台は貼りつけ？	内面 木口ナデツケ、口縁部内外共ヨコナデ 外面 ハケメ、台は木口ナデ	丹塗り	69
3057	"	黄褐色	"				
3058	"	"	"	台は他の器種に比べて低く薄い	内面 ハケメ 外面 ハケメ		
3059	"	"	"	台は、胴部と台部を接合し、底部は後から円盤充填によるもの。	内面 木口ナデと指ナデアケ 外面 ハケメ		
3060	高坏	"	"	脚部欠損、坏部中位から腰をつけ短く外反する。		丹塗り	69
3061	"	赤褐色	"	3077と同種で、口縁部にあたる。			
3062	"	黄褐色	微砂粒多	外周波状文			
3063	"	赤褐色	"	"			
3064	"	黄褐色	"	脚部にあたる。		丹塗り	69
3065	"	"	砂粒多	脚部を接合法観察の為、半載したもので、底部からの粘土塊充填法			
3066	"	"	微砂粒多	接合部下に細い突帯を貼りつける、接合法は粘土塊充填法	内面 木口ナデ 外面 雑なヘラ研磨		
3067	"	赤褐色	"	3077と同種で、短脚部にあたる、下位にキザミを施す。	外面 ヘラ研磨		
3068	"	"	"	"	外面 ヘラ研磨	丹塗り	69
3069	"	黄褐色	砂粒多	接合法は、挿入法、透し4ヶ	外面 ハケメのちヘラ研磨		
3070	"	赤褐色	"	接合法は挿入法、脚は細く、その為裾は大きく開く	外面 ハケメ		

表5 SD 6 出土土器観察表

遺物番号	器種	色調	胎土	形態の特徴	調整	備考	Fig・PL
6071	壺形土器	黄茶褐色	微砂粒多	頸部はしまる。底部は平底を呈す	外面 口縁部ヨコナデ、胴部は木口ハケメ		69
6072	"	"	"	最大径を上位にとり、口は開き気味、平底を呈す	内面 胴部荒いハケメ、口縁部ヨコナデ 外面 口縁部ハケメのちヨコナデ、胴部ハケメ		
6073	"	赤褐色	"	頸部の腹線は内部ではつが外部はもたない。平底を呈す。口縁径は胴部径より小さい	内面 胴部荒い木口ナデ(ヘラ削)? 口縁部ヨコナデ 外面 胴部ハケメ		
6074	"	赤黄褐色	砂粒多	ずん胴で平底を呈し、外反する口縁	内面 胴部木口ナデツケ、口縁部ヨコナデ 外面 口縁部ヨコナデ、胴部木口ハケメ		
6075	"	黄褐色	"	最大径を上位にとり、口縁径は胴部径より大きい	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ		
6076	"	黄茶褐色	"	胴部最大径より口縁径は小さく、底部は尖り気味の丸底仕上げ	内面 胴部木口ナデツケのちナデ、口縁部ヨコナデのちハケメ 外面 口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ	2次焼成度	69
6077	"	黄褐色	"	胴長で、底部は尖り気味の丸底仕上げ	内面 胴部ナデツケ、口縁部ヨコナデ 外面 胴部ハケメ		
6078	"	黄茶褐色	"	口縁部径と胴部径はほぼ同じで底部は平底	外面 胴部木口ナデツケ	2次焼成度	
6079	"	"	砂粒多く片麻岩粒がめざつ	口縁部は直立気味に外反し、胴部径より口縁径が小さい。胴部は肩を張らせ、胴長	内面 胴部ハケメ、口縁部ヨコナデ 外面 口縁部ハケメのちヨコナデ、胴部タタキのちハケメ		
6080	"	"	砂粒多	胴部は砲弾形で底部は丸底気味	内面 胴部木口ナデツケのちナデ、口縁部はヨコナデ 外面 口縁部荒いハケメ、胴部荒いハケメ	2次焼成度	
6081	"	黄褐色	"	底部は尖り気味の平底	内面 底部木口ナデ(ヘラ削)? 胴部木口ナデ 外面 口縁部内共ヨコナデ、胴部ハケメ		
6082	"	"	微砂粒多	鉢形に近い。底部は平底で丸底気味	内面 胴部木口ナデ、横穴ナデ、口縁部内共ヨコナデ 外面 胴部木口ナデのちヨコナデ		69
6083	"	"	"	口縁部径より胴部径の方が小さく、底部は尖り気味であげ底仕上げ			
6084	"	"	"	口縁は外反せず外傾し、口縁下にキザミ突帯を貼りつけ、口唇部にもキザミを施す。下城タイプ	外面 口唇付近はヨコナデ、突帯下はハケメ		
6085	"	暗褐色	砂粒多	胴部はずん胴で、口縁部径より大きい	内面 胴部ハケメ、口縁部ヨコナデ 外面 口縁部ハケメ、胴部ハケメ		
6086	"	黄褐色	"	鉢形で底部は平底仕上げ、内外共腹線はない	内面 胴部ハケメのちナデ、口縁部内共ヨコナデ 外面 胴部ハケメ、底部付近はハケメのちナデ		69
6087	"	"	"	鉢形で底部は丸底仕上げ、内側は腹線をもち外側はない。	内外共口縁部ヨコナデ 胴部ハケメ		
6088	ミニチュア土器	"	微砂粒多		内面 ヨコナデ 外面 ヘラ研磨?	丹塗り	
6089	鉢形土器	暗黄褐色	"	底部尖り気味の丸底仕上げ、口縁部は若干内彎する	内面 底部付近は木口ナデツケ、口縁部はヨコナデ 外面 細いハケメ		
6090	"	赤褐色	"	6089と同形態	内面 胴部ナデ、口縁部付近指圧痕 外面 ヨコナデ	丹塗り	
6091	"	暗褐色	砂粒多	胴部は半球形で、底部は尖り気味の丸底仕上げ、口縁部は若干内彎する	内外共ハケメ	カーボン付着	69
6092	"	"	"	胴部は半球形で底部は丸底、口縁部はつまみ上げた分だけ外反する。	内面 木口でのナデツケのちナデ 外面 ハケメ、口唇部内外共ヨコナデ	2次焼成カーボン付着	
6093	ミニチュア土器	黄褐色	"		内外共指圧痕		
6094	"	"	"	鉢形土器?	外面 ハケメ		
6095	"	"	"		内外共指圧痕		
6096	"	"	"		内面 雑なナデツケ 外面 口唇はヨコナデ、胴部は指圧と雑なナデツケ		
6097	"	"	"	壺形?	内面 胴部はヨコナデ 外面 ヘラ研磨		
6098	"	"	"	壺形?	内面 雑な指圧とナデ 外面 雑なタテナデ		
6099	不明土器	暗褐色	微砂粒多		全体にヘラ研磨		
6100	ジョッキ形土器	赤褐色	"	底部は若干、横巾を広くとる。	全体にヘラ研磨、底部にまで及ぶ	丹塗り	
6101	脚付鉢	"	"	鉢部は、口縁部を口唇で若干内彎させ、脚部は大きく縮開きとなる。透し4	内面 ヘラ研磨、脚部はハケメのちナデ 外面 ハケメのちヘラ研磨		
6102	台付鉢	黄褐色	砂粒多	偏半球形の胴部に外反する口縁をもつものと思える。台は貼りつけによる	内外面ともハケメ くびれ部と台先端はヨコナデ		
6103	"	"	"	台は短い。	内面 全体にナデ 外面 全体ハケメ、上立はヨコ、下立はナデ、台はヨコナデ		
6104	"	赤褐色	"	6102に形態類似。煮、炊用に使用	内面 ナデ 外面 全体ハケメ	2次焼成度	
6105	"	黄褐色	微砂粒多	6102に形態類似	全体ヘラ研磨		

表6 SD 6 出土土器観察表

遺物番号	器種	色調	胎土	形態の特徴	調整	備考	Fig・PL
6106	台付鉢	黄褐色	砂粒多		内面 木口ナデ、口縁部内外共ヨコナデ 外面 ハケメ?		
6107	脚付広口壺	赤褐色	"	偏半球形の 胴部に短い直立する口縁、長脚をつける	内面 ハケメ、口縁部はヨコナデ 外面 胴部ハケメのちヘラ研磨、脚ハケメ	丹塗り	69
6108	高 坏	黄褐色	"	脚頭部に平底部と接合する為の調整痕がある。透し4ケを2段に配す	外面 荒いハケメ		
6109	"	赤褐色	"	接合法不明	外面 ハケメ		
6110	"	"	"	脚と環との接合法は単にそれぞれを接合しただけのもの? 透し4ケ	外面 ヘラ研磨		
6111	"	暗褐色	"	脚頭部を坏部に接合、脚は裾より大きく開くが外面は腹線をつけず、内部はつける。透し4ケ	外面 ヘラ研磨		
6112	"	赤褐色	"	接合法は6108と同類、形態は6111と同類透し4ケ	外面 ヘラ研磨		
6113	"	暗茶褐色	"	接合法は6108と同類、2段に渡って開く脚で透し4ケ	内外面共 ハケメ		
6114	"	黄褐色	"	透し4ケ	外面 ハケメのち研磨		
6115	"	"	"	脚円筒に環との接合に平底部より粘土塊を充填、透し5ケ	内面 ハケメ 外面 ハケメのちヘラ研磨		
6116	"	"	"	6115と同形態透し4ケ	内面 ハケメ 外面 ヘラ研磨		
6117	"	"	"	6125に代表される環口縁端部外周に連続山形文を施す			
6118	"	"	"	6125と同類外周に鋸歯文を施文			
6119	"	赤褐色	"	6125と同類口縁部を断面三角形にし、波状文に横円浮文を配す			
6120	"	黄褐色	"	6125と同類口縁部先端を上下に肥高させ、外周に波状文を配す			
6121	"	"	"	鉢形の坏部に短い円筒がつき、2段に渡って開く脚がつくと思われる、6125が在土器に変化したもの	内面 ヘラ研磨 外面 全体ハケメでのちナデ		69
6122	"	赤褐色	"	接合法は6115と同じ、平底部近くで腹となし大きく外反する口縁。脚は6115と同類	内面 ヘラ研磨(内部) 外面 口縁部木口ハケメ、脚ハケメのちナデ		
6123	"	"	"	6122と同類	内面 ヘラ研磨 外面 脚部ハケメ		
6124	"	"	"	坏部中に腹線をつけ短く外反する口縁、脚はラップ状に開く。接合法6115に代表される方法	内外面共 ヘラ研磨	丹塗り	69
6125	"	"	微砂粒多	部下位にゆるく腹をつけ大きく外反する口縁は先端で帯状粘土を貼りつける。脚は短く2段に開く裾となる。丹塗充塞法	内面 ヘラ研磨、口縁部はヨコナデ 外面 ハケメ、脚全体ヘラ磨き、脚内面ハケメ		69
6137	器 台	赤黄褐色	"	受け部にえぐりを入れる雑な造り	内面 上位はハケメ		
6138	"	"	"	受け部にえぐりを入れる	内外面 ハケメ		
6139	"	黒褐色	砂粒多	受け部にえぐりを入れる、全体的に雑な造りで、あるいは支脚的要素が強いのかも知れぬ	内外面 ハケメ		
6140	"	黄褐色	"	受け部に浅くえぐりを入れる。裏面に1ケ透しをあける	内外面 ハケメ		
6141	"	赤褐色	微砂粒多	鼓型の円筒器台上、下ラップ状に開く透し、3段の1段10ケ	内面 ていねいな指ナデ 外面 ヘラ研磨	丹塗り	
6142	"	赤黄褐色	砂粒多	有翼器台、左右に腕状の翼を広げ、後部にも突起物をつける。造りは雑	外面 台付近はハケメ、それ以外は指ナデ		
6143	"	黄褐色	"	6142と同類			69
6144	"	赤褐色	"	有翼器台の翼の部分			

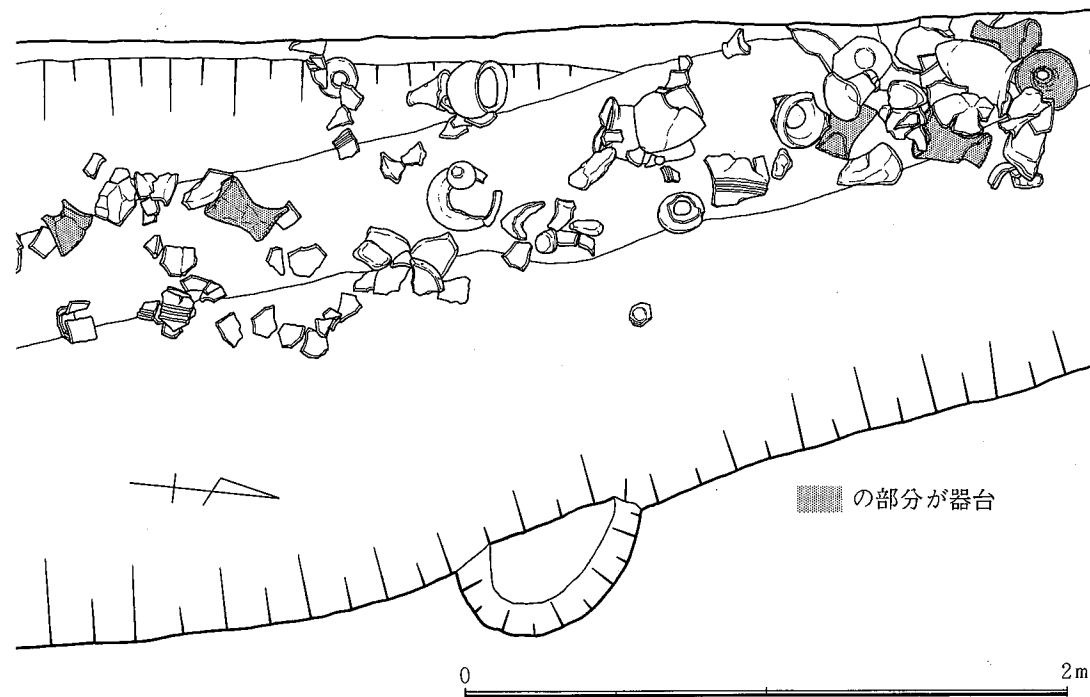
表7 SD 6 出土土器観察表

SD-3

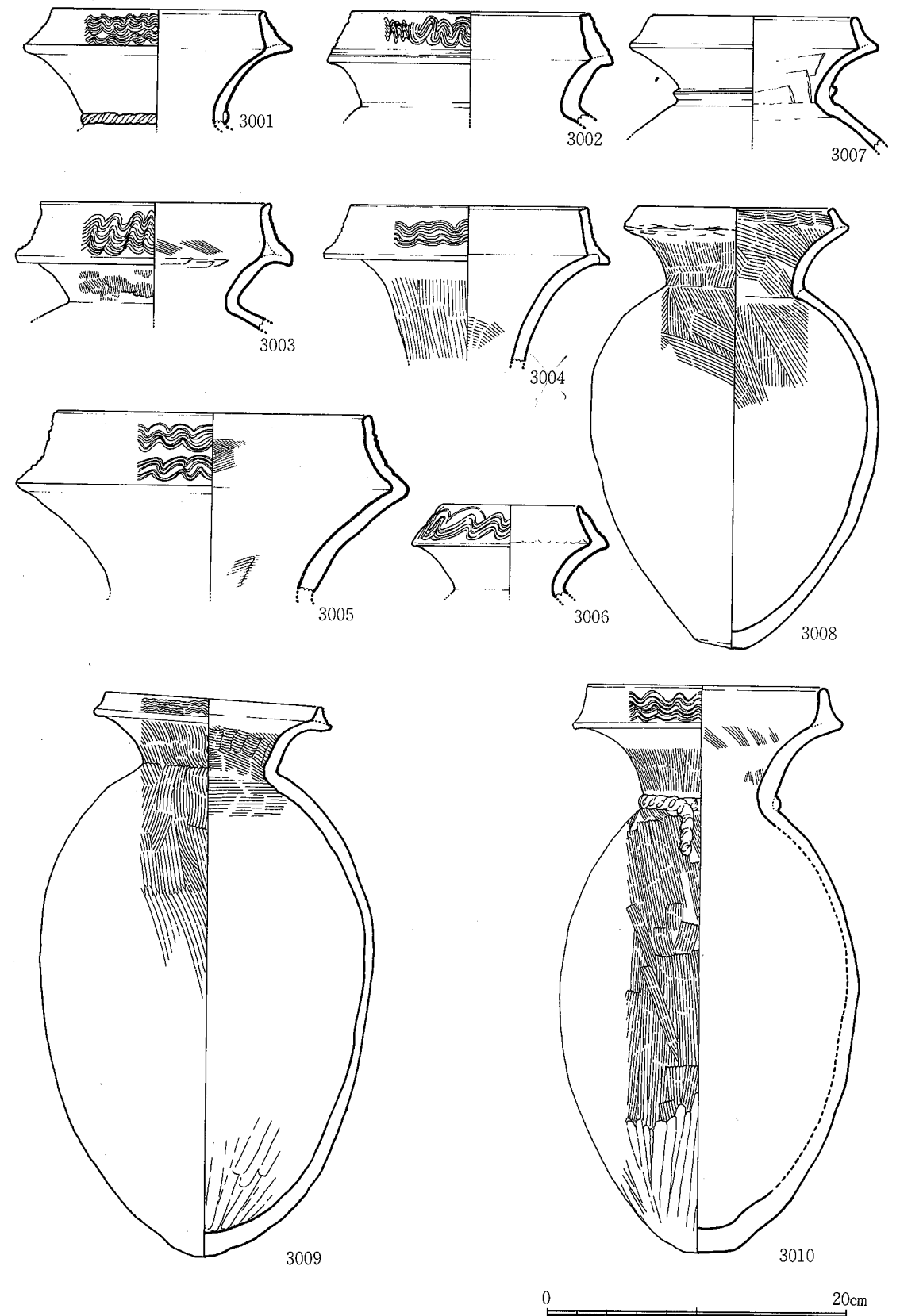
SD-6の西側E7区～J8区に位置する。J8区からG7区まで北北西に走り、G7区から北に向きをかえ弧状に走る。SD-6と平行して南の谷から台地を分断しながら北の谷に走るものと思える。

巾2～3m、深さ1～1.1mを測り、SD-6と同じく北端で断面梯形、南に下るにしたがって断面はV字形を呈する。北端と南端との深さを底部より計測すると約10cmの差を生じるが、標高130mを基準に計測すると約60cmの差があり、元の地形が南側より北側に暖く上り傾斜であり、調査区北端あたりがこの台地の高所であったと思われる。

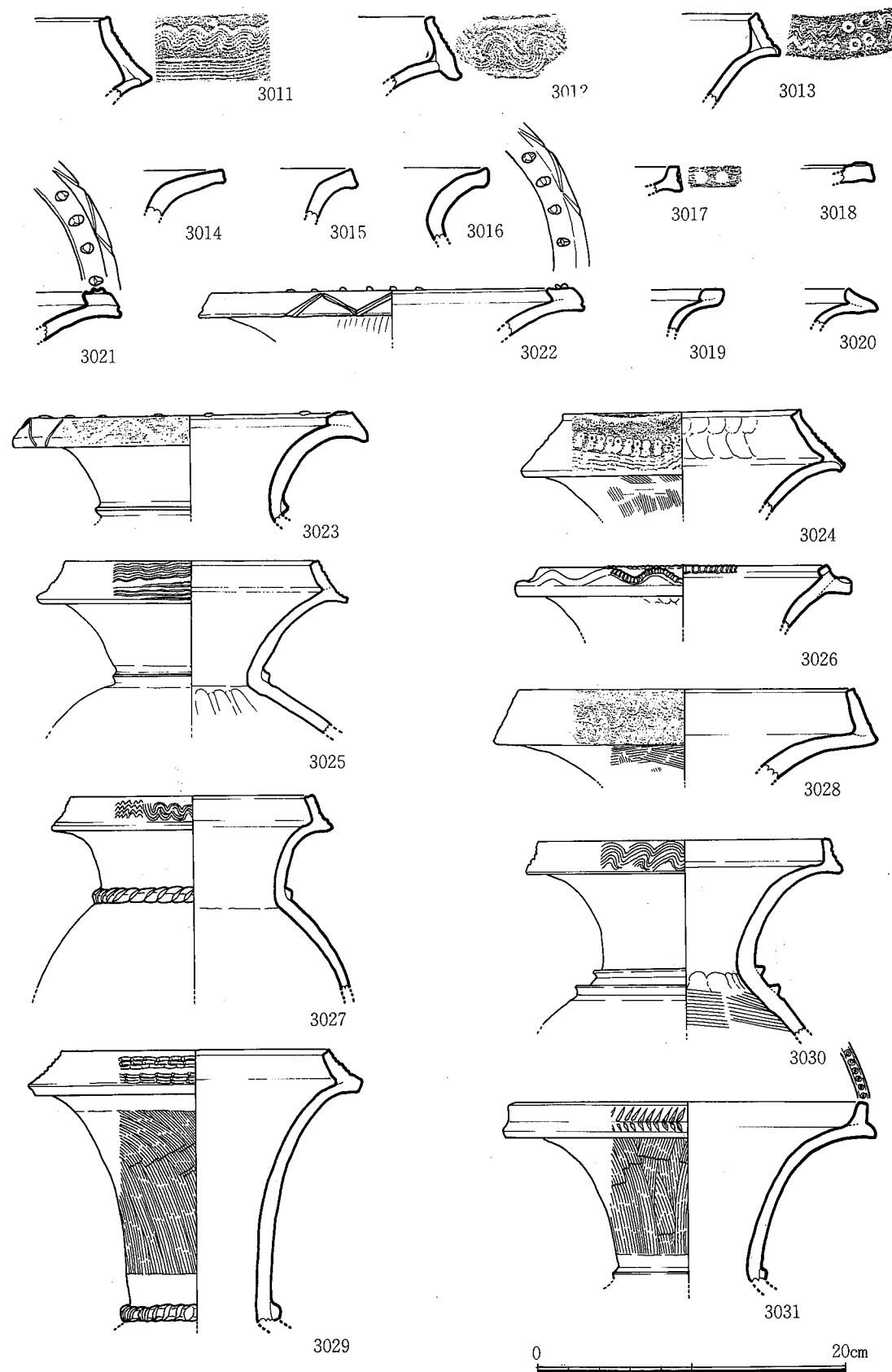
溝の状態は、SD-6と異なり自然堆積を示す。土塁等の埋没を示す土層はみられず、遺物は溝中央を帯状にI～II層間に集中して検出した。特にGH・7区では器台が一括して廃棄された状態であった。他の地区には散発的にみられる程度である。



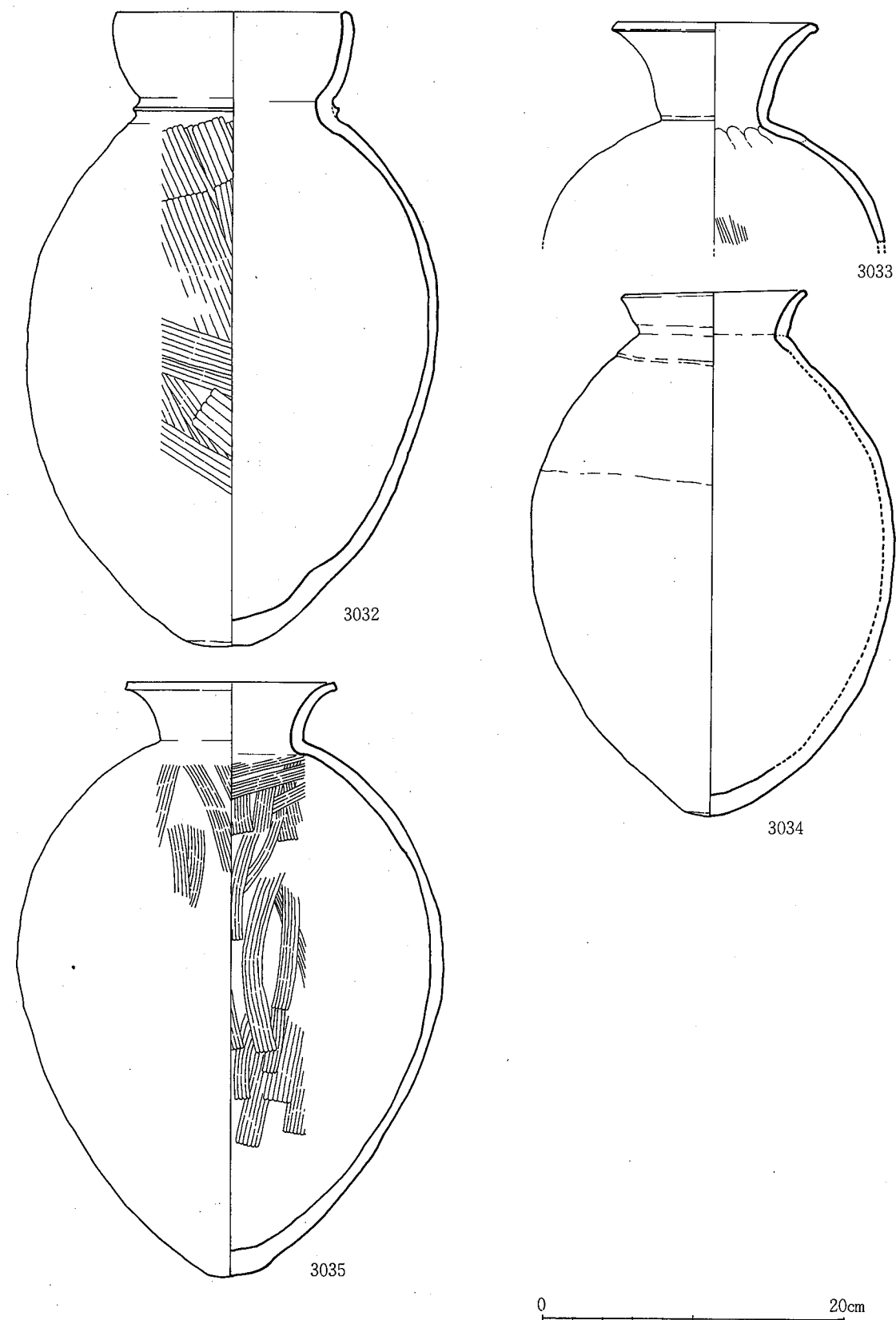
第29図 SD3器台出土状態実測図



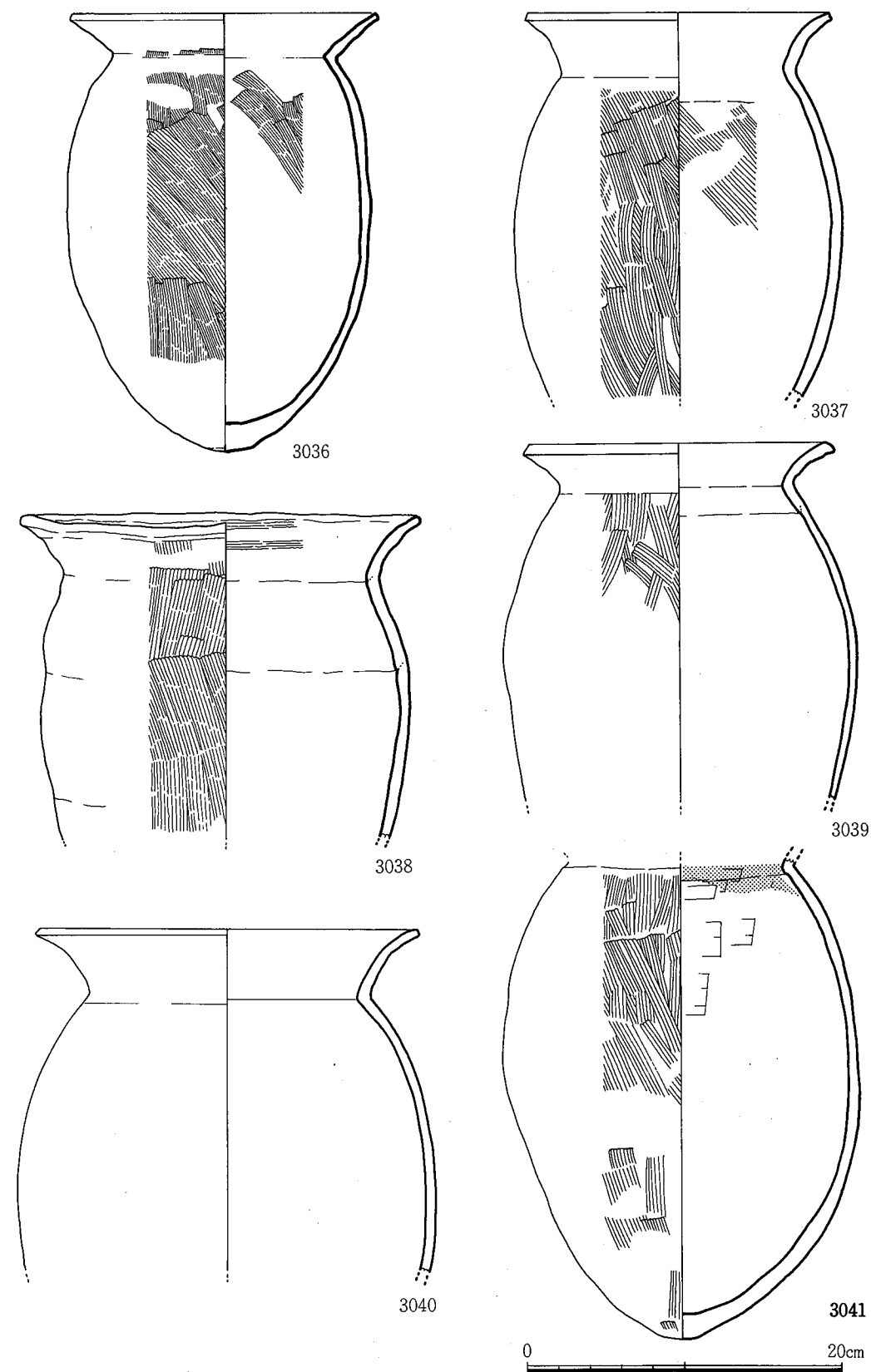
第30図 SD3出土土器実測図



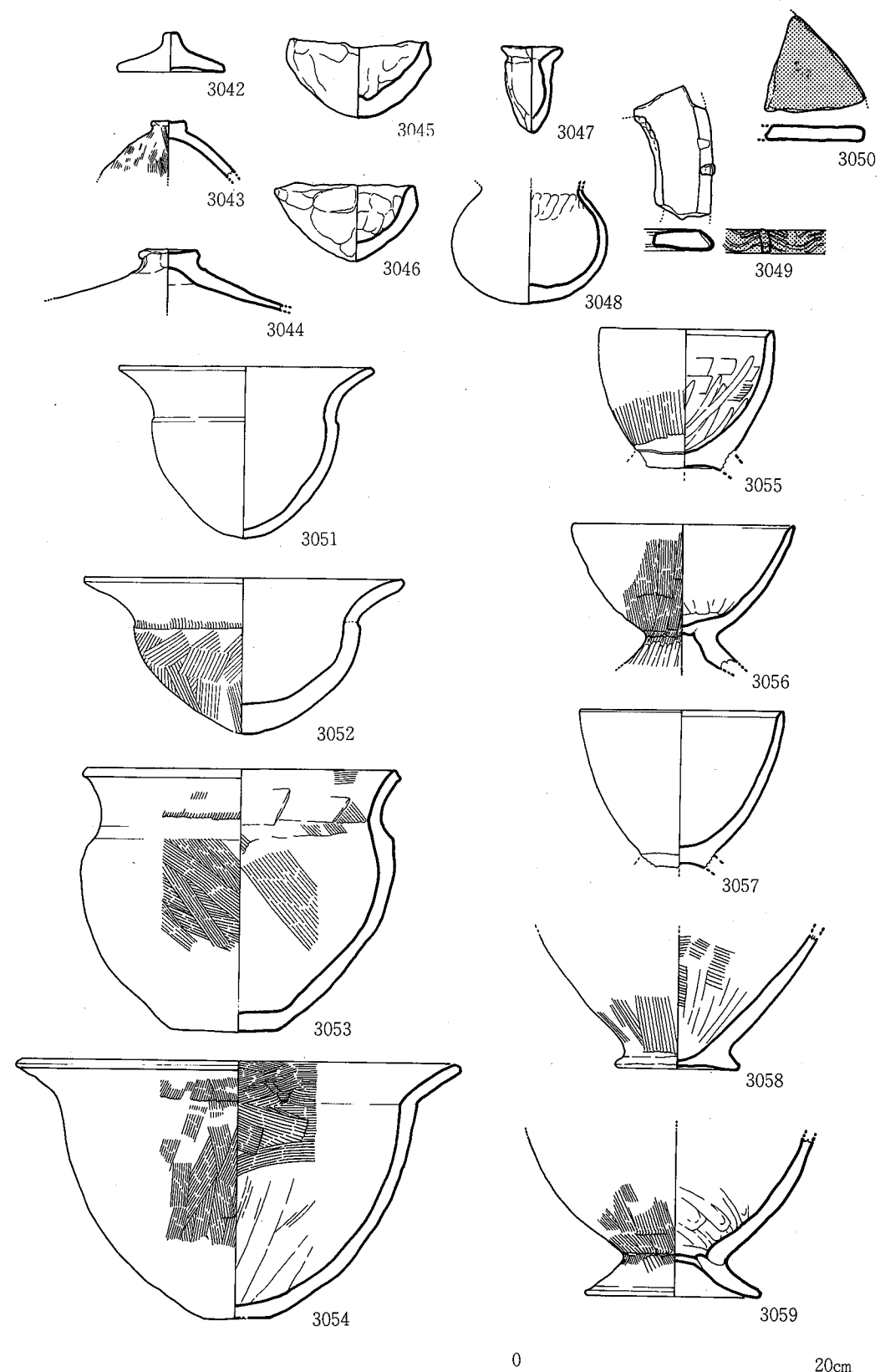
第31图 SD 3出土土器实测图



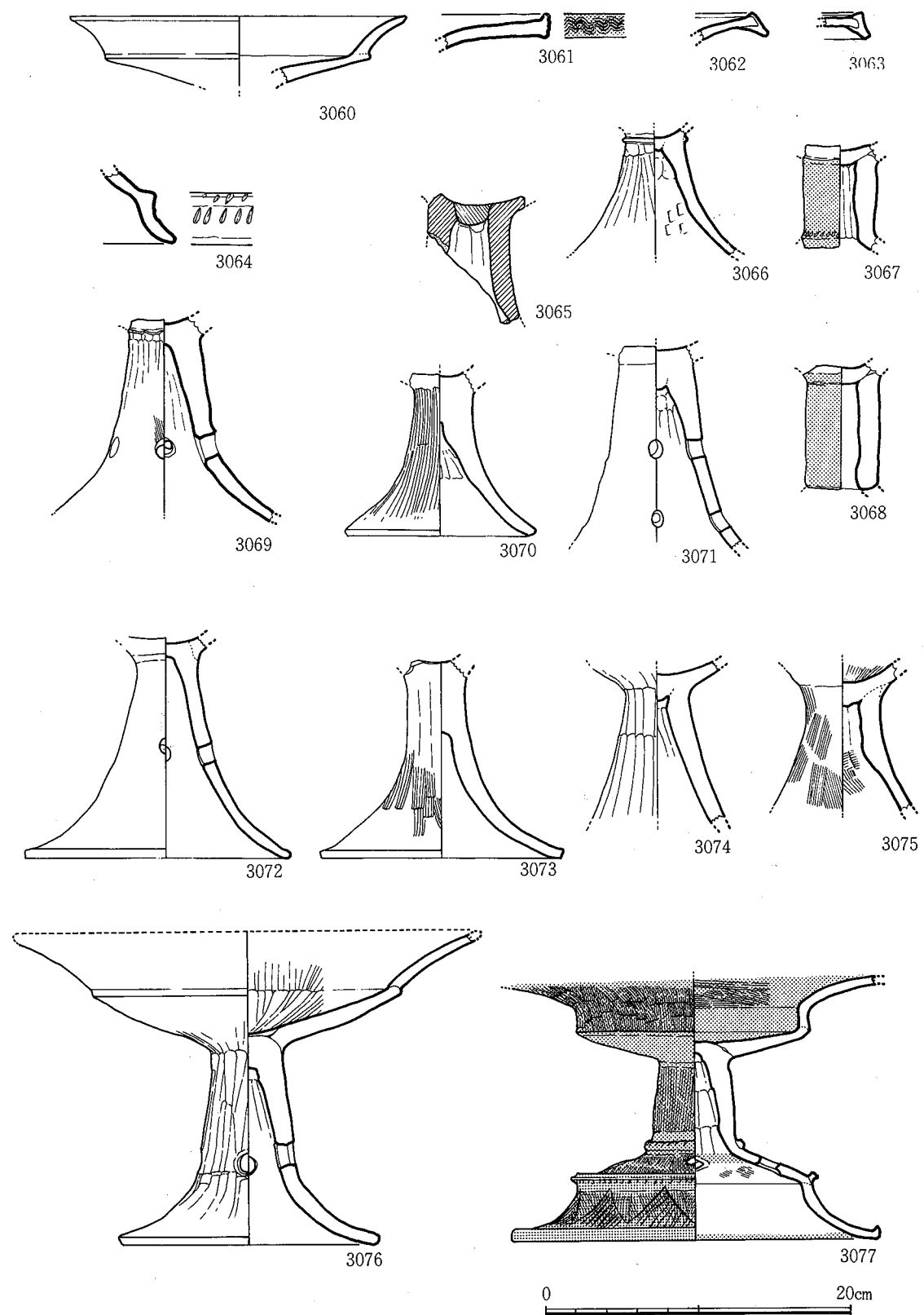
第32图 SD 3出土土器实测图



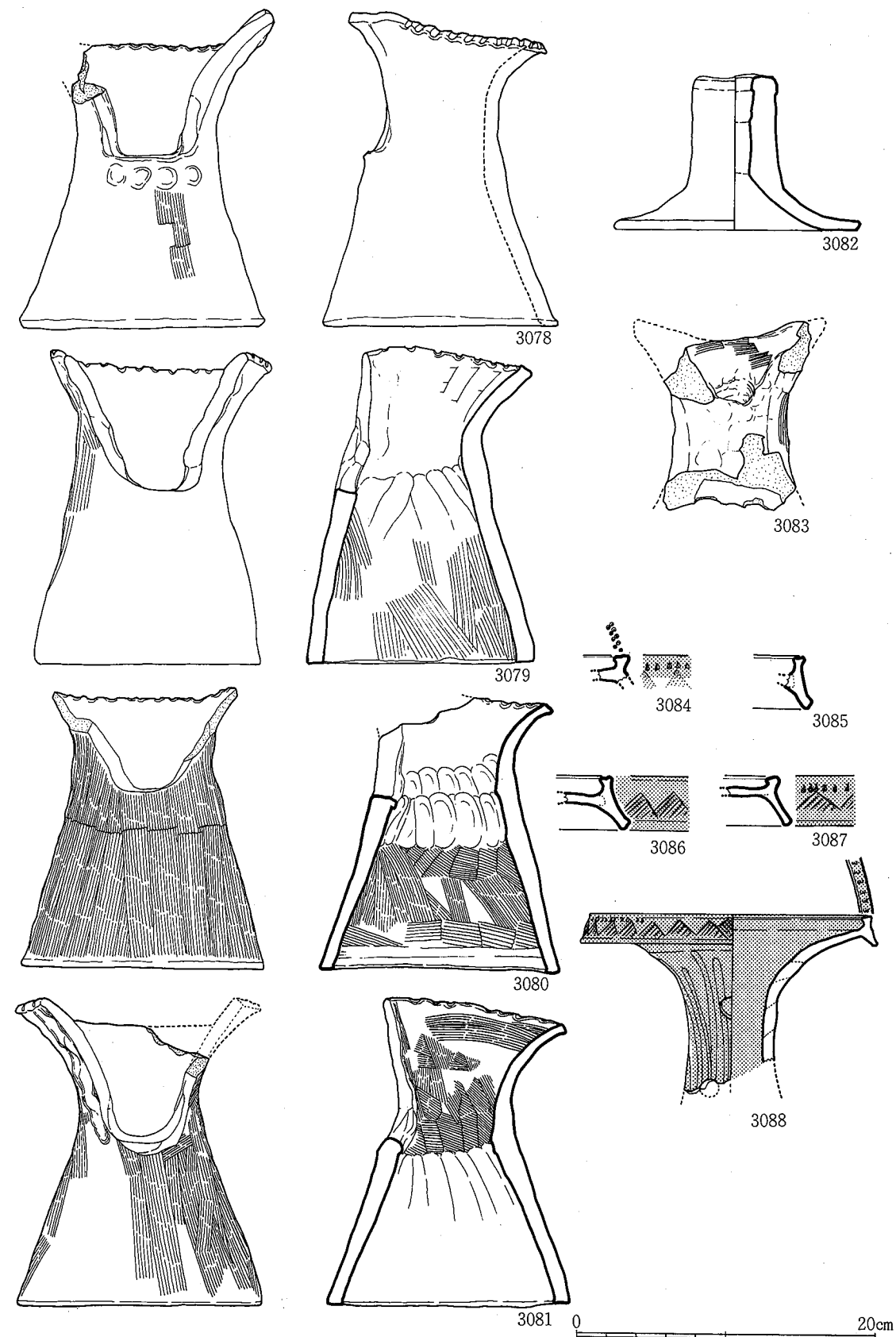
第33图 S D 3 出土土器実測図



第34图 S D 3 出土土器実測図



第35图 SD 3出土土器实测图



第36图 SD 3出土土器实测图

遺物番号	器種	色調	胎土	形態の特徴	調整	備考	Fig. PL
3001	複合口縁壺	黄褐色	微砂粒多	頸部にキザミ突帯を貼りつける			
3002	"	"	砂粒多	口縁部と拡張部の高さは短く比率が同じ	内面 頸部、拡張部ヨコナデ		
3003	"	赤褐色	"	拡張部は内反し、先端で若干外反気味、口縁部と拡張部の高さは拡張部が高い	内面 口縁部木口ナデ、拡張部ヨコナデ 外面 口縁部ハケメ		
3004	"	黄褐色	微砂粒多	拡張部は内傾	内面 口縁部ハケメのちナデ、拡張部内外ヨコナデ 外面 口縁部ハケメ		
3005	"	"	"		内面 口縁部ハケメ、拡張部ハケメのちヨコナデ 外面 拡張部ヨコナデ		
3006	"	"	"	拡張部の先端は尖り気味			
3007	"	暗灰褐色	"	頸部に三角突帯を貼りつける、拡張部外周は無文	拡張部は内外共ヨコナデ 外面 口縁部、胴の1部ハケメ		
3008	"	黄褐色	砂粒多	外反する口縁に短く内傾する拡張部、胴部は肩が張る卵倒形平底、拡張部外周無文	内面 胴部、口縁部、拡張部ハケメ 外面 拡張部ヨコナデ、口縁部、胴部ハケメ	68	
3009	"	"	微砂粒多	外反する口縁部は横に開き肥高気味の拡張部、胴部は胴長で丸底、頸部は胴部の外形に比べて小さい	内面 底部指ナデ、胴部荒いハケメ、口縁部ハケメ 外面 拡張部ヨコナデ、口縁部ハケメ、胴部荒いハケメ	68	
3010	"	"	"	拡張部は直立気味、胴部は胴長で平底、頸部にキザミ突帯を貼りつける	内面 口縁部ハケメのちナデ、拡張部内外共ヨコナデ 外面 口縁部ハケメ、胴部上位ハケメ、下位ハケメ、木口ナデツケ	68	
3011	"	"	"	拡張部外周文様、上段に波状文、下段に沈線			
3012	"	茶褐色	"	拡張部外周文様、波状文、最もボビュラーなもの			
3013	"	"	"	拡張部外周文様、波状文中に竹管文を配すこのタイプには3024が他にある			
3014	壺形土器	黄褐色	"	朝顔形に2段に渡って開く			
3015	"	暗灰色	"	朝顔形に開き口唇は若干肥厚する			
3016	"	茶褐色	"	外反する口縁は口唇で若干肥厚する			
3017	複合口縁壺	"	"	肥高する拡張部外周に竹管文を配す			
3018	"	"	"	3023と同類			
3019	"	"	"	外反する口縁は先端で肥高する			
3020	"	"	"	外反する口縁先端で折り返えされた様に見える			
3021	"	"	"	3022と同類			
3022	"	"	"	外反する口縁を肥高させ、面となす部分に隋円浮文を配し外周に連続山形文を施す	口縁部はヨコナデ、外面は荒いハケメ		
3023	"	"	"	3022と同類で先端やや垂下させる	外面口縁部はハケメ	丹塗り？	
3024	"	赤褐色	"	拡張部先端はつまみ上げ風、外周に波状外周に波状文+竹管文を施す	内面 指圧とヨコナデ 外面 ハケメのちナデ		
3025	"	黄褐色	"	頸部に三角突帯を貼りつける外周に直線的な波状文を施す	内外面 ヨコナデ		
3026	"	"	"	口縁部先端内側にキザミ突帯を貼りつけ、外側に肥厚し拡張部を形成する。外周にキザミ波状突帯を貼る	内外面 ヨコナデ		
3027	"	"	砂粒多	頸部にキザミ三角突帯を貼る拡張部外周の施文は2種類の波状文を施す			
3028	"	赤黄褐色	"	内傾する拡張部施文は、波状文4段に渡る	内外面 ヨコナデ	丹塗り？	
3029	"	黄褐色	"	頸部にキザミ突帯、外反する口縁部は長く、短く内反する拡張部をもつ	内面 頸部ナデ、拡張部内外ヨコナデ 外面 頸部ハケメ	68 68	
3030	"	"	"	頸部に2本三角突帯を貼る			
3031	"	赤黄褐色	微砂粒多	頸部に三角突帯を貼り、拡張部は短く、外傾気味、口唇に竹管文外周に羽状文を施す	内面 不明 外面 頸部から口縁部にかけてハケメ		
3032	単口縁壺	黄褐色	砂粒多	胴部は卵倒形平底、頸部に三角突帯、口縁部直立気味に内彎する	内面 胴部木口ハケメ、口縁部内外共ヨコナデ 外面 胴部木口ハケメ	丹塗り？	68
3033	"	黄褐色	"	口縁部は外反	内面 胴部木口ハケメ、口縁部内外共ヨコナデ 外面 胴部細いハケメのちナデ		
3034	"	"	"	胴部卵倒形で丸味を帯びた平底、口縁部は短く外反	内外面共口縁部はヨコナデ 外面 胴部上位は細いハケメ、下位は木口ハケメ		
3035	"	"	微砂粒多	胴部肩の張る卵倒形平底、口縁部は短く外反	内面 胴部ハケメ、口縁部内外共ヨコナデ 外面 胴部ハケメ		68

表8 SD 3 出土土器観察表

遺物番号	器種	色調	胎土	形態の特徴	調整	備考	Fig. PL
6036	壺形土器	赤褐色	砂粒多	6031と同類。面となす部分に半載竹管文を2列、内側にキザミ、外周には半載竹管文を1列施す			
6037	"	茶褐色	"	傾斜角度は明瞭ではない、口縁部は三角形の断面をなし、内部に突起(突帯)?状を施す。外周には鋸歯文			
6038	複合口縁壺	黄褐色	"	複合口縁壺、口縁外周に鋸歯文を2段に渡って施文	口縁部はヨコナデ		
6039	"	赤褐色	"	複合口縁壺の口縁外周に下部に1条の沈線その上には鋸歯文を施す。豊後の土器ではなく焼きも硬く、むしろ周防型に近い	〇焼成後の穿孔あり、再利用品？		
6040	"	黄色	微砂粒多	薄い板状での刺突文			
6041	"	黄茶褐色	砂粒多	格子状の鋸歯文			
6042	"	赤褐色	"	頸部は若干細い	内面 口縁部はヨコナデ 外面 口縁部はヨコナデ、頸部付近はハケメのちヨコナデ		
6043	"	茶褐色	微砂粒多	頸部に斜格子状のキザミ突帯	頸部全体にヨコナデ		
6044	"	赤褐色	"	頸部に斜格子状のキザミ突帯。突帯は調整後	内面 拡張部はヨコナデ、頸付近は木口ハケメ 外面 口縁部はハケメ		
6045	壺形土器	"	"	頸部に三角突帯を貼りつけ、2本単位の隋円浮文を配す。外反する口縁部で若干肥高し、外周に竹管文を施す	内外面共 研磨		
6046	複合口縁壺	黄褐色	砂粒多	頸部にキザミ突帯	内面 口縁部から拡張部にかけて板状工具でのナデ、外面拡張部はヨコナデ		
6047	"	"	"	頸部にキザミ三角突帯	内面 口縁部は木口ハケメ、拡張部ヨコナデ 外面 口縁部は木口ハケメ、拡張部ヨコナデ		
6048	"	"	微砂粒多	長頸気味で短い拡張部	内面 頸部はナデ、口縁部はハケメ 外面 拡張部はヨコナデ、口縁部はハケメ		
6049	"	赤褐色	砂粒多	頸部に突帯はなく拡張部は厚く貼りつけ、安定感を出している。	内外面共ヨコナデ		
6050	"	"	"	頸部にキザミ三角突帯	内面 胴部木口ナデのち指ナデあげ、口縁部木口ナデ 外面 拡張部ヨコナデ、口縁部、胴部共木口ナデ		
6051	"	黄褐色	"	頸部に斜格子状の突帯	内面 頸部付近は難なヨコナデ、口縁部ハケメ 外面 拡張部ヨコナデ、口縁部は細いハケメ		
6052	"	赤黄褐色	"	頸部にキザミ突帯を貼りつける	内面 ヨコナデ 外面 口縁部はヨコナデ、頸部付近はハケメ		
6053	"	黄褐色	"	頸部にツマミ三角突帯で2本単位の隋円浮文を配する。輪痕み痕が明瞭である。	内面 胴部ハケメ、頸部ハケメ、拡張部ヨコナデ 外面 拡張部ヨコナデ、頸部胴部共ハケメ		
6054	広口壺	赤褐色	微砂粒多	球形の胴部に外反する口縁で丸底を呈す。口縁部径は胴部径より小さい。	内面 胴部木口ハケメ、口縁部ヨコナデ 外面 口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ	丹塗り	
6055	"	"	"	口縁部は外傾し、口縁部径は胴部径よりわずかに小さい。口縁部内側では腹をもつが、外側はまたない。	内面 胴部ハケメ、口縁部ヨコナデ 外面 口縁部ヨコナデ、胴部ハケメのちナデ		69
6056	"	"	砂粒多	口縁部は立ち気味で外反し、胴部は扁平で丸底			
6057	"	黄褐色	微砂粒多	口縁部は外傾し共端で外反する。頸部に内外共腹線をもつ。	内面 胴部木口での強いナデ、口縁部タテナデ 外面 口縁部、胴部共タテナデ		69
6058	"	"	"	口縁部は強く外反し、胴部は扁平気味、内外に腹線をもつ	内面 胴部木口ハケメ、口縁部ヨコナデ 外面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラ研磨？		
6059	"	赤褐色	砂粒多	胴部は球形というより若干底部付近で尖り気味	内面 胴部ヘラ状工具でのナデ、口縁部ヨコナデ 外面 口縁部ヨコナデ		
6060	"	"	"	胴部は肩の張った球形、内部に腹線をもつ	内面 胴部はヘラ研磨、口縁部ヨコナデ 外面 口縁部ヨコナデ、胴部はヘラ研磨	丹塗り	
6061	"	黄褐色	微砂粒多	内側に腹線をもつ	内外共ヘラ研磨による。口縁部はヨコナデ		
6062	"	赤褐色	"	小形の胴部球形を呈し丸底、口縁部欠損、底部が尖り気味になると長頸の傾向を示すのでここでは区別した	内面 ハケメ 外面 ヘラ研磨	丹塗り	
6063	長頸壺	"	"	胴部は扁平、尖り気味で、頸部にキザミ突帯を貼り長く外傾する、口縁部をもつ	内外共ヘラ研磨、全体にタテ方向であるが、胴部上位より下位にかけてヨコ方向を示す。		69
6064	"	"	"	頸部にキザミ突帯を貼り、胴部は球形で尖り気味の底部をもつ	外面 ヘラ研磨		
6065	"	黄褐色	"		外面 ハケメ		
6066	壺形土器	"	"	小形で胴部は卵倒形を呈し尖り気味の平底、口縁部は強く外反。外底部に削りの痕跡をみせるも、明瞭でない	内面 底部タテナデ、頸部から口縁部にかけてヨコナデ 外面 口縁部ハケメのちヨコナデ、胴部ハケメ		
6067	"	"	"	胴長で尖り気味の底部	内面 口縁部ヨコナデ 外面 胴部荒いハケメ	カーボン付着	
6068	"	"	"	小形で胴部は張る。底部は尖り気味口縁部欠損	内面 胴部ハケメ		
6069	"	赤褐色	砂粒多	ずん胴で底部平底、外反する口縁は先端で若干折り返し気味	内面 木口による強いナデツケ、口縁部ヨコナデ 外面 ハケメ	カーボン付着	69
6070	"	黄褐色	"	胴長で平底、口縁部はくの字形に外反する	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ	2次焼成痕	69

表9 SD 3 出土土器観察表

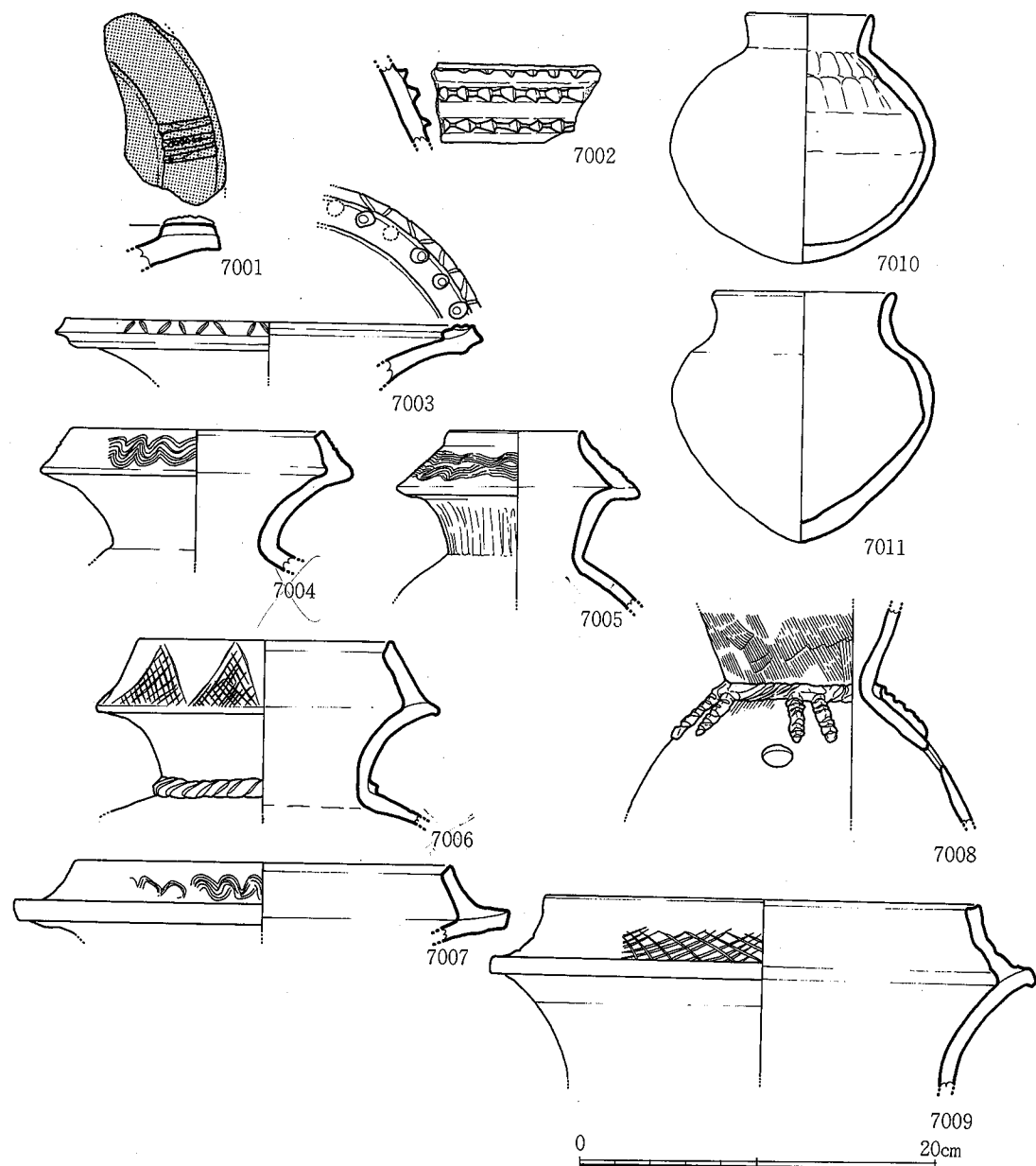
遺物番号	器 種	色 調	胎 土	形 態 の 特 徴	調 整	備 考	Fig. PL
3071	高 坏	黄褐色	砂 粒 多	接合法は挿入法、透しは2段4ケ	外面 ハケメ		
3072	"	赤褐色	"	" " 1段4ケ	内外面 ヘラ研磨		
3073	"	"	"	" 透しなし	外面 上位ナデ、下位ハケメ		
3074	"	黄褐色	"	接合法は粘土塊充填法	外面 木口ナデ		
3075	"	"	"	接合法は挿入法	内面 ハケメ 外面 ハケメ		
3076	"	赤褐色	"	坏部中位に駿をつくり、直線的に外反する口縁 接合法は挿入による透し4ケ	内面 坏部ヘラ研磨 外面 坏部、脚部共ヘラ研磨		
3077	"	"	微砂粒多	坏部は下位で駿をつけ、段をつけ、水平に近く外反する。脚部は短い筒状から2段に渡って開く。6125と同類。	内面 坏部はハケメ、脚部は指圧のちハケメ 外面 坏部はハケメ、脚部はハケメ、裾は鋸歯文を施す	丹塗り	68
3078	器 台	黄褐色	"	鼓形器台の一種と考える。受け部にU字形にえぐり口縁部にキガミを入れる。	外面 ハケメ		
3079	"	赤褐色	"	"	内面 上位、木口ハケメ、中位指ナデ、下位ハケメ 外面 ハケメ		68
3080	"	赤黄褐色	"	"	内面 上位ハケメ、中位指圧、下位ハケメ 外面 ハケメ		
3081	"	"	"	"	内面 上位ハケメ、下位指ナデ 外面 ハケメ		68
3082	"	黄褐色	砂 粒 多	円筒に細開きの脚がつく。支脚？	全体ナデ		
3083	"	"	"	鼓形で受け部にえぐりを入れる。器内は厚ぼったく雑な作りである。	外面は雑なハケメ		
3084	"	赤褐色	微砂粒少	3088に代表される鼓形器台の受け台、脚部の口縁部		丹塗り	
3085	"	"	"	"		"	
3086	"	"	"	"		"	
3087	"	"	"	"		"	
3088	"	"	"	外反する口縁部に肥高し垂下する拡張部、肥高する面には「3」形の半截竹管文を施し、外周には鋸歯文	内面 ナデ 外面 ヘラ研磨	"	

表10 SD 3 出土土器観察表

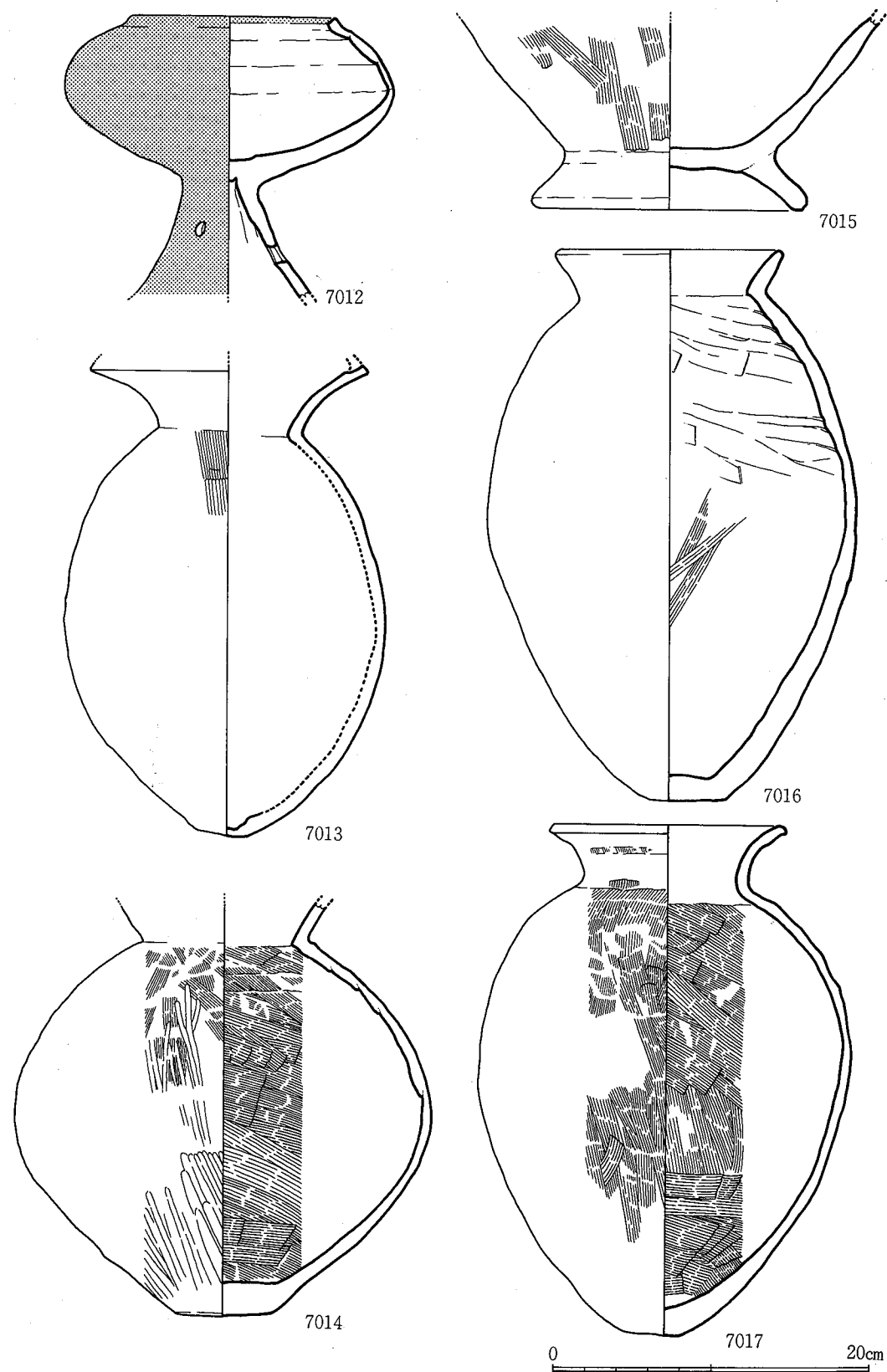
SD-7

I 9 区の SD-6 から分離し、東南に弧状に走る巾 2 m、深さ 0.9 ~ 1 m の V 字状を呈する。埋土の状態は、著しい流入はみられない。

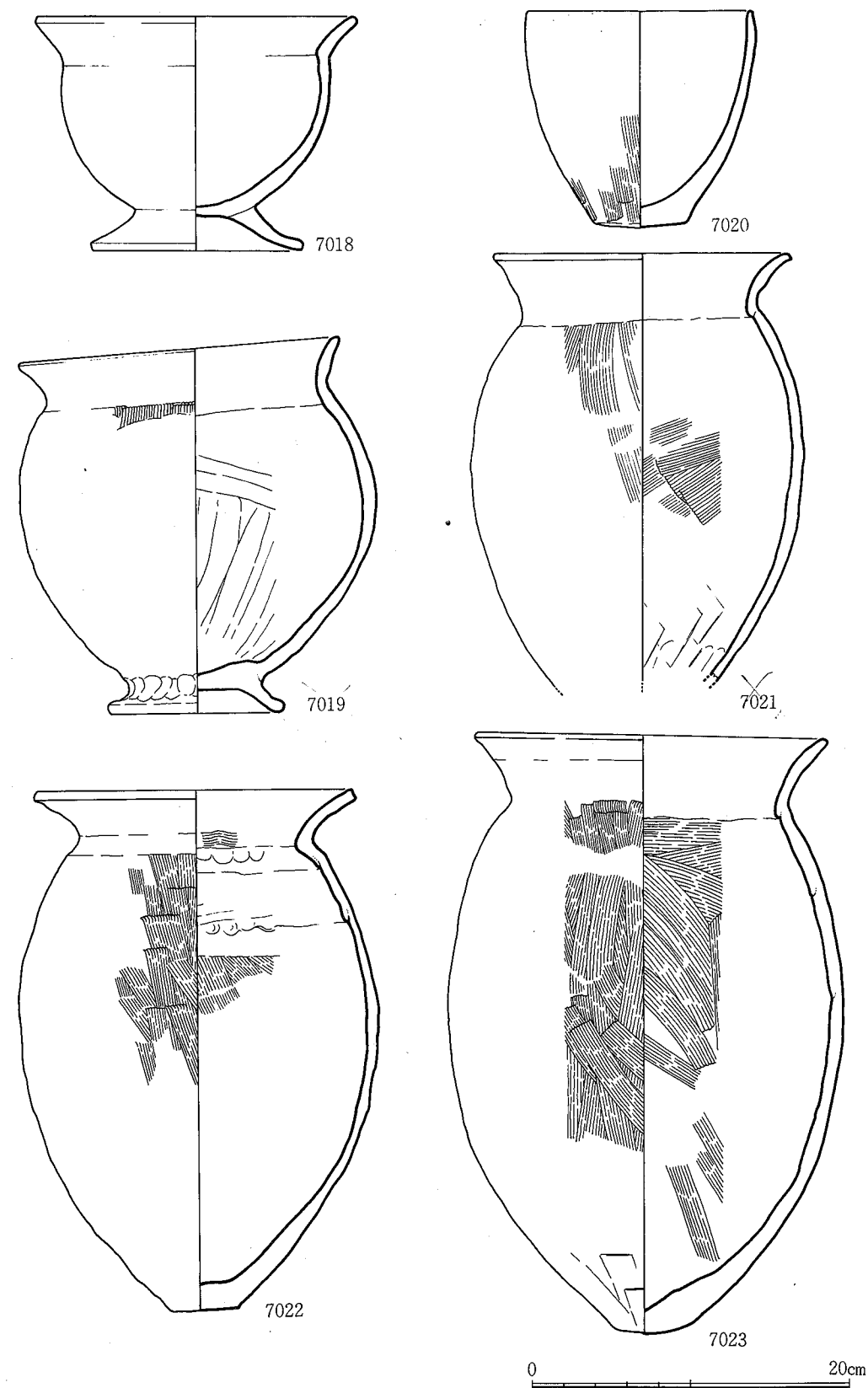
遺物は I 層（黒色土層）に土器片が敷きつめられたような状態で検出した。器台 7041 の大半は I 層に集中していたが、数片は底部付近で検出される状態で遺物は層位的新旧関係をとらえられなかった。



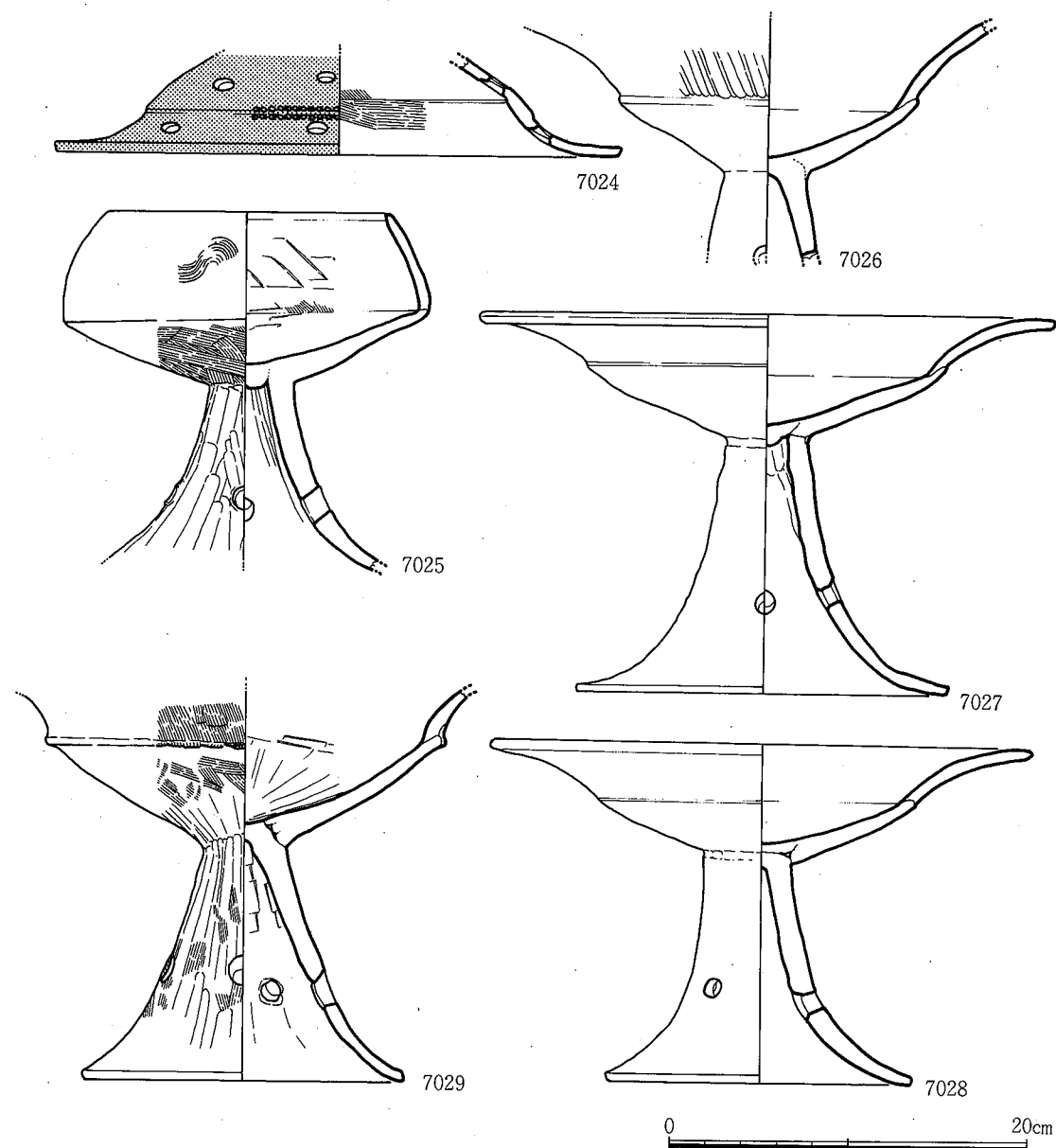
第37図 SD 7 出土土器実測図



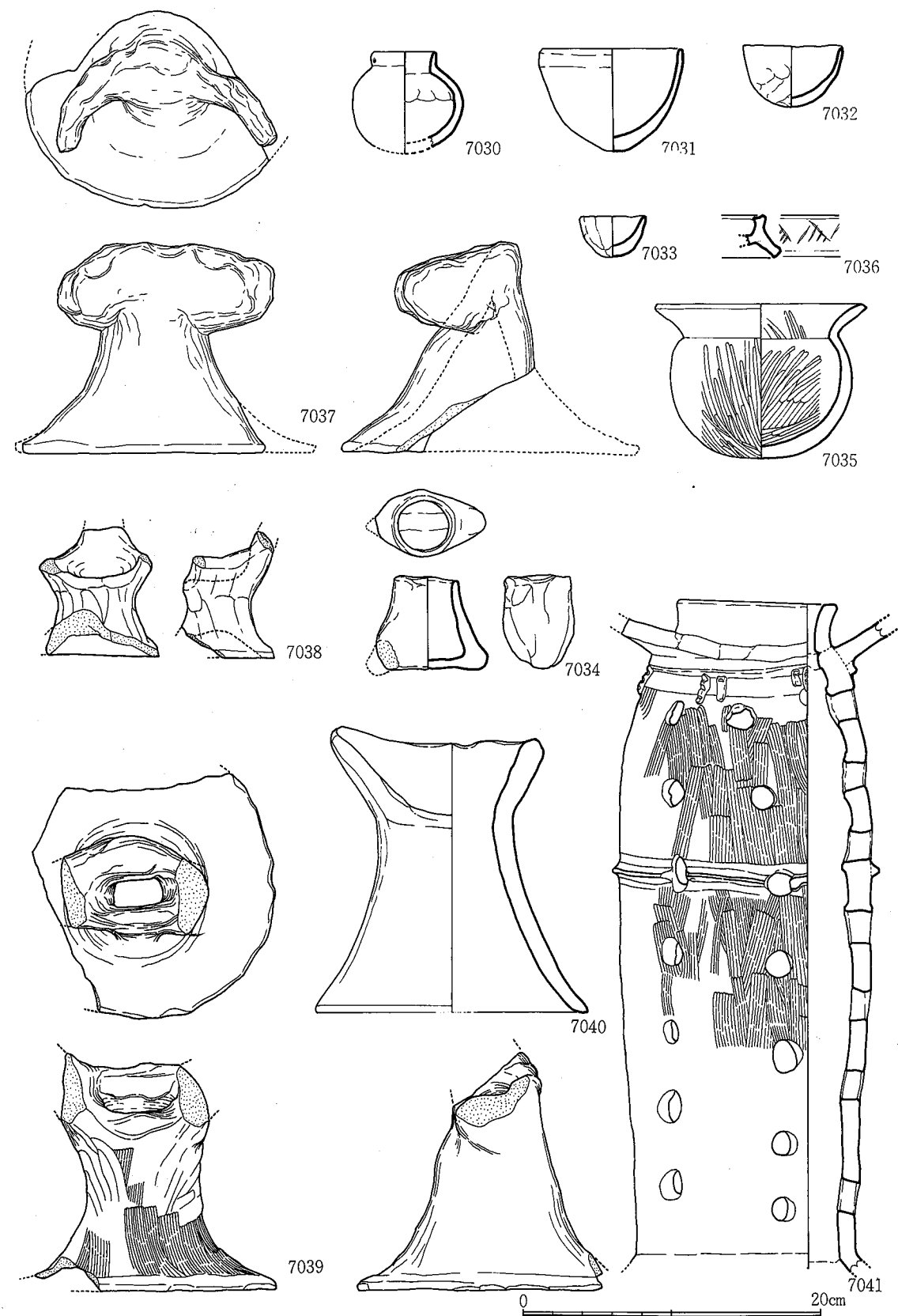
第38图 SD 7 出土土器实测图



第39图 SD 7 出土土器实测图



第40图 SD 7 出土土器实测图



第41图 SD 7 出土土器实测图

遺物番号	器 種	色 調	胎 土	形 態 の 特 徴	調 整	備 考	Fig.PL
7001	壺形土器	赤褐色	微砂粒多	朝顔に開く口縁部は先端で肥高し、3本単位の隅凹浮文を配す	内面 ヨコナデ	丹塗り	
7002	"	黄褐色	砂粒 多	胴部に3条キザミ突帯を貼る	外面 ヨコナデ		
7003	"	"	"	外反する口縁部に肥高させ、隅浮文を配す外周には山形文を施す	外面 ヨコナデ、口縁部ヨコナデ		
7004	複合口縁壺	赤褐色	微砂粒多	外反する口縁部に短く内傾する拡張部	内面 口縁部から外面拡張部までヨコナデ		
7005	"	"	"	外傾気味に立ち上がる口縁は先端で横に開き、内傾し若干先端で直立する拡張部	内面 口縁部ヨコナデ 外面 頸部ヘラ研磨	70	
7006	"	黄褐色	砂粒 多	頸部にキザミ突帯を貼り、外反する口縁部に内傾する拡張部、外周鋸歯文を施す	内面頸部ハケメ、口縁部内外共ヨコナデ	70	
7007	"	"	"	外反する口縁部は先端で横に開き、短く内傾する拡張部	拡張部は内外共ヨコナデ	丹塗り?	
7008	"	茶褐色	"	ナデ肩の胴部から外反する口縁部、頸部にキザミ突帯をつけ、1対の隅凹浮文を5ヶ所に配す	外面 口縁部から胴部にかけてハケメ	胴部穿孔	
7009	"	黄褐色	"	直立気味に外反する口縁部に、内反する拡張部、外周に斜格子文を施す	拡張部は内外共ヨコナデ 内面 口縁部はハケメ?		
7010	短頸壺	"	砂粒 少	胴部平偏球で丸底を呈し、短く外傾する口縁部	内面 頸部付近指圧 外面 口縁部から胴部にかけてヘラ研磨		
7011	広口壺	"	砂粒 多	胴部は肩が張り、尖り気味の丸底仕上げ、直立気味に外反する口縁	内外共 ヘラ研磨		
7012	脚付広口壺	赤褐色	微砂粒少	偏平球の胴部にわずかな口縁、脚は外に開く、透し4ヶ	外面 口縁部は内外共ヨコナデ、胴部から脚部にかけてヘラ研磨	丹塗り	
7013	複合口縁壺	黄褐色	砂粒 多	卵形形の胴部に平底を呈し、外反する口縁、拡張部は剥離して無い。全体にカーボンが付着し、壺から甕への転用?	外面 荒いハケメ		
7014	壺形土器	茶褐色	"	偏平球形の胴部で平底	内面 胴部ハケメ、口縁部ヘラ研磨 外面 胴部ハケメのちヘラ研磨	70	
7015	"	"	"	台付壺(甕)? 台は貼りつけによる	外面 胴部木口ハケメ、台は内外共ヨコナデ		
7016	単口縁壺	"	"	胴長で平底、口縁は短く、外傾、造りは雑で器肉も厚い	内面 胴部上位は木口で乱雑なナデツケ、下位はハケメ 外面 口縁部内外共ヨコナデ		
7017	"	"	砂粒 多	胴部卵形平底、全体に丁寧な造り	内面 胴部ハケメ、口縁部ヨコナデ 外面 口縁部ハケメのちヨコナデ、胴部ハケメ	70	
7018	台付鉢	赤黄褐色	"	台は貼りつけによる	内面 胴部木口ナデツケ、口縁部内外共ヨコナデ 外面 ハケメ		
7019	"	"	"	胴部径より直立気味に外反する口縁径の方が小さい。台は貼りつけによる	内面 胴部木口ナデツケのちナデ、口縁部は内外共ヨコナデ 外面 胴部ハケメ	70	
7020	鉢形土器	黄褐色	"	平底で口縁部は先端で若干内湾している	内面 胴部ハケメ、口縁部内外共ヨコナデ 外面 胴部ハケメ		
7021	甕形土器	"	微砂粒多	胴部径より口縁径の方が小さい	内面 胴部下位木口ナデツケ、上位ハケメ 外面 胴部木口ナデ、口縁部は内外共ヨコナデ		
7022	"	赤褐色	"	頸部がしまり平底で胴部径より口縁径の方が小さい	内面 胴部下位はハケメ上位はナデ、口縁部はハケメ、のちヨコナデ、外面ハケメ、口縁部はヨコナデ	カーボン付着	70
7023	"	"	微砂粒多	胴部径より口縁径の方が小さい、平底	内面 全体荒いハケメのち口縁部はヨコナデ 外面 細いハケメ、底部付近木口ナデツケ		70
7024	高 坏	"	"	裝飾高坏の脚部、短い筒形に2段に渡る脚部、透しは上段10ヶ、下段8、酸に2段竹管文施す	内面 ハケメ 外面 ハケメのちヘラ研磨	丹塗り	
7025	"	茶褐色	砂粒 多	坏部は底部付近で腹をなし、内彎する口縁、坏部と脚部の接合は粘土塊充填法、透し4ヶ	内面 坏部木口ナデのちヨコナデ 外面 坏部ヨコナデ、坏底部は木口ハケメ、脚部ヘラ研磨		
7026	"	黄褐色	"	坏部中位に腹をなし、外反する口縁、脚との接合は7028に代表される。透し4ヶ	内面 坏部不定方向のヘラ研磨 外面 坏部不定方向のヘラ研磨、全体に雑		
7027	"	"	"	坏部中位に腹をなし、大きく外反する口縁、接合は円盤充填法。透し4ヶ			
7028	"	"	"	7027と同じ形態、接合は、坏部に脚部を挿入透し3ヶ	脚部はヘラ研磨		
7029	"	"	"	部は上位で短く外反する口縁、接合は7028と同じ。透し5ヶ			
7030	ミニチュア土器	"	"	胴部球形で口縁部は短く直立する	内外共指圧、口縁部のみヨコナデ		
7031	"	"	"	口縁部は若干内彎気味	内面 ヨコナデ 外面 タチナデ		
7032	"	"	"		内面 丁寧なナデ 外面 指圧		
7033	"	"	"		内面 丁寧なナデ 外面 指圧		
7034	"	"	"	革袋を模したものと思える。全体に指圧痕が残る		70	
7035	小形壺	"	"	胴部は球形よりやや偏平気味、底部にモミ痕が残る	内面 胴部ヘラ研磨、口縁部ヘラ研磨 外面 胴部ヘラ研磨、口縁部ヨコナデ		

表11 S D 7 出土土器観察表

遺物番号	器 種	色 調	胎 土	形 態 の 特 徴	調 整	備 考	Fig.PL
7036	器 台	赤褐色	微砂粒多	口縁部が脚部かは不明、外周に鋸歯文を施す			
7037	"	"	砂粒 多	円垂台に左右の翼をつける			70
7038	"	"	"	左右に翼をつけ、後部に突起をつける			
7039	"	茶褐色	"	円垂台に左右の翼をつける、7037よりも上位前方に延びる			
7040	"	"	"	受け部に入ぐりを入れる			70
7041	"	暗赤褐色	微砂粒少	大形の円筒で、口縁部は朝顔形に開く。頸部に2単位の隅凹浮文を6ヶ所配し、上位に三角突帯を貼りつけ、透しを穿孔したのちに施す。7段7ヶ、内面は指ナデ、外面はハケメ			70

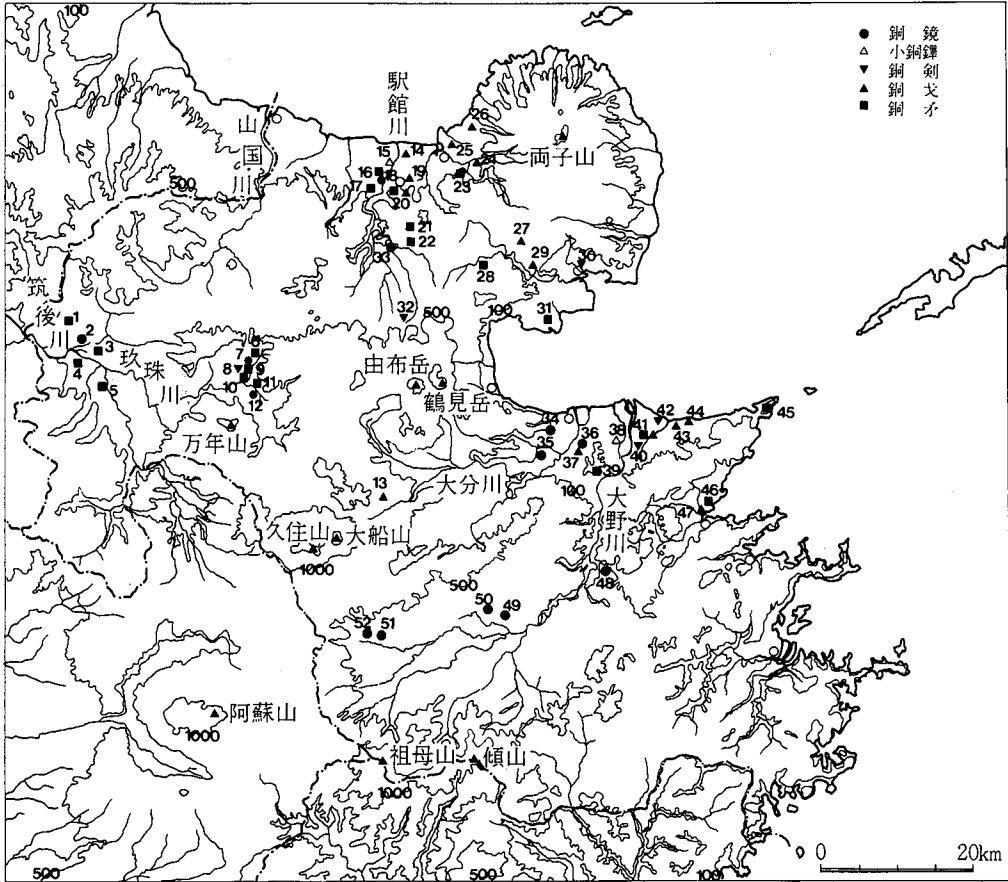
表12 S D 7 出土土器観察表

第4章 まとめ

1. 本遺跡は、弥生時代後期終末に営まれた竪穴式住居跡と濠状遺構跡を主体とする囲郭施設をもつ集落跡である。
2. 住居跡は、4軒検出し内3軒は円形を呈している。従来九州では弥生時代後期の竪穴住居跡は、平面プランを方形とするのが一般的であり、北九州地域では中期から後期に移行するに仕がって円形から方形に変化する現象がみられる。^(註1) 大分県下においても後期の住居跡の平面プランが方形を呈する事は過去の報告された遺跡の範疇を出る事はなかったが、大分川下流域の守岡遺跡に後期終末の円形プランを呈する住居跡が6軒検出している。^(註2) これらの資料は円・方形混在地域である瀬戸内沿岸との関連を追求するうえでの良好な資料と思われる。
3. 集落の形態について言及すれば、比高差20mの台地上に立地し東側は急崖で大野川及びその間の沖積地さらに別府湾の海岸線を一望できる。西側の鶴崎段丘と隔絶させる為2本の濠状遺構と土塁等の施設を想定できる事から、防衛的性格をもった集落と思われる。
4. 濠状遺構跡検出の土器群は、濠埋土は構築後漸次堆積したものではなく比較的短期間に堆積したものであり、層位による時期差は認められなかった。

土器を形態別に観察すると複合口縁壺は、胴部の最大径は中位が主体であり、底部は若干尖り気味の丸底のものと丸味を帯びた平底を呈す。頸部は突帯を施すものとなないものがあり、施すものの中には三角突帯、キザミ三角突帯、斜行子状の突帯がある。口縁部は外反し拡張部は内傾あるいは内反する。拡張部外周は波状文を主体とし、他に竹管文、鋸歯文、羽状文等がみられる。調整はハケメ主体で木口等の板状工具での強いナデツケもみられる。全体に成形・調整は雑である。形態・施文を含めて北九州系の様相が強い(6042、6048、7005、7007)ものと西部瀬戸内系(6039)、中部瀬戸内系(3024、3026、3031、3045)の影響を受けたものが掲げられ、それぞれの地域との交流を強く示す様相を呈している。^(註3) 甕形土器は、口縁部径より胴部最大径の方が大きくなるものが主流をなし、底部は尖り気味の平底と丸味を帯びたものとが混在し、丸底化する傾向をみせている。調整は内

外ハケメが主体である。一部(6079)に胴部外側上位にタタキを行之ちにハケメを施すものもみられ、(6073、6087)の胴部内側下位にみられるヘラ削り風の本口あるいは板状工具で強くナデツケている調整もみられる。ヘラ削りは破片で観察しているだけで形態は明瞭でない。高坏形土器は、坏部の中位で陵をつけ短く外反するものと、長く横に外反するものとが主流をなしている。注目されるのは、坏底部は丸く口縁部は大きく外反し、さらに先端で短く内傾する拡張部を形成し、脚部は短い筒状で裾はゆるやかに2段にわたって開くもの(6125)と、坏部は段皿状を呈し、脚部は短い筒状で裾は鋭く2段に開き、裾部で陵をなす部分には突帯を貼りつけ突帯下に「3」状の連続竹管文を施す(3077)があり、これらは安国寺遺跡で賀川氏が分類した高坏Ⅰ類^(註4)と思われる。器台形土器は、鼓形、鼓形で上部をえぐったもの、大形の筒形、有翼形がある。



1 津江山(銅矛形式不明)	2 草場(後漢鏡片1)	3 大原神社蔵(中広矛1)	4 石井神社蔵(広形矛1)	5 老松神社蔵(中広矛1)
6 久慈(中広矛1)	7 名草台(後漢鏡片1)	8 仲平(細形Ⅱc剣1)	9 角群山(中広矛1)	10 元畑(中広矛1)
11 帆足(中広矛2)	12 おごもり(後漢鏡片1)	13 森木(中広矛3)	14 崎崎(銅戈形式不明)	15 別府(朝鮮式小銅鐸)
16 法鏡寺上原(広形矛2)	17 法鏡寺下原(広形矛1)	18 法鏡寺上原(後漢鏡片1)	19 宇佐高等学校(中広矛1)	20 宇佐/権造蔵(中広矛2 中広矛7)
21 切寄(中広矛1)	22 谷迫(中広矛7)	23 来純(中広or広形矛13)	24 美和館(広形矛2)	25 弘田大原(細形Ⅱa矛1)
26 草地(中広矛3)	27 山口赤迫(中細c矛1)	28 北ノ原(広形矛?1)	29 藤原下野(中広矛2)	30 野田新宮(細形剣?1)
31 尾首山(広形矛7)	32 安心院町(銅剣形式不明)	33 宮ノ原(後漢鏡片2)	34 尼ヶ城(後漢鏡片1)	35 雄城台(後漢鏡片2)
36 守岡(前・後漢鏡片各1)	37 龍尾岩尾(細形Ⅱb矛1)	38 多武尾(小銅鐸)	39 京ヶ尾(中広矛5)	40 清水ヶ迫(平形Ⅰ剣1)
41 木田名辺山(矛?2 広形or中広矛3)	42 辰(中細b剣1)	43 久原(細形Ⅰa矛1)	44 細(細形Ⅰa矛1)	45 幸ノ浦(中広矛1)
46 坊主山(広形矛7)	47 藤防山中(中細a矛1)	48 原(後漢鏡片1)	49 松ノ木(後漢鏡片1)	50 二本木(後漢鏡片1)
51 小瀬(後漢鏡片1、仿製鏡1)	52 石井入口(後漢鏡片2、仿製鏡2、船載鏡片1、朝鮮系小銅鐸1)			

第42図 大分県出土の青銅器分布図

※形式分類は「青銅の武器」九州歴史資料館1980・を引用した。

総じて本遺跡出土の土器群は、在地で主体をなすハケメ・ナデ等の調整の他に、ヘラ削り、タタキの外來系の調整は一部であるが認められる。製作技法等において在地土器の組成に大きな影響を占める事が変革的な様相として捉えるなら、濠状遺構検出の土器群を観察した限りではハケメを主体とする在地技法は依然として固執的であり、壺形土器、甕形土器などの器形は丸底化する傾向にある。高坏形土器においては畿内の様相を呈した器形も現われ、在地の土器群に瀬戸内以東地域の影響を受けた土器が現われ始める段階として理解しておきたい。

5. 小銅鐸の発見は、これまで九州で発見された小銅鐸と同様集落の廃絶に関わるものであった。銅器の住居跡廃棄として小銅鐸の他に鏡片があり、近年大分県下では終末期の住居跡から舶載鏡片、小型仿製鏡の発見が増加しており、現在まで10遺跡19例を数える。これに墓域例を含めると13遺跡22例となる。

墓域例は日田、玖珠地域に限られ副葬品として発見されている。住居跡から発見された遺跡は全て安国寺式土器の分布する地域であり、日田・玖珠地域は分布圏外での発見であった。安国寺式土器の分布圏内での小銅鐸と銅鏡片廃棄の共通点は、集落を通じての現象である事と廃棄された時期がほぼ同じであり、古墳時代に入る前に廃棄せねばならなかった性質のものであった事が^(註5)掲げられる。しかし廃棄以前のそれぞれの役割については今後資料の増加をもって検討せねばならない。

さらに小銅鐸の発見された地域は、銅鏡の他に細形戈、中広戈、中広矛が集中する所であり、小銅鐸のみならず九州での青銅器鑄造開始時期を追求するうえで関連づけて検討する必要がある。

註1 高倉洋彰、下条信行「宝台遺跡」日本住宅公団 1970。
註2 大分市教育委員会「守岡遺跡」 1979。
註3 山本一朗「山口県の土師器・須恵器・防長の土師器」周陽考古学研究所 1981。
(6039)の様なタイプは防長では7式に出現し、10式に消える様である。
註4 賀川光夫「大分県国東町安国寺弥生式遺蹟の調査」九州総合文化研究所 1958。

(3077、6125)の様なタイプの高坏は現在まで北陸から南九州に至る地域までみられるが、多く検出例をみない。検出例を掲げると「金沢市セツ塚1号墓」後期・「茨木市東奈良遺跡」庄内古段階・「愛媛県土壇原北遺跡」後期中葉・「山口県右田一丁田遺跡」庄内併行期・「大分県安国寺遺跡」庄内併行期・「宮崎県東平下1号周溝墓」等である。

註5 高橋徹「古文化談叢」第6集「廃棄された鏡片」の中で高橋氏は、「……弥生時代的なものの否定」としてとらえている。

多武尾小銅鉞の系譜

小 田 富士雄

これまで九州で発見された銅鉞およびその鋳型を発見年次順に示せばつぎのようになる。

1960	福岡県春日市小倉・大南	突線帯袈裟文銅鉞（図版2-8）	高 10.1 cm
1977	大分県宇佐市別府	朝鮮式小銅鉞（図版2-9、12）	高 11.8 cm
1978	福岡県春日市大谷	無文銅鉞石型片（裾部に鋸歯文追刻・片麻岩） （図版1-1）	推高 20 cm
1979	福岡県春日市須玖・岡本	無文銅鉞石型（片麻岩）（図版1-2）	高 5.9 cm
1980	佐賀県鳥栖市柚比町安永田	横帯文銅鉞石型（花崗岩）（図版1-4～7）	推高 20 cm
1981	大分県大分市横尾・多武尾	無文銅鉞片	推高 5.6 cm
1982	福岡県福岡市博多区赤穂ノ浦	横帯文銅鉞石型（砂岩）（図版1-3）	推高 20 cm

大南鉞（図版2-8）は後期の集落に伴う環溝内に廃棄されていた。後半ごろまで下る可能性があり、銅質も良くない。突線（袈裟文）銅鉞の模倣であろう。別府鉞（図版2-9）は終末期の土器とともに竪穴住居内に廃棄され、しかも故意に一撃してつぶされた状態であった。周縁の鱗や通常の鉞にみられる身と裾の対をなす型持孔もなく、身の中央と側面に1個の方孔をもつ。のちに復原して韓国忠清南洞槐亭洞鉞（図版2-10）より後出タイプである慶尚北道入室里の第1号鉞（図版2-11）に近似した大きさ、形状となることがわかった（図版2-12）。中期以前に韓国から流入したものが伝世したのであらうと考えられる。大谷鉞型（図版1-1）は中細矛型とともに同一住居跡から発見され、ともに片麻岩であった。この遺跡では細形剣型2（片麻岩）、中広戈型1（砂岩）、中広矛型1（砂岩）が発見されており、伴出土器によって中期後半から末頃とされている。鉞型から推定される大きさは約20cmで、その石材とも合せて朝鮮式小銅鉞の形態が推測できる。その後これと接合する裾部鉞型片が知られたが鋸歯文が追刻されていた。朝鮮式鉞から国産古式鉞への推移を示しているであらう。岡本鉞型（図版1-2）は最小の完形型で墳墓や住居跡の群集する遺跡での単独出土である。片麻岩を使用した無文・無鱗で、舞の中央に一孔を設けているなど朝鮮式小銅鉞と共通するところが多い。調査者は中期中頃前後の焼土や住居跡との関係に注目されており、大谷鉞型より古く位置づけようとしている。安永田鉞型（図版1-4～7）はこれまで5個の石型片が発見されており、本格的な外縁付鈕式横帯文銅鉞である。福田鉞（広島）、木幡鉞（島根）などに近似した邪視文鉞の系統である。石材は育振山系産の花崗岩の一種と鑑定された。中期後半～末頃の住居跡から発見された。赤穂ノ浦石型（図版1-3）は住居跡上の包含層から発見されたもので、安永田

鉞型と同系列に属する銅鉞の石型である。中期末頃かと推定される。

以上九州地方で発見された銅鉞およびその鋳型の増加によって、近畿地方とも対比しうる横帯文銅鉞の生産が中期後半に行われていたことが明らかにされてきた。また一方では岡本鉞型や大谷鉞型のような朝鮮式小銅鉞の形態を継承した無文小銅鉞の生産も行われており、その開始は中期中頃を上限として、横帯文銅鉞とも並行するにいたっていることが明らかになってきた。さらに別府鉞にみられるような朝鮮式小銅鉞の初例も発見されるにいたり、おそらく中期中頃までにわが国にもたらされたものが終末期にまで伝世しながら祭祀の用を果していたと考えられたのである。したがって北部九州においては、中期中頃～末期の期間に①朝鮮式小銅鉞の輸入→②その模倣生産→③横帯文銅鉞の生産という推移があったことが明らかにされてきた。そうして②から③への推移のなかで鋳型石材も朝鮮と同系の片麻岩材から花崗岩、砂岩へと推移している。しかし近畿地方にみるような菱環鈕式有文鉞や流水文銅鉞の発見はまだない。

多武尾鉞は最小の銅鉞であるが、また無文、無鱗で朝鮮式小銅鉞の系列に属する。大南鉞などにくらべれば銅質もよい。本銅鉞の最も特色ある点は舞の中央にやや大きな一孔を有することである。一般の国産銅鉞では舞の短軸上に二孔があり、鉞身の上面と裾に各々一對の型持孔がみられるので、このような形態はきわめて注意を引き、発見時には後期終末の土器を伴するところから銅鉞の最終末に位置づけられる変型された残存形態かと思われた。しかしながら、別府鉞や岡本鉞型など中期を下らない頃に生産された小銅鉞や石型には舞の中央に一孔を設けている点が注目されてくる。さらに近年佐賀県下で発見された鉞形土製品（土製鉞）は中期後半代に比定されるものであるが、舞の双孔が短軸上にあるもの（図版2-13・14）と、長軸上にあるもの（図版2-15）があってまだ定型化していない。また近時発見された東大阪市鬼虎川遺跡の畿内第Ⅲ様式土器段階以前に比定される土製鉞では舞の短軸上に三孔を並列させている。さらに国外に目を転ずれば北朝鮮の雲城里（黄海南道）、「夫租蔵君墓」（平安南道貞柏里）などの小銅鉞で舞の中央に一孔を有するものを見出すことができる。したがって当初わが国に輸入された朝鮮式小銅鉞（別府鉞）や最初に模倣生産した小銅鉞（岡本鉞型）にこの特徴をみることができる点はきわめて示唆的である。すなわち多武尾鉞は中期後半にさかのぼって北部九州の地で生産されたであらうと推測される可能性が大きい。それが別府鉞と同じように集落内祭祀に使用されて弥生時代の終焉という歴史的背景のもとに廃棄されたものであったと思われる。近時大野川流域で発見例の多い鏡片廃棄の現象と同じ内容を示しているであらう。

舞孔が短軸上に双孔をすえる製作法は横帯文銅鉞の出現とともに次第に定型化していったものであらう。

多武尾鉞は北部九州で青銅器の鋳造が開始された第1段階の作品であり、剣、矛、戈などの武器形祭器も銅鉞形祭器もまず朝鮮系遺物の模倣から始まっている点で規を一にしていたのである。その時期は西暦1世紀前半代に比定することができるであらう。（1982・8・27 稿了）

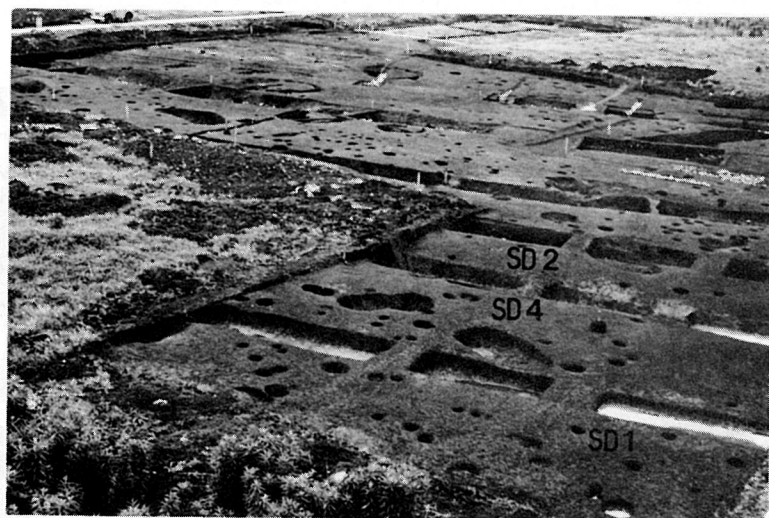
図版2九州発見銅鋳(8・9・12)土製鋳(13・15)および朝鮮発見小銅鋳(10・11)

4～7 鳥栖市安永田石型(佐賀)

図版1九州発見銅鋳鑄型



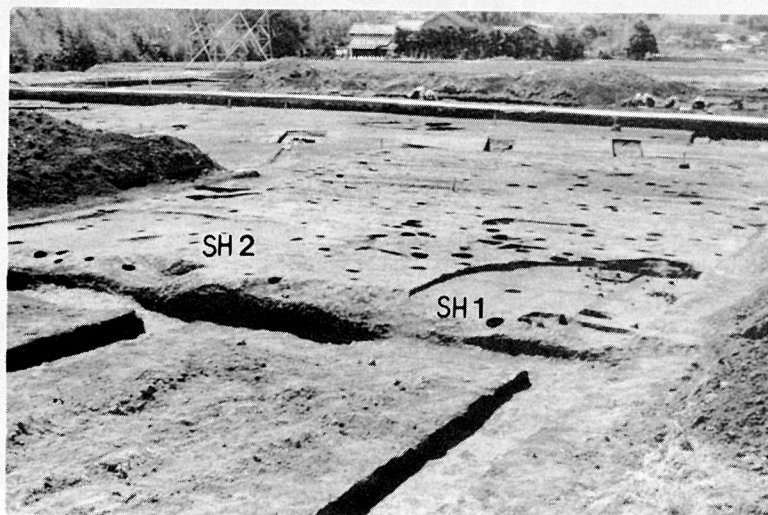
図版1 多武尾遺跡と周辺の航空写真



第1次調査区
南西方向より
SD-1, SD-4
SD-2, SD-3
SD-6を望む。

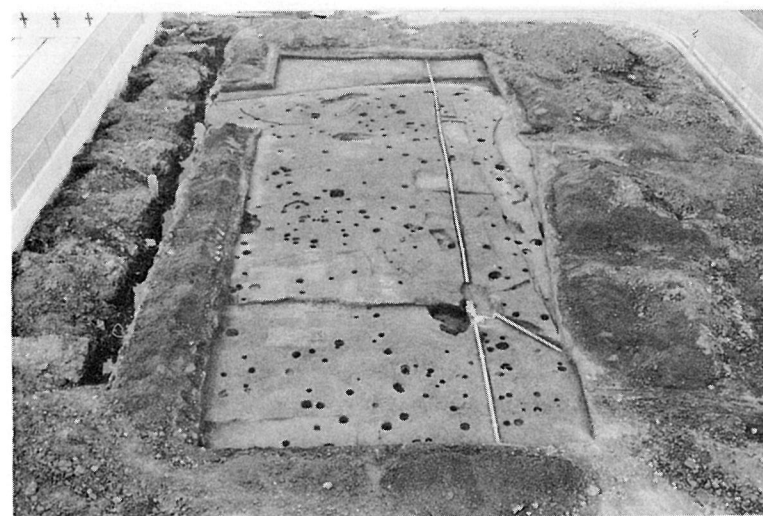


第1次調査区
南西方向より
SD-3, SD-6を
望む。

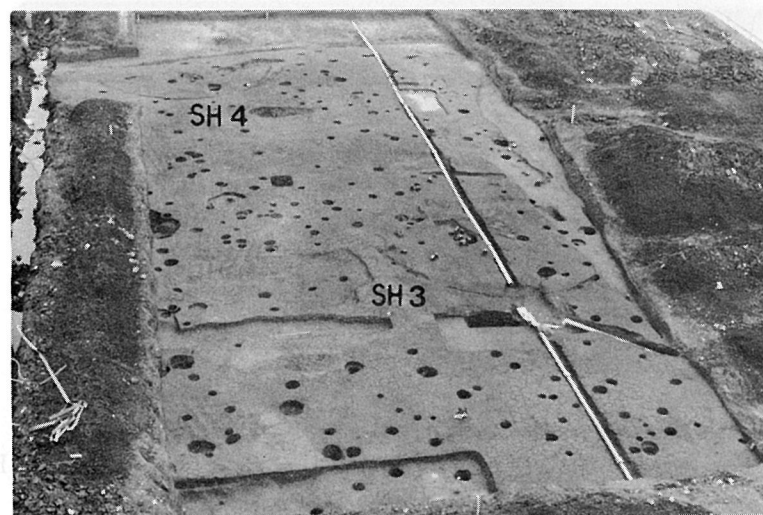


第1次調査区
北東方向より
SH-1を望む。

図版2



第2次調査区
東方向より全景



第2次調査区
東南方向より全景

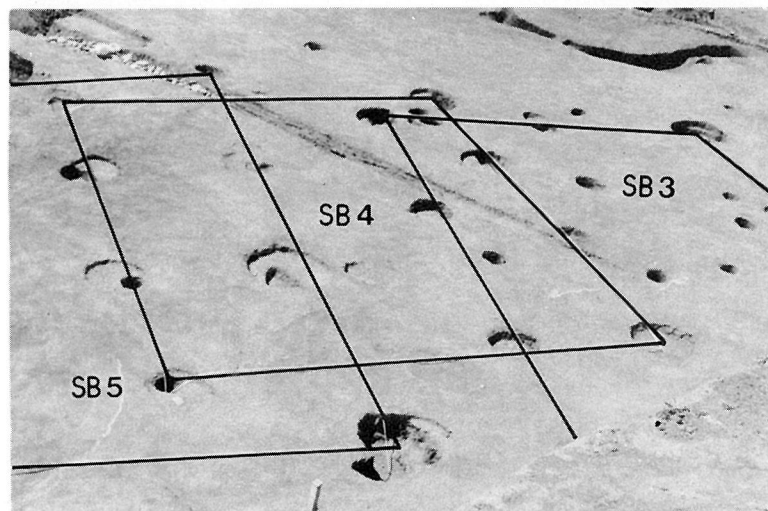


SH-3北方向より

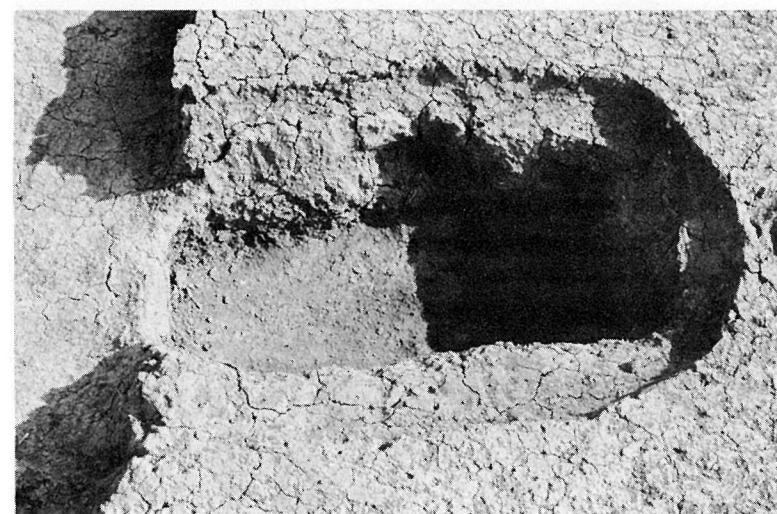
図版3



SH-1
北東方向より



SB-3, SB-4, SB-5
南東方向より

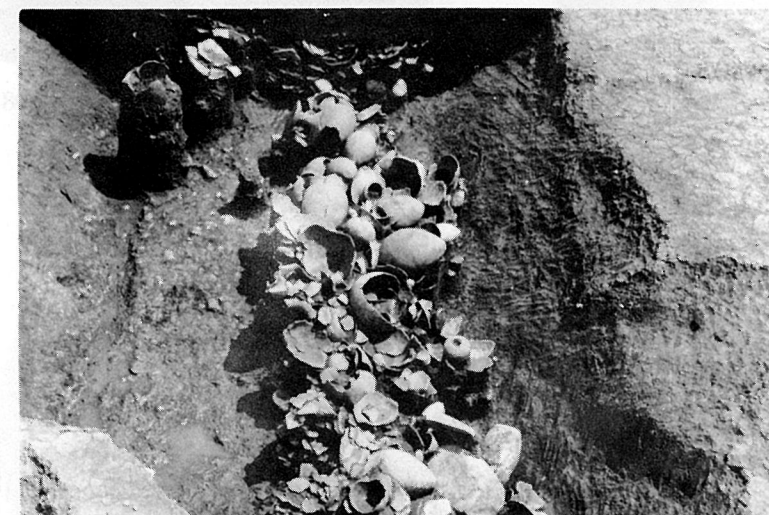


SK-1
西方向より

図版 4



SD-6
北方向より

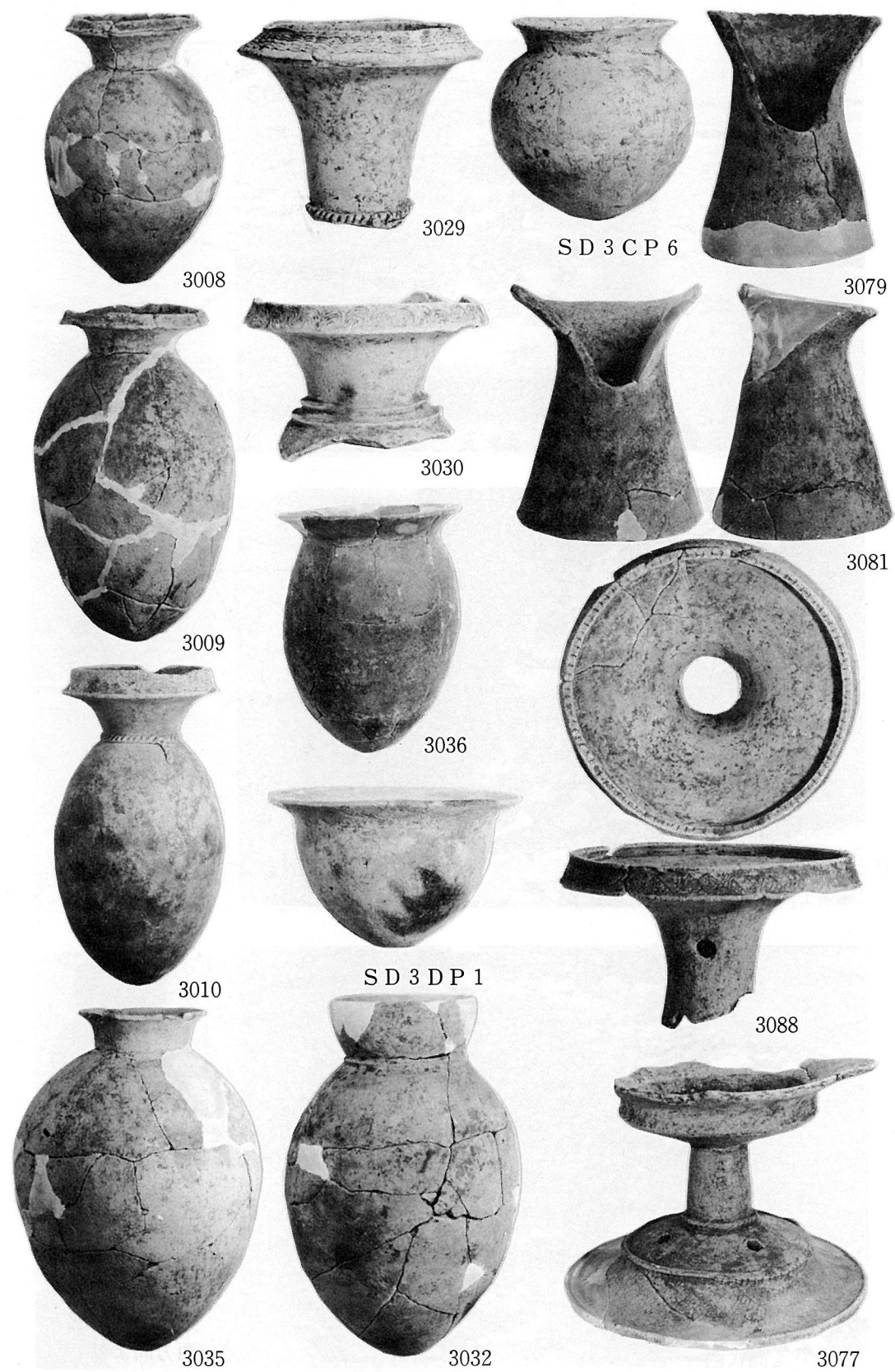


SD-6E 8区
土器出土状態
北方向より

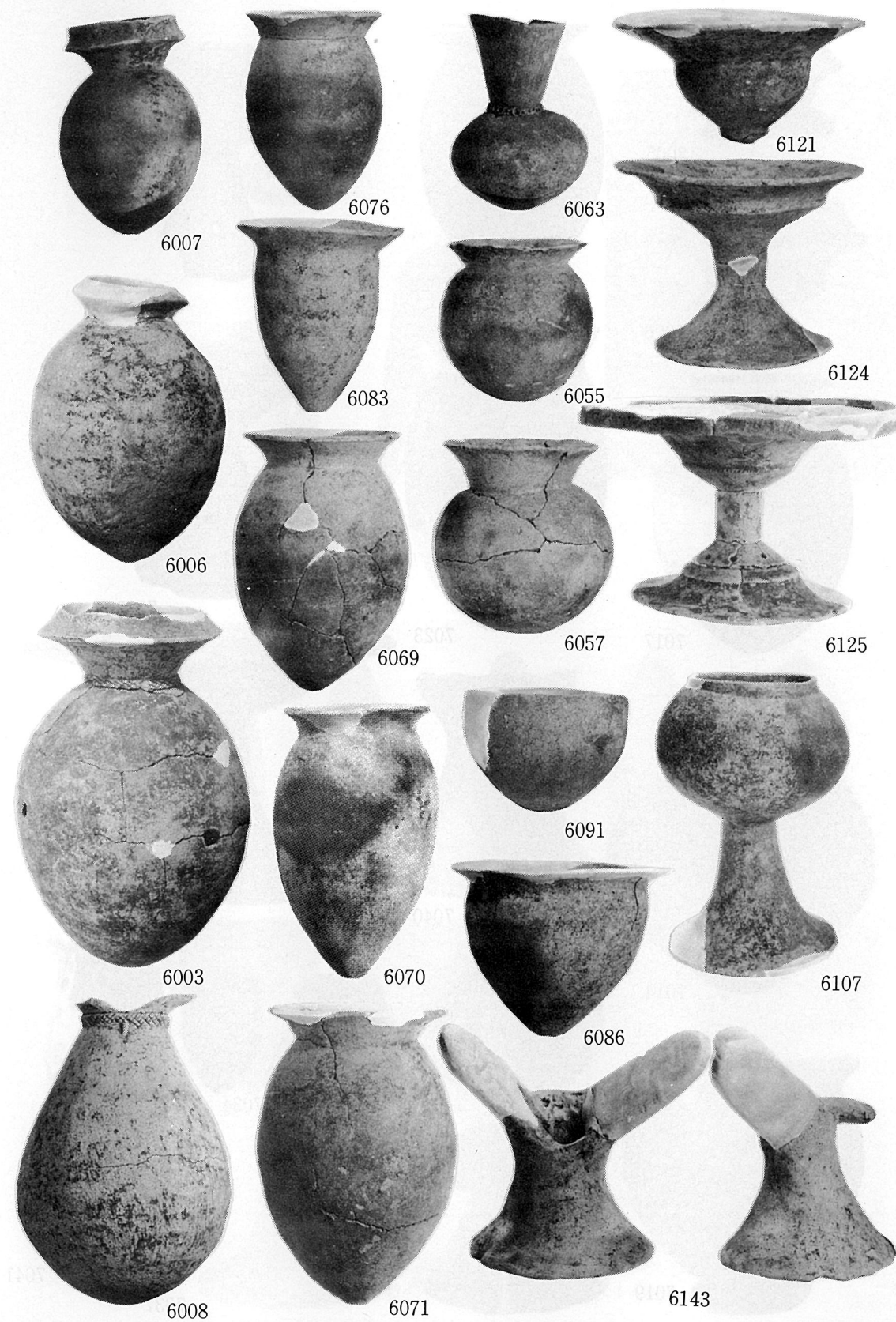


SD-7 I 9区
土器出土状態
西方向より

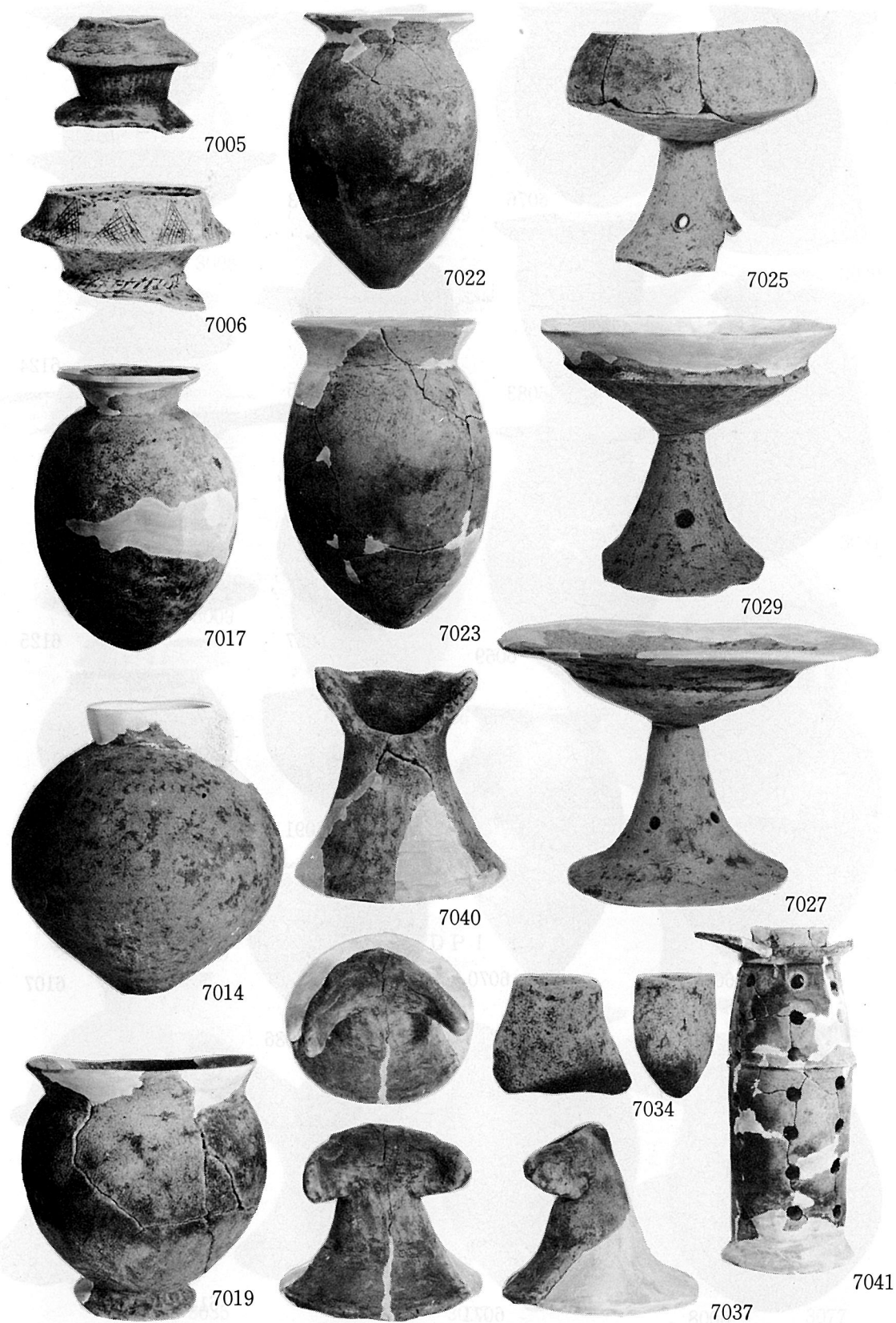
図版 5



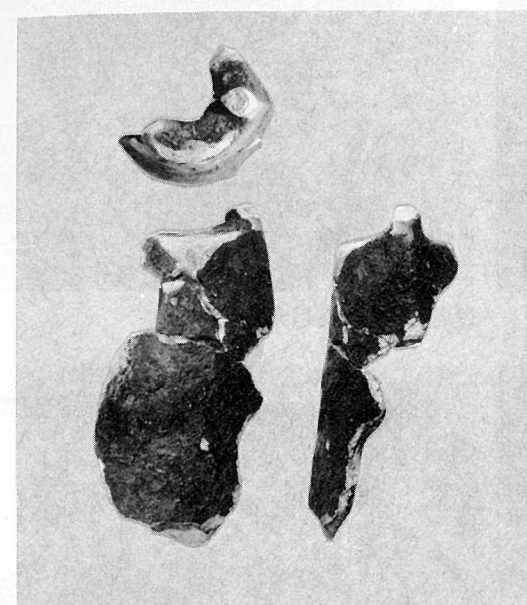
図版6 SD3出土土器



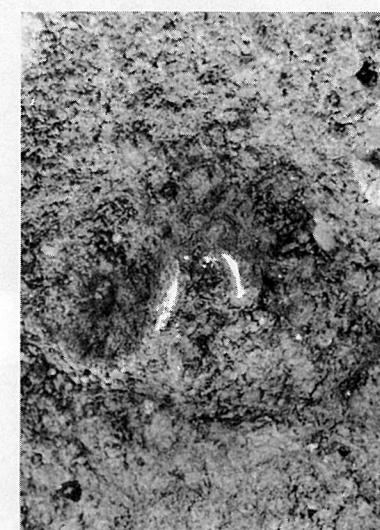
図版7 SD6出土土器



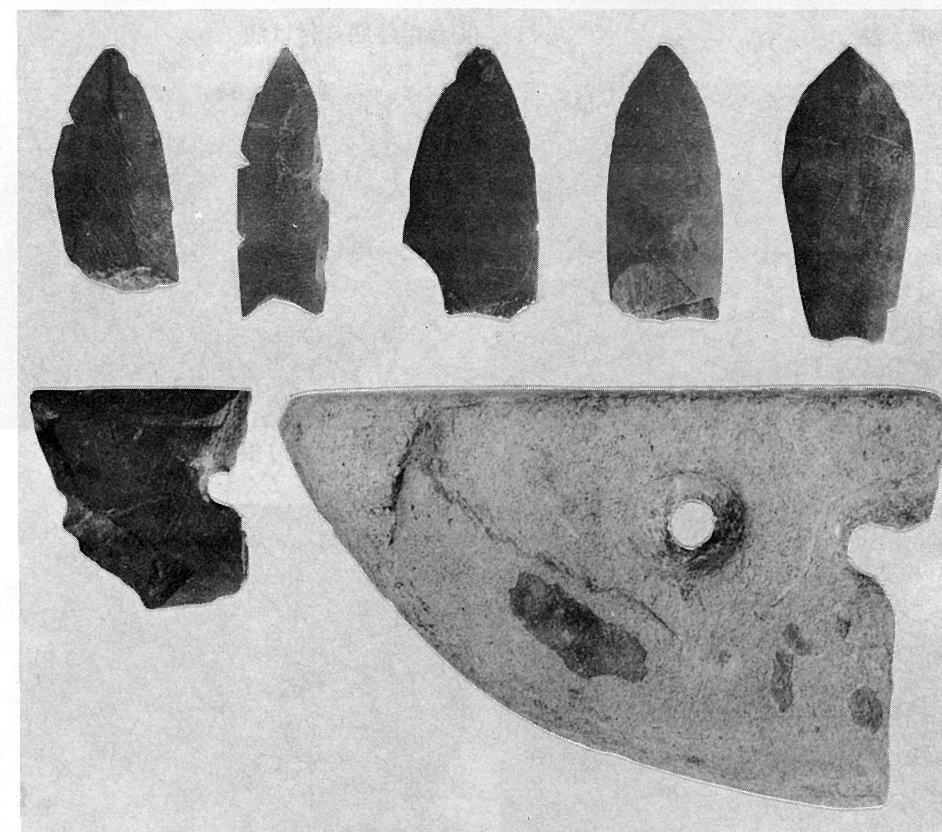
図版8 SD 7 出土土器



小銅鐸(縮尺1/1)

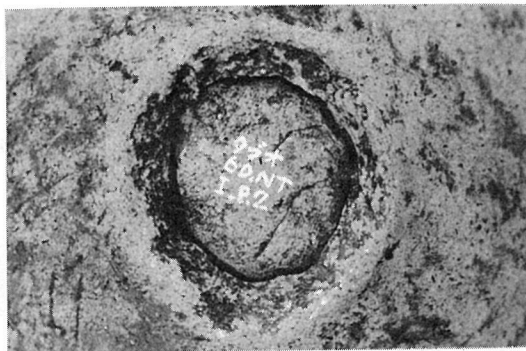


小銅鐸出土状態

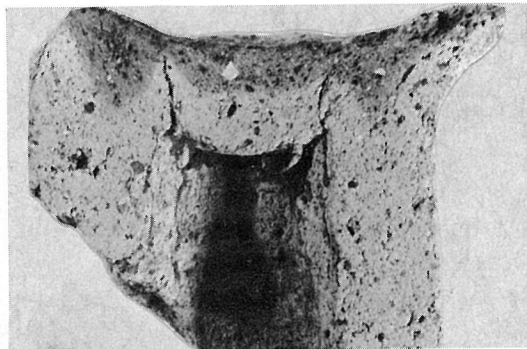


磨製石鏃・磨製石庖丁(縮尺1/1)

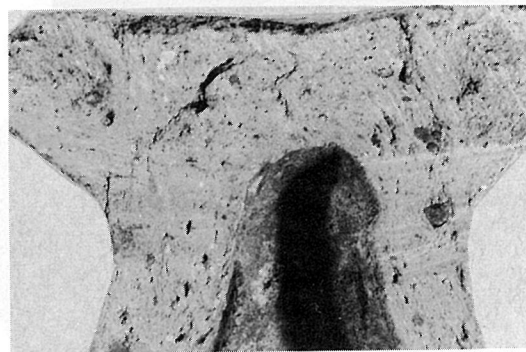
図版9 小銅鐸及び磨製石鏃・磨製石庖丁



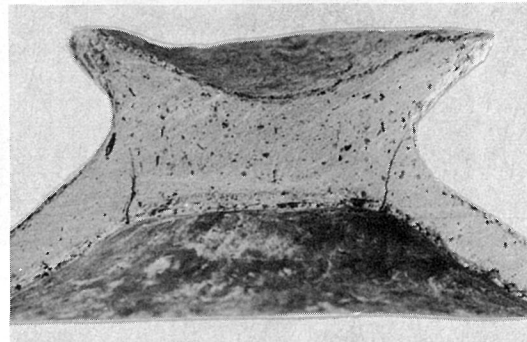
①高杯6125円盤充填法



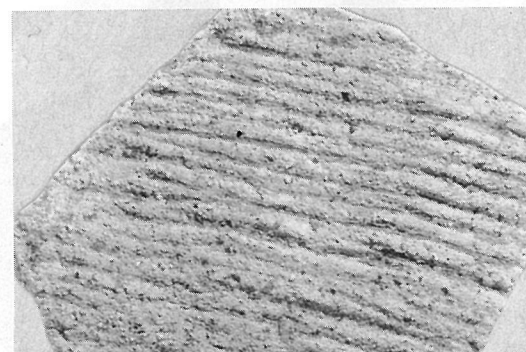
②高杯3065突起充填法



③高杯挿入法



④台付鉢貼り付け法



⑤調整タタキ痕



⑥調整ヘラケズリ痕



⑦布目痕



⑧糸痕7035

図版10 接合法及び調整・布目・糸痕 ※番号は土器通し番号と同じ

多武尾遺跡調査概報

昭和57年12月

発行 大分市教育委員会
〒870 大分市荷揚町2番31号

印刷 (有) 三重野印刷社
大分市岩田町2丁目